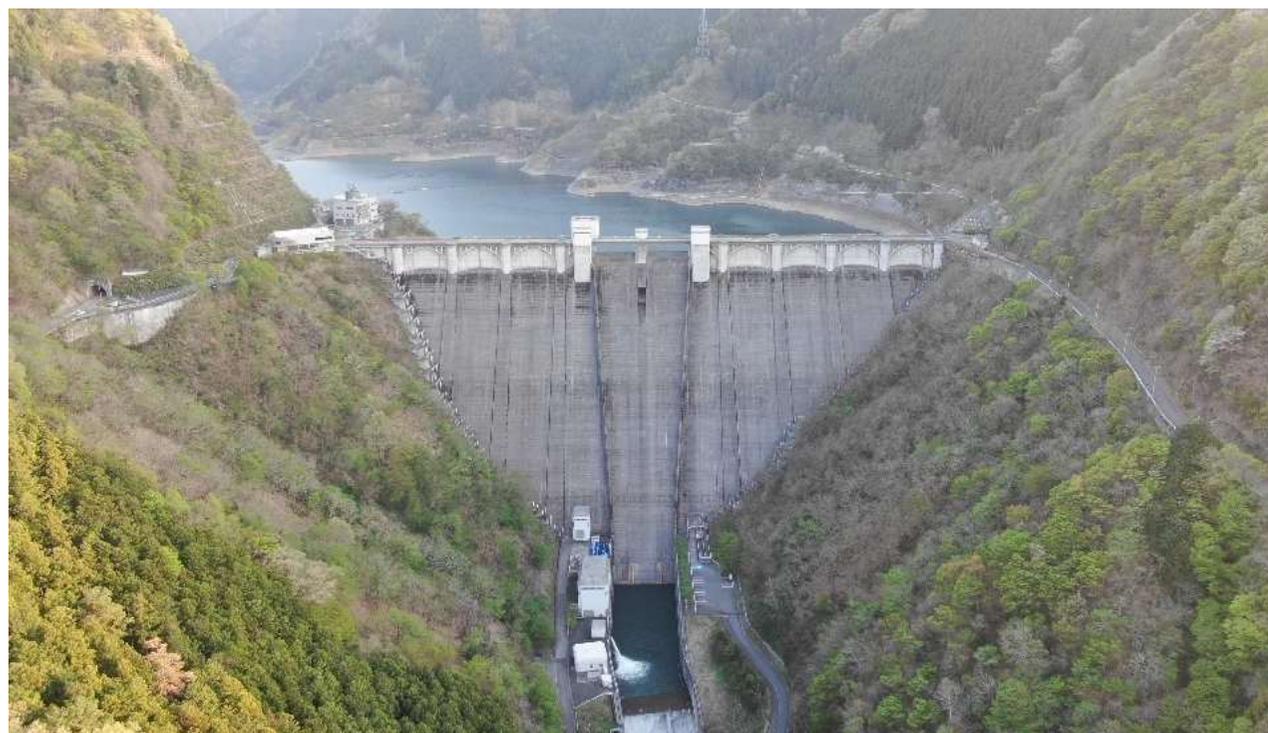


第34回
関東地方ダム等管理フォローアップ委員会

浦山ダム 定期報告書の概要

令和7年12月8日
独立行政法人 水資源機構



浦山ダム定期報告書の作成について

- この定期報告書は、「ダム等の管理に係るフォローアップ制度（平成14年7月）」に基づき5年毎に作成するものである。
- 浦山ダムの定期報告書については、平成15年度に1回目（H16.2.2 第12回関東地方ダム等管理フォローアップ委員会（以下、「フォローアップ委員会」という）にて審議）を作成しており、今回は5回目の定期報告書作成となる。

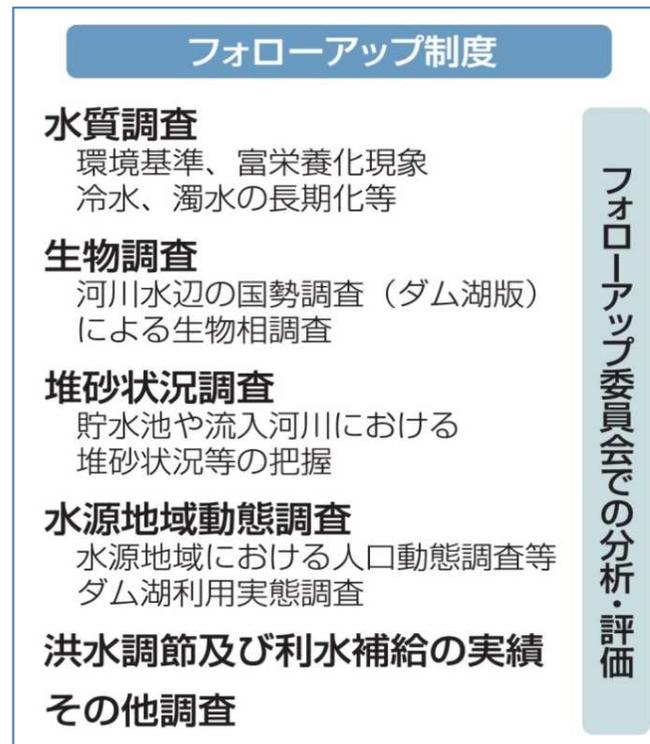
● これまでの経緯

- 平成10年度 浦山ダム完成
- 平成11年度 管理開始
- 平成14年度 フォローアップ制度の施行
- 平成15年度 事後評価、フォローアップ制度に基づく定期報告（第1回）
- 平成20年度 フォローアップ制度に基づく定期報告（第2回）
- 平成25年度 フォローアップ制度に基づく定期報告（第3回）
- 平成30年度 フォローアップ制度に基づく定期報告（第4回）
- **令和7年度 フォローアップ制度に基づく定期報告（第5回）**

【評価対象期間 平成30年～令和6年】

ダム等管理フォローアップ制度の概要

- ダム等管理フォローアップ制度は、管理段階のダム等について、一層適切な管理が行われることを目的としている。
- ダム等は管理状況を適切に把握し、これを分析することが重要である。
- このため、管理段階における洪水調節実績、環境への影響等の調査を行い、この調査結果の分析を客観的、科学的に行う。
- 調査・分析にあたっては、各ダム等は5年に1度、フォローアップ委員会において意見をいただく。
- より良いダム管理にむけた改善提案と市民への情報提供を目的に、5年ごとに定期報告書を作成、公表する。



1. 事業の概要	・ ・ ・ ・ ・	5
2. 洪水調節	・ ・ ・ ・ ・	10
3. 利水補給	・ ・ ・ ・ ・	21
4. 堆砂	・ ・ ・ ・ ・	30
5. 水質	・ ・ ・ ・ ・	34
6. 生物	・ ・ ・ ・ ・	59
7. 水源地域動態	・ ・ ・ ・ ・	80

荒川水系における施設の完成状況

年	計画	ダム等	洪水	渇水
昭和22年			S22.9洪水(カスリーン台風)	
昭和33年			S33.9洪水(狩野川台風)	
昭和36年		二瀬ダム S36.12完成		
昭和39年		玉淀ダム S39.6完成		
昭和40年	荒川水系工事実施基本計画	秋ヶ瀬取水堰 S40.8完成		
昭和41年			S41.6洪水(台風4号)	
昭和42年		武蔵水路 S42.3完成		
昭和48年	荒川水系工事実施基本計画改定			
昭和49年			S49.9洪水(台風16号)	
昭和56年			S56.8洪水(台風16号)	
昭和57年			S57.9洪水(台風18号)	
昭和58年				S58渇水(取水制限4日、最大4%)
昭和59年				S59渇水(取水制限65日、最大30%)
昭和60年				S60渇水(取水制限38日、最大30%)
昭和61年		有間ダム S61.3完成		
昭和62年				S62渇水(取水制限55日、最大29%)
昭和63年				S63渇水(取水制限2日、最大15%)
平成2年				H2渇水(取水制限18日、最大29%)
平成3年			H3.8洪水(台風12号)	H3渇水(取水制限5日、最大8%)
平成4年				H4渇水(取水制限17日、最大15%)
平成5年				H5渇水(取水制限6日、最大15%)
平成6年				H6渇水(取水制限34日、最大29%)
平成7年				H7渇水(取水制限127日、最大15%)
平成8年				H8渇水(取水制限48日、最大15%)
平成9年		荒川貯水池 H9.3完成		H9渇水(取水制限21日、最大8%)
平成11年		浦山ダム H11.3完成	H11.8洪水(熱帯低気圧)	
平成13年			H13.9洪水(台風15号)	
平成15年		合角ダム H15.3完成 六堰頭首工 H15.4完成		
平成16年		荒川第一調節池 H16.3完成		
平成19年	荒川水系河川整備基本方針		H19.9洪水(台風9号)	
平成20年		滝沢ダム H20.3管理開始(一部)		
平成23年		滝沢ダム H23.4管理開始(全部)		
平成28年	荒川水系河川整備計画	武蔵水路 H28.3改築		
平成29年				H29渇水(取水制限52日、最大20%)
令和元年			R1.10洪水(台風19号)	
令和2年	荒川水系河川整備計画(変更)			
令和3年				
令和4年				
令和5年				
令和6年				
令和7年	荒川水系河川整備基本方針(変更)			

荒川流域の概要

- 荒川は、その源を秩父山地の甲武信ヶ岳(標高2,475m)に発し、滝川を合流し、その後中津川、浦山川等の支川を集めて秩父盆地を北流する。寄居に至って扇状地をなす埼玉県中央部の平野を貫流し、東京都北区志茂で隅田川を分派し、東京湾に注いでいる。
- 1都1県に跨り、幹川流路延長173km、流域面積約2,940km²である。



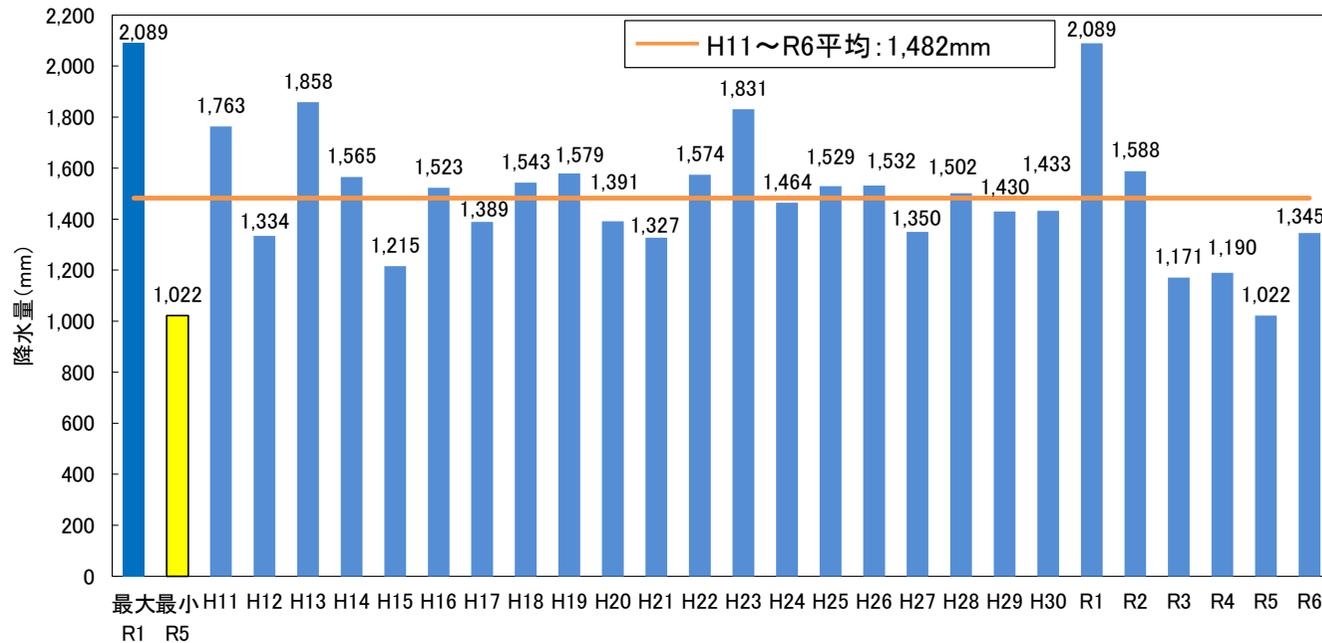
荒川水系の主な水資源開発施設

河川の諸元	
水系名	荒川水系
河川名	荒川
幹川流路延長	173km
流域面積	2,940km ²
流域内人口 (河川現況調査H22)	1,020万人
流域都県	埼玉県、東京都
経済活動 (県民経済計算H28)	1都1県の県内総生産 127,159,701百万円 (全国比23.1%)

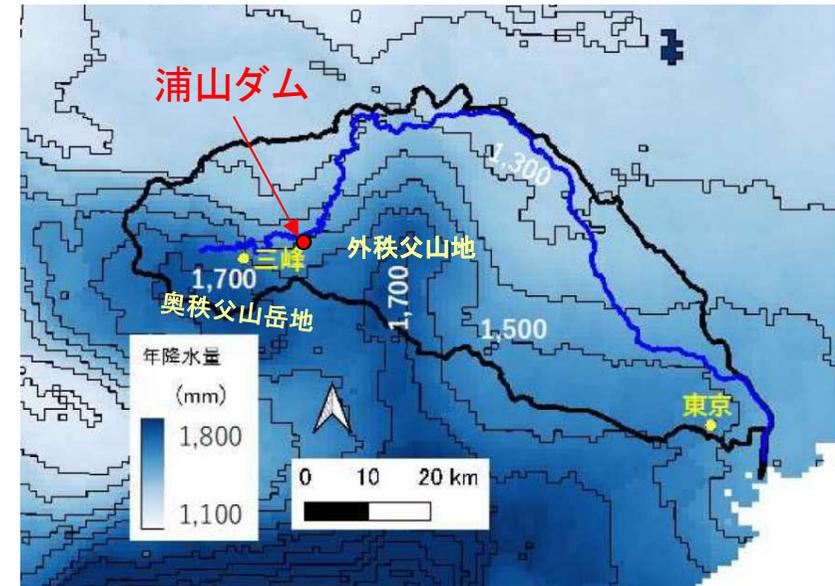
出典: 荒川水系河川整備計画(令和2年9月変更)

荒川流域の降雨特性

- 地域別降水量では、奥秩父山岳地、外秩父山地が多く、中下流部の低平地や、北西部の上武山地周辺が少ないのが特徴である。
- 浦山ダムの年間降水量は、管理開始以降26カ年（H11～R6）で平均1,482mm程度である。



浦山ダムの年間降水量(平成11年～令和6年)



荒川流域の年間降水量分布図

(平成3年～令和2年)

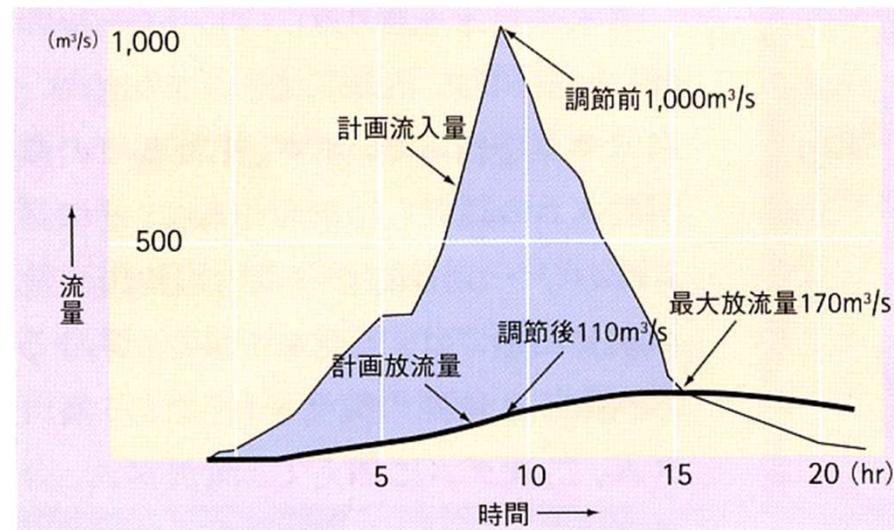
出典： 荒川水系河川整備基本方針

浦山ダム の概要

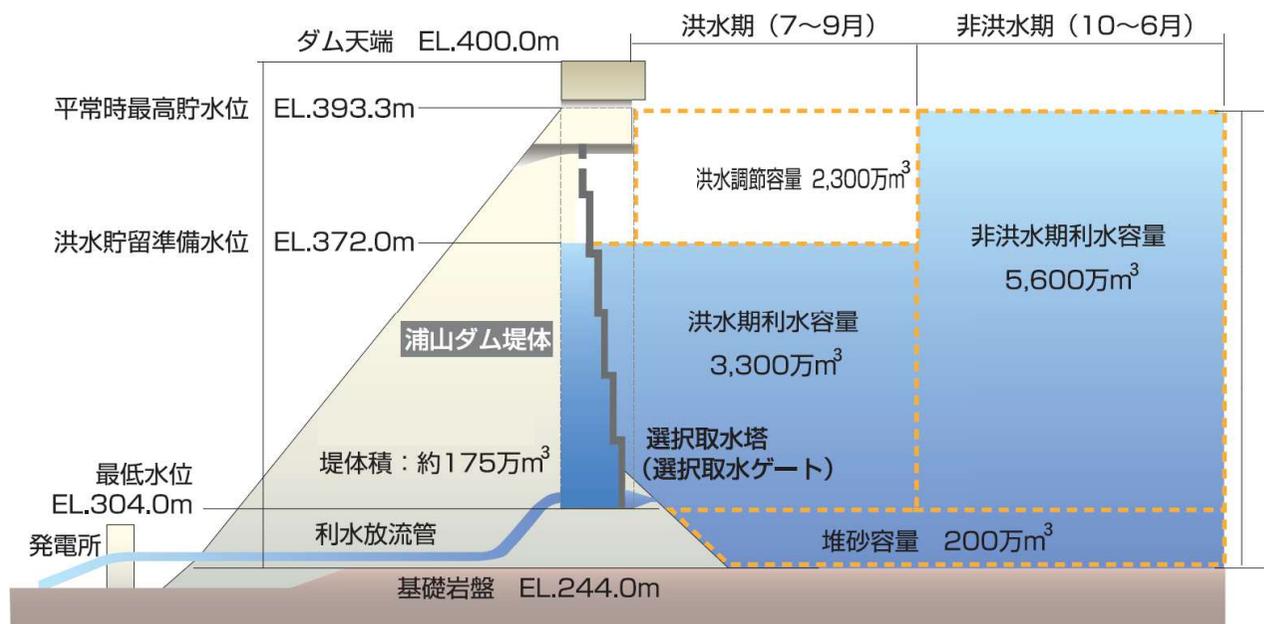
【浦山ダムの概要】

- ・形式：重力式コンクリートダム
- ・目的：洪水調節
流水の正常な機能の維持
水道用水の供給
発電(東京発電(株))
- ・堤高：156.0m
- ・堤頂長：372.0m
- ・総貯水容量：58,000千 m^3
- ・湛水面積：1.2 km^2
- ・集水面積：51.6 km^2
- ・管理開始：平成11年

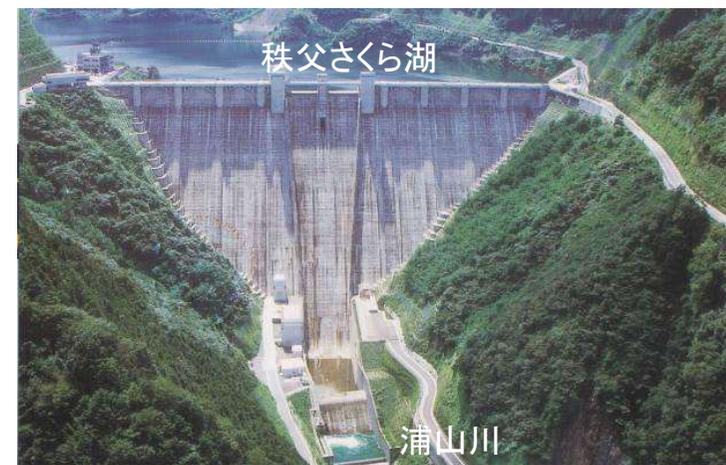
【浦山ダムの洪水調節計画】



【浦山ダムの貯水池容量配分図】



計画高水流量	: 1,000 m ³ /s
洪水流量	: 60 m ³ /s
計画最大放流量	: 170 m ³ /s
洪水調節容量	: 23,000 千 m^3
洪水調節方式	: 自然調節方式



9 前回フォローアップ委員会における主な指摘事項 9

- 平成31年1月に開催されたフォローアップ委員会において審議された「今後の課題」と対応状況は以下のとおりである。

- 洪水等においてダムで流木を止めたことが評価されていない。ダムの流木を止める副次的効果の評価も重要である。

→ご指摘を踏まえ、ダムの副次的効果について評価を行った。

洪水調節10

- 今後の堆砂状況を注視していく必要があることを示すべきである。

このため、貯水容量に対する堆砂の比率の記載は、重要性の印象が薄まらない表現に工夫すること。

→ご指摘を踏まえ、堆砂の評価にあたっては、図・注釈により貯水容量に対する堆砂の比率についてわかりやすいよう表現の工夫を行った。

堆砂1

- 今後の対応で望むことであるが、人口などの統計データはこの水源地域特有の特徴ではなく、全国的に言えることであり、分析評価のメリハリや意味づけを持たせ、ダム管理者が行ったことを分析評価することが必要である。

→ご指摘を踏まえ、以下の記載とした。

水源地動態6

浦山ダムでは、出前講座、ダム見学会、ダム堤体のライトアップ等が行われ、地域の一員として、地域のイベントへの協力、清掃活動にも参加している。その他の大規模なイベントとして、ダム堤体上において痛車ミーティング & コスプレ撮影会「進撃の浦山ダム」が平成26年より開催されている。

洪水調節実績

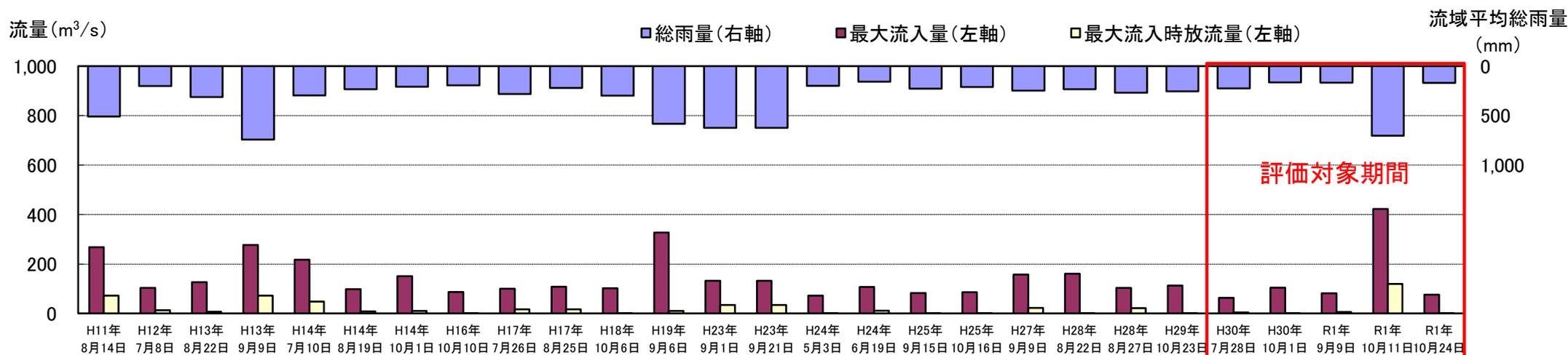
- 平成11年の管理開始以降、27回の洪水調節を実施し、評価対象期間（平成30年～令和6年）（以下「至近7カ年」という。）では5回の洪水調節を行った。
- 令和元年10月12日洪水では最大流入量 $423\text{m}^3/\text{s}$ となり既往最大となった。

ダム名	平成30年 (2018年)	令和元年 (2019年)	令和2年 (2020年)	令和3年 (2021年)	令和4年 (2022年)	令和5年 (2023年)	令和6年 (2024年)
浦山ダム 洪水量： $60\text{m}^3/\text{s}$ (自然調節)	洪水調節：2回 最大流入量： $105\text{m}^3/\text{s}$ (10/1) 最大流入時 放流量： $1\text{m}^3/\text{s}$	洪水調節：3回 最大流入量： $423\text{m}^3/\text{s}$ (10/12) 最大流入時 放流量： $119\text{m}^3/\text{s}$	—	—	—	—	—

※浦山ダムでは流入量 $60\text{m}^3/\text{s}$ 以上を洪水とする。

「—」：洪水量(洪水調節開始流量)に達する流量は観測されていない。

管理開始以降の洪水調節実績

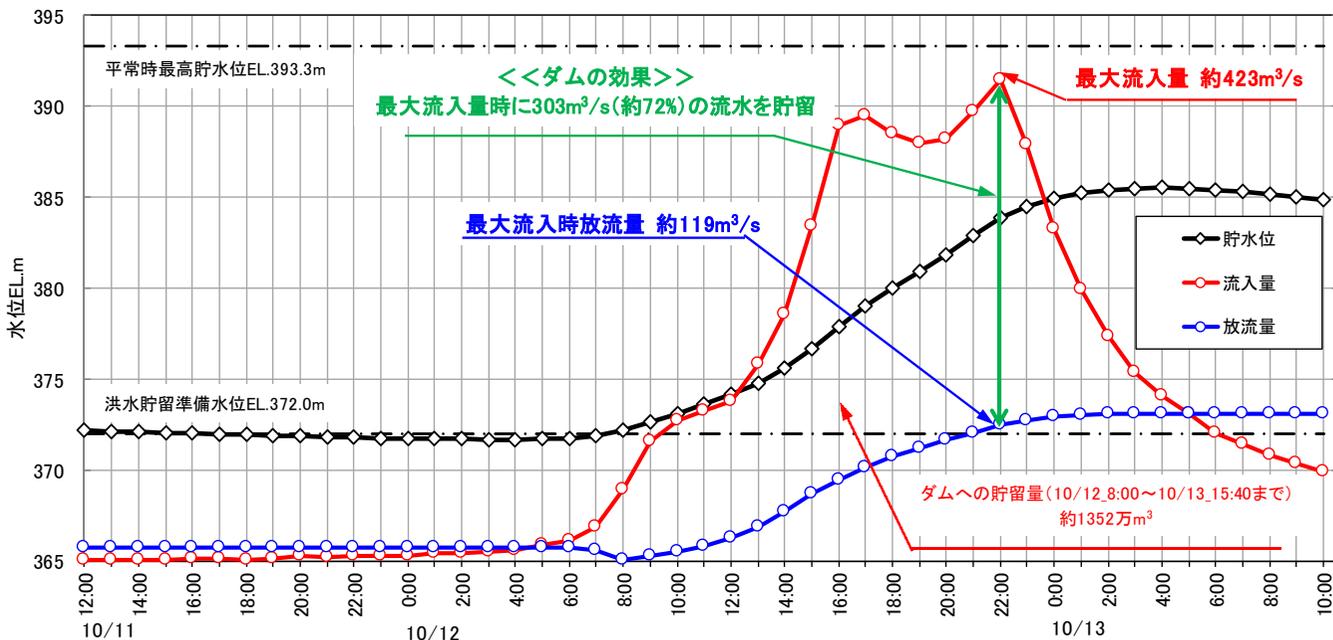
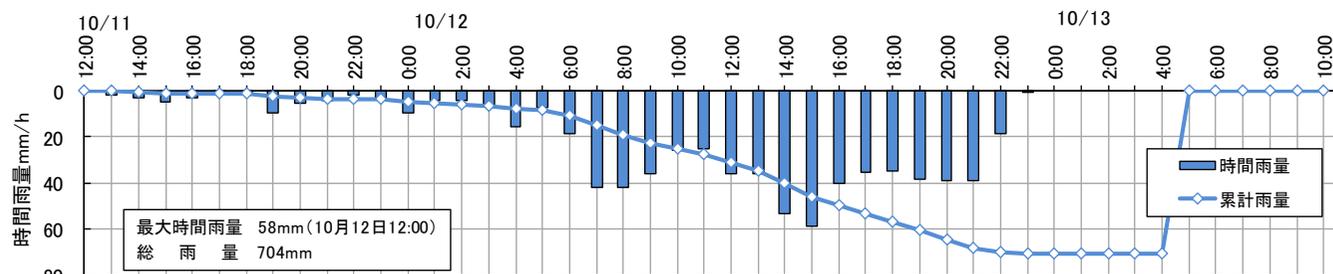


令和元年10月12日洪水における洪水調節効果(1)

洪水調節2

- 既往最大の流入量を記録した令和元年10月12日洪水では、最大流入量423m³/sに対して303m³/sをダムに貯め込む防災操作(洪水調節)を実施した。
- 最大流入量に対してダムで貯留した流量は、約72%である。

令和元年10月12日洪水(台風第19号)



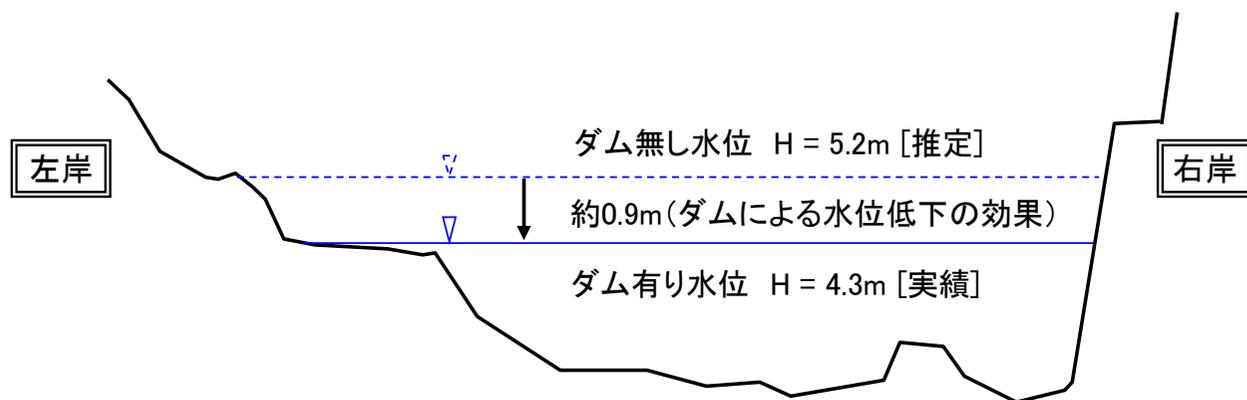
洪水調節実績

No.	生起年月日	気象要因	最大流入量 (m ³ /s)	最大放流量 (m ³ /s)	最大流入時放流量 (m ³ /s)	最大流入時調節量 (m ³ /s)	流域平均累計雨量 (mm)
1	H11.8.14	熱帯低気圧	268	75	73	195	509
2	H12.7.8	台風第3号	103	29	13	90	203
3	H13.8.22	台風第11号	127	29	7	121	312
4	H13.9.9	台風第15号	277	123	72	205	742
5	H14.7.10	台風第6号	218	64	48	169	295
6	H14.8.19	台風第13号	98	46	9	89	233
7	H14.10.1	台風第21号	151	31	10	140	210
8	H16.10.10	台風第22号	88	1	1	87	195
9	H17.7.26	台風第7号	100	37	17	83	283
10	H17.8.25	台風第11号	108	32	17	92	221
11	H18.10.6	秋雨前線	102	4	1	101	299
12	H19.9.6	台風第9号	328	68	11	317	583
13	H23.9.1	台風第12号	132	66	35	98	624
14	H23.9.21	台風第15号	92	15	2	90	186
15	H24.5.3	低気圧	73	1	1	72	200
16	H24.6.19	台風第4号	107	12	12	96	157
17	H25.9.16	台風第18号	83	1	1	82	227
18	H25.10.16	台風第26号	86	8	1	85	210
19	H27.9.9	台風第18号	157	49	23	135	271
20	H28.8.22	台風第9号	161	1	1	160	221
21	H28.8.30	台風第10号	104	35	21	82	269
22	H29.10.23	台風第21号	113	1	1	112	254
23	H30.7.28	台風第12号	64	15	4	60	224
24	H30.10.1	台風第24号	105	12	1	104	164
25	R1.9.9	台風第15号	81	16	6	76	166
26	R1.10.12	台風第19号	423	130	119	303	704
27	R1.10.25	台風第21号	76	1	1	76	171

※赤字は既往最大

令和元年10月12日洪水における洪水調節効果(2)

- 令和元年10月の台風第19号による出水時に、浦山ダムに流れ込んだ水の一部をため込んで、浦山川花御堂地点の水位を0.9m低下させた。



令和元年10月の台風第19号での花御堂地点の水位低減効果



浦山ダムと花御堂の位置図



※花御堂のダム無し水位は、ダム無しの流量をH-Q式にあてはめて推定した。

洪水調節に関する情報の提供(1)

- 水源の状況や概況(ダムへの流入・放流量、貯水量等)を、ホームページやX(旧Twitter)で発信し、洪水に関する情報についてリアルタイムで住民へ提供している。
- 洪水調節終了後は、洪水調節による下流河川での水位低減効果について記者発表し、ホームページ上にも掲載している。

荒川ダム総合管理所 (浦山ダム・滝沢ダム)

09月11日10時50分の情報

必要な水を流しながらダムに水を貯めています

浦山ダム流域で観測した雨量 累計 3.6 mm	貯水位 標高 366.27 m	貯水率 84.8%
浦山ダムに入ってくる水の量 毎秒 0.73 立方メートル	24時間前の貯水位と比較して 2 cm上昇	

浦山ダムから流している水の量
毎秒 0.73 立方メートル

7月1日から洪水期に入りました。
梅雨前線、台風に伴う降雨により、ダムからの放流量が大きく増加する際は、本リアルタイム情報にてダムの操作状況を発信いたします。

リアルタイムの水源の状況や概況

浦山ダム、滝沢ダム
「防災操作」で河川水位上昇を緩和

独立行政法人水資源機構 荒川ダム総合管理所が管理する浦山ダム及び滝沢ダムでは、10月1日より洪水期に移行したため貯留を盛め洪水貯留準備水位より高い水位となりました。このような貯水状況で、大規模な台風第19号による大規模な出水が予想されたことから、洪水貯留準備水位以下に貯水位を下げ、洪水貯留量を確保し、「洪水期と同じ防災操作」を行いました。

浦山ダムでは、管理開始以降最大の流入量を記録したこの出水に対し、ダムに貯め、毎秒約3川の花園遊歩道地点とができました。

滝沢ダムでもこの出水に対して、一時的に、流中の浦川の太ささせることで

■下流河川の水位低減効果 浦山川花園遊歩道(秩父市成川水郷)

左岸 右岸

ダム貯り水位 H=4.3m(満貯)

0.3m (ダムによる水位低下の効果)

ダム貯り水位 H=4.3m(満貯)

水位低減効果についての記者発表 (令和元年10月12日洪水)

出典: 荒川ダム総合管理所ホームページ

荒川ダム総合管理所 (浦山ダム・滝沢ダム) @jwa_araka... · 2024年9月5日

【日向進入路を開放しました!】
浦山ダムでは台風10号の影響による常用洪水吐き(ダム堤体にある小さな穴)からの越流が終了したため、本日(9/5)の朝から日向侵入路(秩父さくら湖)の開放を再開しました。
ご利用の際は道路の段差などに十分注意して頂くようになります。
#浦山ダム

Xによる情報発信

出典: X(旧Twitter)

洪水調節に関する情報の提供(2)

- 令和元年9月12日、二瀬ダム管理所(国交省)及び荒川ダム総合管理所(水機構)は、地元コミュニティFM放送局「ちちぶエフエム」との間で、「災害情報の放送に関する協定」を締結。
- 同協定では、ダム管理者より放流通知などの災害情報を同局へ提供し放送を要請、要請を受けた同局はダムからの災害情報を通常放送に優先して放送することとしている。
- 年に1度、二瀬ダム管理所長と一緒に同局の1時間番組に生出演し、ダムの役割や操作、緊急放流や事前放流の仕組みやいざという時の対処方法を地域の方に聴いて頂いている。



ちちぶエフエムへの生出演

左:二瀬ダム管理所長 / 中央:荒川ダム総合管理所長 / 右:パーソナリティ

<< 「ちちぶエフエム」とは? >>

- ▼秩父地域（秩父市、横瀬町、小鹿野町、皆野町、長瀬町）の一部が視聴可能エリアのラジオ局。（民放）
- ▼秩父地域の情報に特化した番組を、毎日7:00から21:00まで生放送。
- ▼災害発生時、緊急時には通常の放送時間外でも速やかに放送を開始し、「今伝えるべきこと」を生放送。
- ▼令和元年8月20日に総務省関東総合通信局より予備免許付与。令和元年10月7日開局。



[暮(9)らしを守る・命(1)を守る・逃(2)げ遅れゼロ 9.12協定]

洪水調節に関する情報の提供 (3)

- 平成27年9月に発生した「関東・東北豪雨」を踏まえ、「水防災意識社会」の再構築に向けた取組として、ハード・ソフト対策を一体的・計画的に推進するための減災対策協議会を設置することが平成27年12月11日に決定された。
- 荒川水系(埼玉県域)では、氾濫が発生することを前提として社会全体で常に洪水に備える「水防災意識社会」を再構築することを目的とした「荒川水系(埼玉県域)大規模氾濫に関する減災対策協議会」が平成28年5月31日に設立された。

荒川水系(埼玉県域)大規模氾濫に関する減災対策協議会	
ハード対策の主な取組	<ul style="list-style-type: none"> ◆ 優先的に実施する堤防整備、橋梁部周辺対策の実施(洪水を安全に流す対策) ◆ 保護、裏法尻の補強(危機管理型ハード対策)、簡易水位計やCCTVカメラの設置等 ◆ 排水機場の堤防天端の耐水化や水門・機場等の遠隔操作を確実に実行できる対策(二重化)の実施 ◆ 河川防災ステーションの整備や堤防天端上の車両交換場所等の整備
ソフト対策の主な取組	<ul style="list-style-type: none"> ① 逃げ遅れゼロに向けた迅速かつ的確な避難行動のための取組 ② 洪水氾濫による被害の軽減、避難時間の確保のための水防活動等の取組 ③ 一刻も早い生活再建及び社会経済活動の回復を可能とするための排水活動の取組

荒川水系(埼玉県域)大規模氾濫に関する減災対策協議会開催状況

荒川水系(埼玉県域)大規模氾濫に関する減災対策協議会	
関係機関	さいたま市、川越市、熊谷市、川口市、行田市、加須市、東松山市、春日部市、羽生市、鴻巣市、深谷市、上尾市、草加市、越谷市、蕨市、戸田市、朝霞市、志木市、和光市、新座市、桶川市、久喜市、北本市、八潮市、富士見市、三郷市、蓮田市、坂戸市、幸手市、鶴ヶ島市、吉川市、ふじみ野市、白岡市、伊奈町、三芳町、毛呂山町、越生町、川島町、吉見町、鳩山町、寄居町、宮代町、杉戸町、松伏町、埼玉県、気象庁熊谷地方气象台、独立行政法人水資源機構(荒川ダム総合管理所・利根導水総合管理所)、国土交通省関東地方整備局(荒川上流河川事務所・荒川下流河川事務所・二瀬ダム管理所)、東日本旅客鉄道株式会社、日本貨物鉄道株式会社、東武鉄道株式会社、東京地下鉄株式会社、秩父鉄道株式会社、埼玉高速鉄道株式会社、埼玉新都市交通株式会社、首都圏新都市鉄道株式会社

第1回	平成28年5月31日
第2回	平成28年9月28日
第3回	平成29年6月1日
第4回	平成30年5月22日
第5回	令和元年5月27日
第6回	令和元年11月12日、14日
第7回	令和2年5月28日
第8回	令和3年5月31日
第9回	令和4年5月27日
第10回	令和5年6月5日
第11回	令和6年5月23日

洪水調節に関する情報の提供(4)

- 気候変動による水災害リスクの増大に備えるため、河川・下水道管理者等による治水に加え、あらゆる関係者(国・都道府県・市町村・企業・住民等)により流域全体で行う「流域治水」へ転換するため、全国の一級水系において流域全体で早急に実施すべき対策の全体像を「流域治水プロジェクト」として示し、ハード・ソフト一体の事前防災対策を推進している。
- 「総力戦で挑む防災・減災プロジェクト」のとりまとめ(令和2年7月6日)を踏まえ、荒川流域において流域治水を計画的に推進するため「荒川水系流域治水協議会」が設置された。

戦後最大洪水等に対応した河川の整備(見込)

整備率: 70%
(概ね5か年後)

農地・農業用施設を活用

0市町村
(令和4年度末時点)

流出抑制対策の実施

1,162施設
(令和3年度実施分)

山地の保水機能向上および土砂・流木災害対策

治山対策等の実施箇所 2箇所
(令和4年度実施分)
砂防堰堤建設の箇所数 0施設
(令和4年度完成分)

立地適正化計画における防災施設の作成

6市町村
(令和4年12月末時点)

避難のためのハザード情報の整備

洪水浸水想定区域 46河川
(令和4年9月末時点)
計画 12団体
(令和4年9月末時点)

高齢者等避難の実効性の確保

洪水 10,226施設
避難 158施設
(令和4年9月末時点)
避難避難計画 89市町村
(令和4年1月1日時点)

荒川水系(埼玉ブロック) 流域治水協議会開催状況

第1回	令和2年8月26日
第2回	令和2年12月9日
第3回	令和3年2月26日
第4回	令和4年3月10日
第5回	令和5年3月17日
第6回	令和5年6月5日
第7回	令和6年3月15日

被害をできるだけ防ぐ・減らすための対策

流域の雨水貯留機能の向上
家庭(公園等)貯留施設の整備

担当部署 朝霞市 みどり公園課

取組概要
当該貯留施設は民間事業者による大規模開発事業に伴い防災機能をコンセプトに整備された都市公園「谷中公園」約1,000㎡の地内にある。令和2年9月に開発完了検査を実施し、令和3年3月に市に帰属された後、令和3年4月から都市公園として供用開始した。貯水容量は約97㎡となっている。

取組内容の工夫点・課題・留意点
基本的には公園敷地内への降雨のみの処理を想定して設計されているため、河川への流出低減効果は限定的。

取組による効果
効果に関する定量的な評価については、現在事業者が近隣の類似の都市公園に整備した雨水貯留槽のマンホール裏に水位測定装置を設置し、検証中。

被害対象を減少させるための対策

水災害ハザードエリアにおける土地利用・住まいの工夫
まちづくりと一体となった土砂災害対策の推進

担当部署 秩父市 地域整備部 都市計画課

取組概要
災害ハザードエリアからの移転に対し、既存ストック(空き家等)を活用することにより、本人負担の軽減を図る。

取組内容の工夫点・課題・留意点
空き家調査により空き家の分布状況・所有者の意向を調べ、居住誘導区域内や小さな拠点周辺など、安全措置が図られた同じエリア内の空き家を活用し、集団移転することにより本人負担の軽減とコミュニティの維持を図る。

取組による効果
災害危険エリアからの移転、空き家の利活用(コンパクトシティ形成)

活用可能な制度等
防災集団移転促進事業、空き家対策総合支援事業、居住誘導区域等権利設定等事業(国交省)

被害の軽減、早期の復旧・復興のための対策

表 台風性降雨シナリオにおける流域警戒ステージ設定(案)

警戒区分	状況	防災行動の目標	防災行動の要
ステージ1	警戒	5~30分以内に自身が避難	避難準備
ステージ2	警戒	避難の可能性がある	避難準備
ステージ3	警戒	避難の可能性がある	避難準備
ステージ4	警戒	避難の可能性がある	避難準備
ステージ5	警戒	避難の可能性がある	避難準備

関係者との情報共有のためのダッシュボード

荒川下流タイムラインの策定・運用の取組

担当部署 荒川下流河川事務所 品質確保・防災企画室

取組概要
荒川下流流域水防災タイムラインは、現在沿川16市区を含む全37機関54部署で運用している。

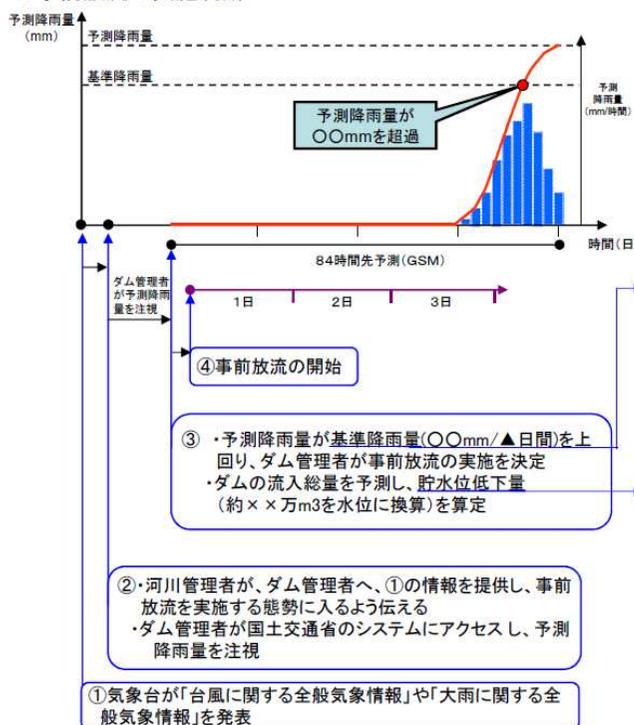
取組内容の工夫点・課題・留意点
・台風性降雨シナリオによる流域警戒ステージを設定し、各段階で防災行動の目標設定に応じた防災行動の早期実施を図る。
・関係機関との共有をWEB会議にて実施。また関係者との情報共有のためのダッシュボードを構築。(R3から試行)

取組による効果
・早期の危機感共有と早期対応の意思決定を促す流域タイムラインにより、関係機関における早期対応の意思決定を支援する。

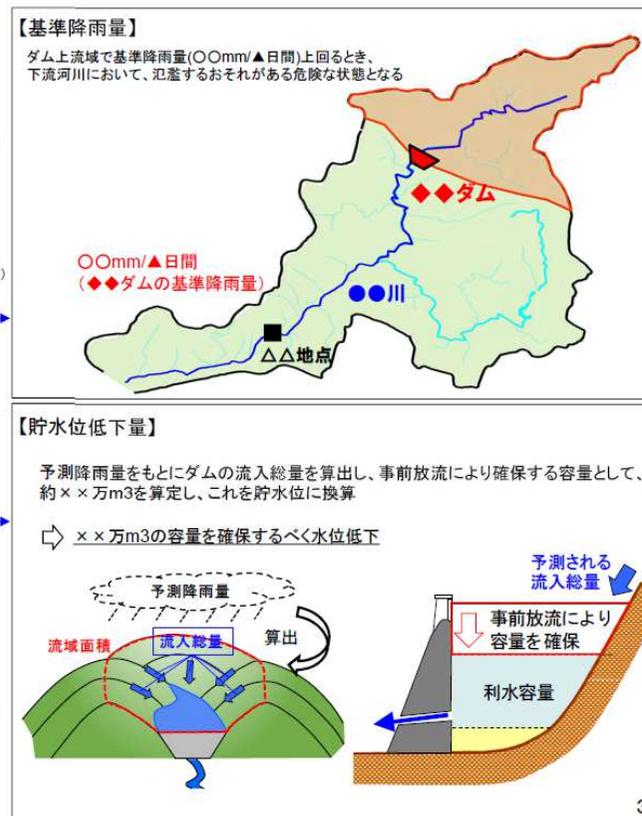
事前放流

- 令和元年台風第19号などの近年の水害の激甚化を踏まえ、「既存ダムの洪水調節機能の強化に向けた基本方針（令和元年12月12日既存ダムの洪水調節機能強化に向けた検討会議）」が策定された。
- 本基本方針に基づき、既存ダムの有効貯水容量を洪水調節に最大限活用できるよう、国土交通省所管ダム及び河川法第26条の許可を受けている利水ダムを対象に、事前放流を実施するにあたっての基本的事項をとりまとめた「事前放流ガイドライン」（令和2年4月22日）が策定された。
- 荒川水系において、河川管理者である国土交通省並びにダム管理者及び関係利水者との間で協議を進め、令和2年5月28日付で治水協定を締結（令和5年7月18日改定）し、事前放流の運用を開始している。

○事前放流の実施判断



※小規模な農業用ダム等については、季節ごとにあらかじめダムの水位を低下させておくなどの運用（簡易な事前放流）を行う。



事前放流の実施フロー

出典：事前放流ガイドライン

事前放流の運用条件

ダム名	洪水調節容量 (万 m^3)	洪水調節可能容量 (万 m^3)	基準降雨量※ (mm)
浦山ダム	2,300	292	450

※浦山ダム上流域の予測降雨量（48時間雨量）

出典：浦山ダム事前放流実施要領（令和3年3月24日改）

防災操作・事前放流に関する取組

- 荒川ダム総合管理所(浦山ダム・滝沢ダム)では毎年6月に、二瀬ダムと合同で、関係機関や下流の住民代表に対して、ダム施設の概要、洪水時のダム操作や放流警報などに関する防災操作説明会を実施するとともに、防災チラシやちちぶ安心・安全メールを活用し、広く理解促進を図っている。

令和6年度 ダム等防災操作等説明会

事前放流とは

事前放流なし

事前放流あり

2 ダム下流の警報および巡視

1. 警報車による巡視

2. サイレンスピーカーによる吹鳴

3. 情報表示板に掲示

緊急放警車	スピーカー	サイレン	吹鳴	サイレン	吹鳴	サイレン	吹鳴
50秒	50秒	50秒	50秒	50秒	50秒	50秒	50秒
緊急放警車	スピーカー	サイレン	吹鳴	サイレン	吹鳴	サイレン	吹鳴
50秒	40秒	50秒	50秒	50秒	50秒	50秒	50秒

防災操作説明会用資料

秩父4ダムからのお知らせ
～ダムの防災操作～

大雨時のダムの操作【防災1】

緊急放警車の運用

サイレン吹鳴の方法

防災チラシ

13:39

ちちぶ安心・安全メール 2024/08/06

秩父4ダムからのお知らせ
～ダムの防災操作～

荒川ダム総合管理所からお知らせします。今後、本格的に台風シーズンを迎え、洪水の発生、ダムにおける防災操作等の実施の可能性が高まることから、秩父市にお住まいの皆さまへのお知らせとして、「秩父4ダムからのお知らせ～ダムの防災操作～」を配信いたします。下記URLから閲覧が可能となっておりますので、ご覧ください。

https://www.water.go.jp/kanto/arakawa/topics/2024/pdf/bousai_charashi2024.pdf

(問い合わせ先)
独立行政法人水資源機構 荒川ダム総合管理所 第一管理課
電話 0494-23-1431

ちちぶ安心・安全メール



R5防災操作説明会



R6防災操作説明会

ダムの副次的効果

- 浦山ダムでは、出水時に上流から流入する流木を貯水池で捕捉し、回収・処理している。
- 至近7カ年では、令和元年の出水の影響で、553m³の流木を回収している。
- 副次的効果として、下流河川に対して流木による二次被害の防止効果が発揮されている。
- 貯水池で回収した流木は、広く一般に無料配布している。



貯水池内における流木の集積状況
令和元年10月23日



貯水池内における流木の回収状況
令和元年10月30日



貯水池内における流木の回収状況
令和元年12月17日

流木の回収量(空m³)

平成30年度	令和元年度	令和2年度	令和3年度	令和4年度	令和5年度	令和6年度
46	553	32	0	0	0	0



流木の無料配布状況
令和5年4月6日

洪水調節1

洪水調節4-5

洪水調節10

- 管理開始以降27回の洪水調節を実施し、至近7カ年では、既往最大の令和元年10月12日洪水を含め5回の洪水調節を行った。
- 水源の状況や概況(ダムの流入・放流量、貯水量等)をホームページやX(旧Twitter)で発信し、ちちぶエフエムとの災害情報の放送に関する協定締結などを通して、住民への情報提供を行っている。
- 洪水時に流域から流出した流木をダムで捕捉することで、副次的に下流河川に対して流木による二次被害の防止効果が発揮されている。

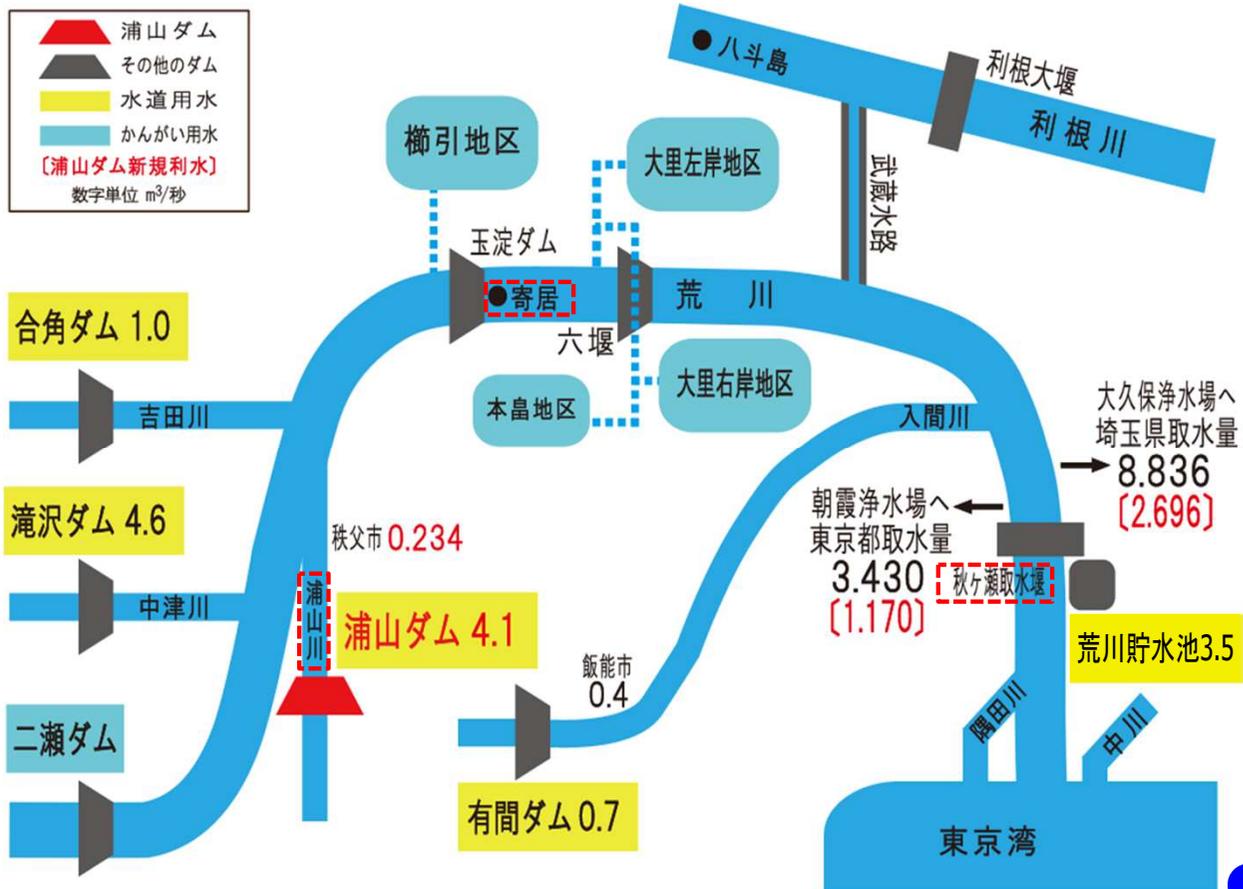
【今後の方針】

- 今後も引き続き適切なダム操作により洪水調節効果を発揮するとともに、関係機関および住民に対して、防災操作説明会の開催や洪水等に関する情報提供を行っていく。

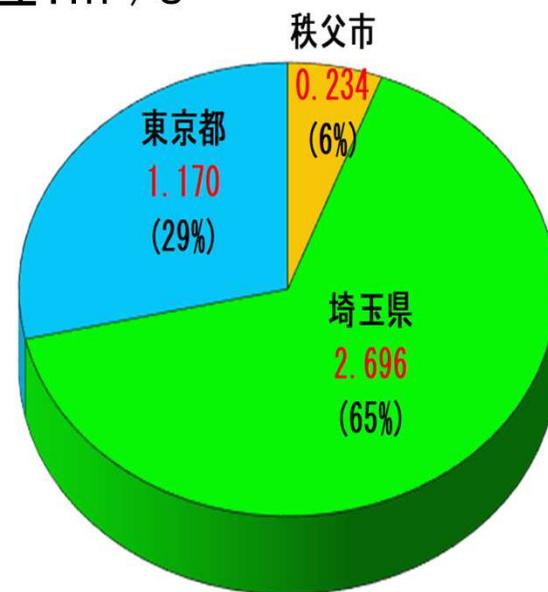
荒川水系の利水補給について

- 浦山ダムを含む荒川4ダム（浦山ダム、滝沢ダム、二瀬ダム、荒川貯水池）が相まって、新規利水（水道用水）及び荒川沿川の流水の正常な機能の維持のための補給を行っている。

● 荒川水系の新規利水



● 浦山ダムの新規利水（水道用水） 単位：m³/s



合計 4.100m³/s

● 流水の正常な機能の維持（不特定用水）

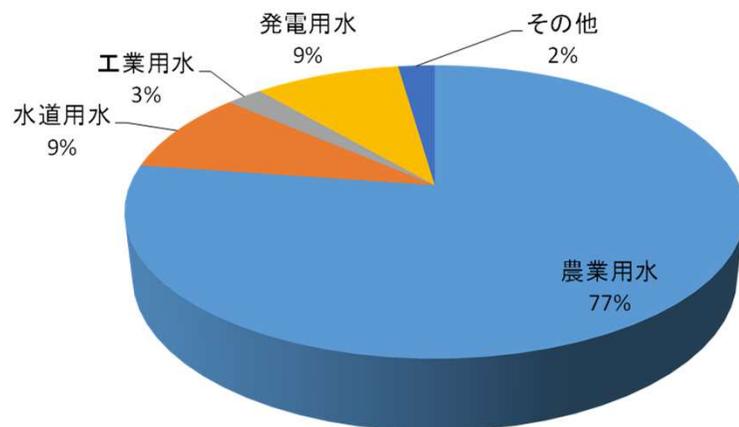
○ 浦山川（ダム直下）	: 通年	0.7 m ³ /s（浦山ダム）
○ 寄居地点	: かんがい期最大	概ね 23 m ³ /s（荒川水系ダム群）
	: 非かんがい期最大	概ね 9 m ³ /s（荒川水系ダム群）
○ 秋ヶ瀬取水堰下流地点	: 通年	概ね 5 m ³ /s（荒川水系ダム群）

荒川水系利水の現状

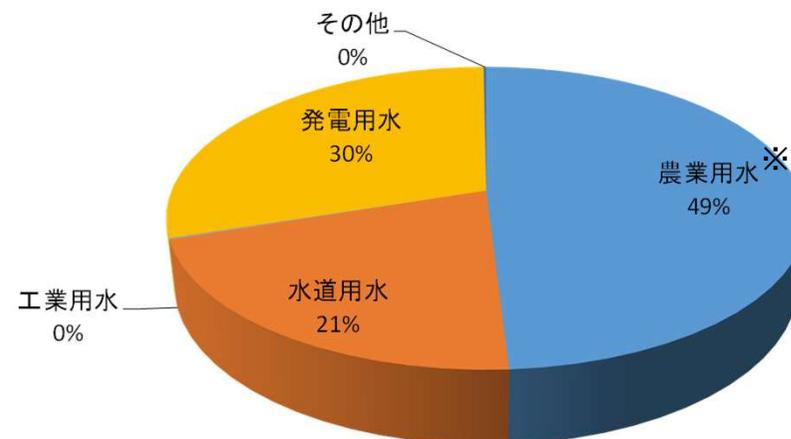
- 荒川の水は、農業用水、水道用水、発電用水等として取水されている。
- 農業用水と都市用水（水道用水、工業用水）の供給量のうち、水利権数では農業用水（77%）が最も多く、最大取水量も農業用水（49%）が最も多い。

荒川における水利権数・最大取水量の構成

水利権数の構成



最大取水量の構成



目的別	水利権の数	最大取水量(m ³ /s)
農業用水	34	31.1
水道用水	4	13.2
工業用水	1	0.1
発電用水	4	18.9
その他	1	0.1

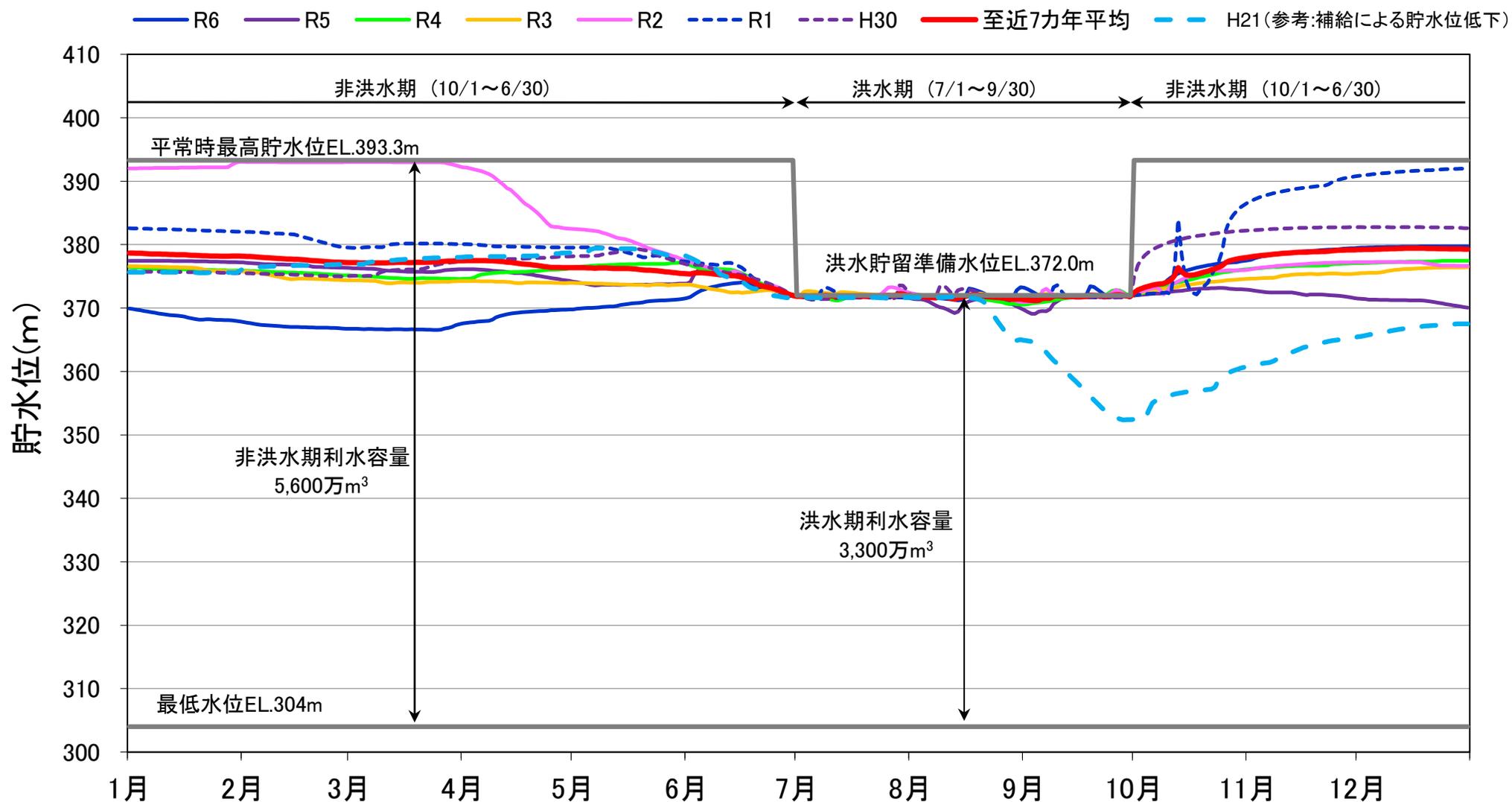
（平成31年3月時点）

出典：荒川水系河川整備計画（令和2年9月）から作成

浦山ダム貯水池運用実績

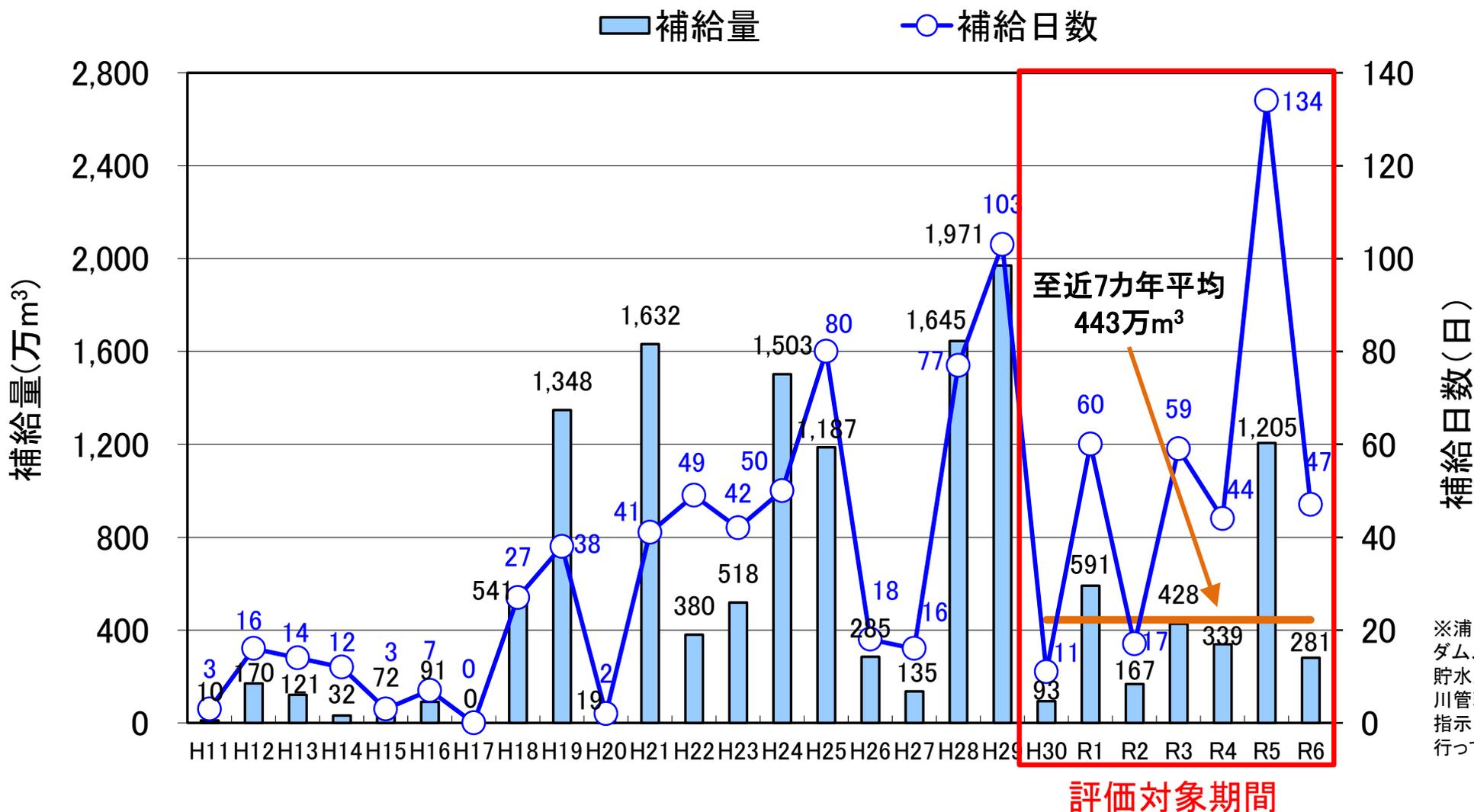
- 至近7カ年の貯水池運用実績は以下のとおりである。

至近7カ年の貯水池運用図



浦山ダムへの補給実績(1)

- 浦山ダムは、滝沢ダム、二瀬ダム、荒川貯水池と相まって、河川管理者からの補給指示に基づき補給を行っている。
- 至近7カ年の年間補給量は93~1,205万m³、補給日数は11~134日である。
- 令和5年の補給日数134日は、浦山ダムの管理開始以来、最大であった。



※浦山ダムは、滝沢ダム、二瀬ダム、荒川貯水池と相まって、河川管理者からの補給指示に基づき補給を行っている。

渇水対応タイムライン

- 渇水対応タイムラインは、危機的な渇水に備えるため、各々の関係者の立場毎に、渇水の初期から徐々に深刻化していく状況（渇水シナリオ）に沿って、「渇水時の影響や被害を軽減するための対策とその時期」を行動計画として示すもので、荒川水系では、令和3年12月17日に策定・運用が開始された。



国土交通省 関東地方整備局
Ministry of Land, Infrastructure, Transport and Tourism, Kanto Regional Development Bureau

令和3年12月17日（金）
利根川水系渇水対策連絡協議会
荒川水系渇水調整協議会
（事務局：関東地方整備局）

記者発表資料

関東初の「渇水対応タイムライン」策定・運用開始！！

～首都圏を支える利根川水系及び荒川水系で渇水への備えを強化～

- ・利根川水系及び荒川水系の渇水対応については、令和元年8月に策定した東京2020オリンピック・パラリンピック渇水対応行動計画を実施するなど、取り組みを行ってきたところです。
- ・この度、同計画の取り組み結果を踏まえ、昨日、利根川水系渇水対策連絡協議会及び荒川水系渇水調整協議会を開催※し、渇水対応タイムラインの策定及び運用を開始しました。
- ・気候変動等の影響により渇水のリスクが懸念される中、今後関係者の連携や地域が一体となった異常渇水等への対応が更に重要となることから、「利根川水系渇水対応タイムライン」及び「荒川水系渇水対応タイムライン」を策定し、12月16日より運用開始しました。
- ・渇水対応タイムラインは、危機的な渇水に備えるため、各々の関係者の立場毎に、渇水の初期から徐々に深刻化していく状況（渇水シナリオ）に沿って、「渇水時の影響や被害を軽減するための対策とその時期」を示した行動計画です。
- ・今後、事前に示された各対策を各機関が適切に実施することで、**危機的な渇水が発生した際の被害軽減が期待できます。**



平成28年渇水（矢木沢ダム）

※ 今回の協議会は、新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から、「書面による議事」としました。
※ 協議会HP：https://www.ktr.mlit.go.jp/river/shihon/river_shihon00000150.html

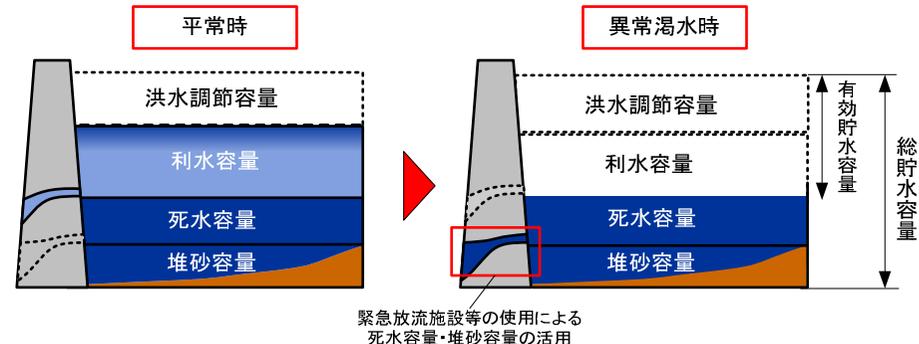
荒川水系渇水対応タイムライン

フェーズ	フェーズⅠ	フェーズⅡ	フェーズⅢ	フェーズⅣ	フェーズⅤ
水資源の状況	平常時	渇水注意期	渇水初期	深刻な渇水期	異常渇水期
貯水量 (荒川4ダム)	70百万m ³ 以上	70百万m ³ ～48百万m ³	48百万m ³ ～26百万m ³		26百万m ³ 以下
国土交通省、農林水産省、東京都、埼玉県及び独立行政法人水資源機構	①荒川水系渇水調整協議会を活用した情報共有及び対策検討・調整				
			①荒川水系渇水調整協議会にて対策検討（取水制限等）		
	②洪水期のダムの弾力的管理の準備		②洪水期のダムの弾力的管理・活用容量の貯留水の利用		
	③荒川水利用高度化施設の運用				
水資源の確保対策	国土交通省 独立行政法人水資源機構				
	国土交通省 独立行政法人水資源機構				④既存施設の徹底活用の検討（ダム死水容量等の活用）

※本渇水対応タイムラインは、渇水被害を最小限にとどめるため、河川管理者などが講じる対策、都県が取るべき行動を示したものです。
※本タイムラインは、行動の目安とするため過去の渇水対応を参考に設定したものであり、実際の対応は状況を踏まえ適宜調整します。
※なお、実際の渇水調整や具体的な対応は荒川水系渇水調整協議会で決定されます。

フェーズⅤ

■既存施設の徹底活用の検討（ダム死水容量等の活用）
ダムの死水容量等について緊急利用を検討します。



【利根川水系渇水対策連絡協議会】

- 構成メンバー
- ・国土交通省関東地方整備局
 - ・経済産業省関東経済産業局
 - ・農林水産省関東農政局
 - ・東京都
 - ・千葉県
 - ・埼玉県
 - ・茨城県
 - ・群馬県
 - ・栃木県
 - ・独立行政法人水資源機構

【荒川水系渇水調整協議会】

- 構成メンバー
- ・国土交通省関東地方整備局
 - ・農林水産省関東農政局
 - ・東京都
 - ・埼玉県
 - ・独立行政法人水資源機構

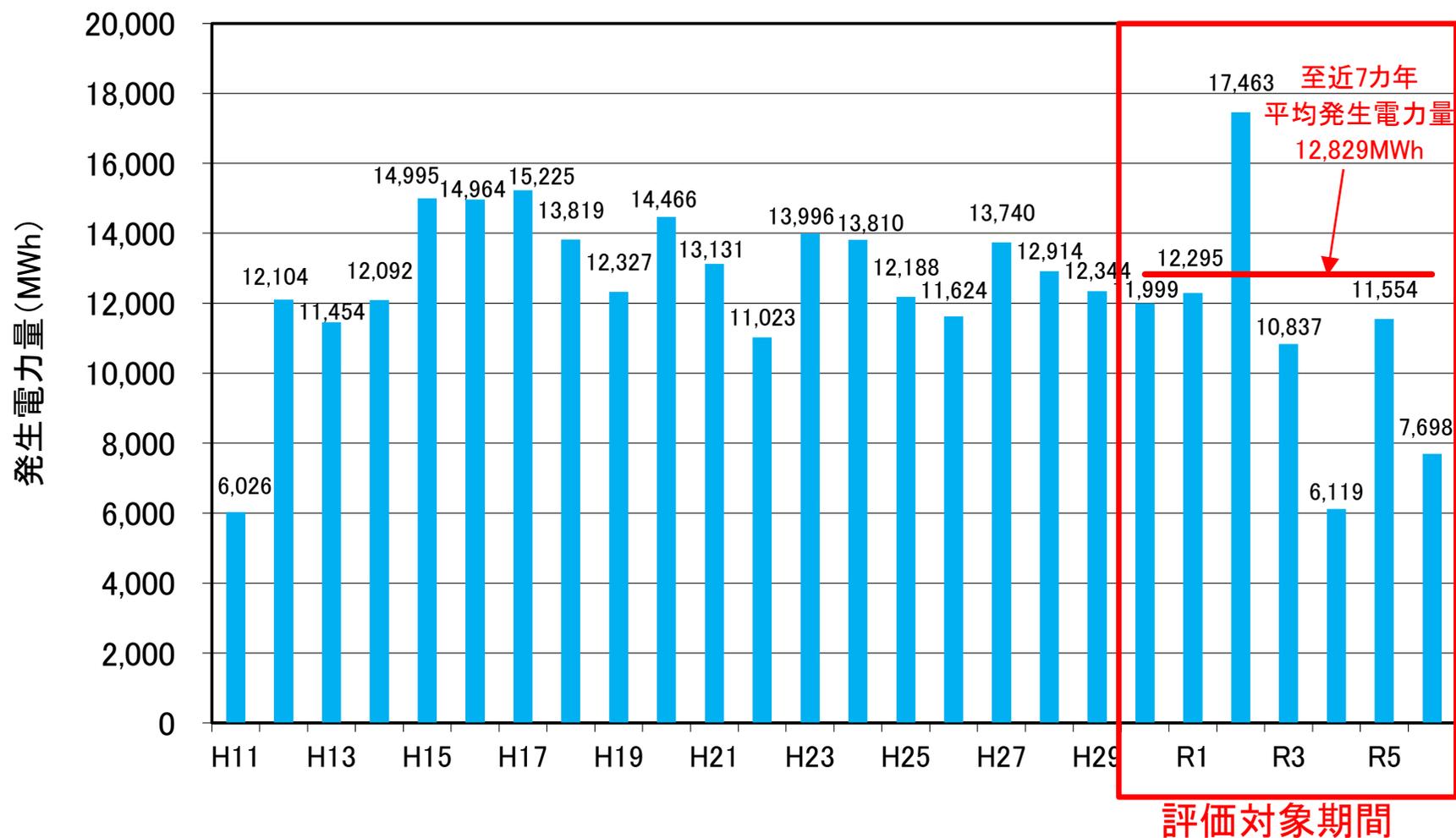
発電実績

- 浦山ダムでは、最大 $4.1\text{m}^3/\text{s}$ の水を利用し、最大出力 $5,000\text{kW}$ の発電を年間を通じて安定的に行っている。(発電は東京発電株)
- 至近7カ年の年平均発生電力量は $12,829\text{MWh}$ であり、約3,600世帯※が1年間に使う電力に相当する。

※一世帯あたりの年間消費電力量を約 $3,531\text{kWh}$ とした場合

【(出典:環境省ウェブサイト「家庭でのエネルギー消費量について

地方別世帯当たり年間電気消費量(固有単位)(令和4年度) 関東】



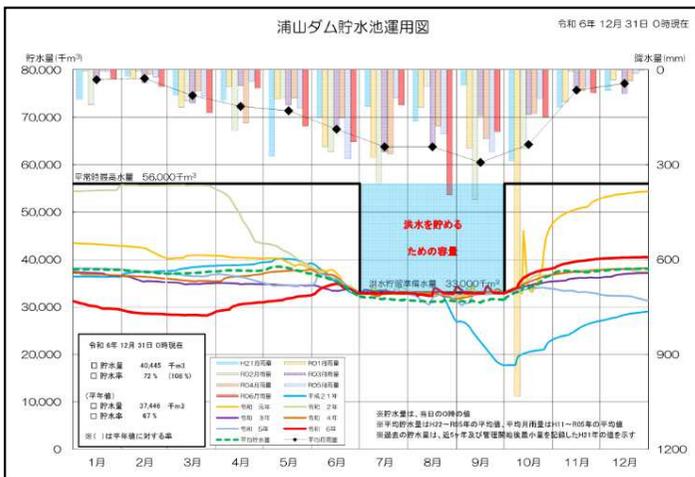
※平均発生電力量はR4年とR6年を除いた値である。

※R4年とR6年は、ゲートの工事、バルブの工事など、工事の関係で発電ができなかったため、発電量が減っている。

利水補給に関する情報の発信

■ ホームページ、記者発表及びX(旧Twitter)などを通じて広く水源情報や利水補給などの情報を発信し、あわせて節水啓発につながる呼びかけを行っている。

水源状況の情報発信(浦山ダム貯水池運用図)



出典：記者発表荒川ダム総合管理所ホームページ

節水啓発

荒川ダム総合管理所(浦山ダム・滝沢ダム... @jwa_arak... · 2021年7月28日 ...

【オリンピックと渇水】
1964年大会の目前で「東京砂漠」と呼ばれる大渇水が起きました。節水率は50%にも及び、昼間も断水し、プールや水洗便所の使用禁止、水を多く使うお店も次々と休業となり、非常に大きな影響を与えました。
2021年においても節水を心がけましょう！
#オリンピック #渇水

23 81

出典：X(旧Twitter)

記者発表(参考:H29渇水)

「荒川ダム総合管理所渇水対策本部」を設置 ～節水にご協力をお願いします～

浦山ダム・滝沢ダムを管理する独立行政法人水資源機構荒川ダム総合管理所では、平成29年7月4日(火)9時、国土交通省荒川上流河川事務所渇水対策支部の設置と同時に「荒川ダム総合管理所渇水対策本部」を設置しました。

ダムでは、降雨で河川に豊富な水があるときに蓄え、雨が降らずに下流河川の流量が減少したとき、不足する水をダムから補給することで皆さんの生活を支えています。

荒川水系では、流域で降水量が少ない状態が続いており、河川の流量が減少しています。このため浦山ダム・滝沢ダムでは、必要な水の補給を続けており、貯水量が減少傾向にあります。

当管理所では、今後も降雨、河川の流況等の情報をきめ細かに把握するとともに関係機関と緊密に連携して、施設の適切な運用、水源情報の提供等に努めて参ります。

限られた水資源を有効に活用するため、引き続き節水へのご理解とご協力をお願いいたします。

※関連情報はホームページにて随時更新しています。

- 水資源機構管理施設の渇水情報、渇水対策本部の設置状況
<http://www.water.go.jp/honsya/honsya/suigen/kassui/index.html>
- 浦山ダム・滝沢ダムに関する詳細情報
<http://www.water.go.jp/kanto/arakawa/realtime/index.html>
- 荒川4ダムの貯水状況
<http://www.ktr.mlit.go.jp/arajo/arajo00698.html>

平成29年7月4日

独立行政法人 水資源機構
荒川ダム総合管理所

発表記者クラブ
秩父記者クラブ

問い合わせ先

独立行政法人水資源機構 荒川ダム総合管理所 総務課長 大岩
住所：埼玉県秩父市荒川久那4041
電話：0494-23-1431

出典：記者発表荒川ダム総合管理所ホームページ

渇水情報の発信(参考:H29渇水)

話題のポスト 最新 アカウント メディア リスト

荒川ダム総合管理所(浦山ダム・滝沢ダム... @jwa_arak... · 2017年8月25日 ...

荒川ダム総合管理所では、7月4日に渇水対策本部を設置し、各種渇水対応を行ってきましたが、本日9時をもって荒川水系の取水制限が全面解除されたことを受け、同日時をもって渇水対策本部を解散しました。節水へのご協力、ありがとうございました。
[water.go.jp/kanto/arakawa/...](http://water.go.jp/kanto/arakawa/)

ダム貯水池の情報 (8月26日 0時現在)

ダム貯水率の算出方法

浦山ダム		滝沢ダム	
貯水位	EL366.41m	貯水位	EL531.19m
貯水量	28,098千m³	貯水量	19,955千m³
貯水率	85.1%	貯水率	79.8%

貯水池運用状況PDF 貯水池運用状況見PDF

平成29年8月26日撮影 平成29年8月26日撮影

24 35

出典：X(旧Twitter)

利水補給のまとめ

- 浦山ダムは、滝沢ダム、二瀬ダム、荒川貯水池と相まって、河川管理者からの補給指示に基づき、流況を監視しながら適切に利水補給を行っている。
- 至近7カ年では取水制限をとまなう渇水はなかった。
- 至近7カ年の年平均発生電力量は、年間平均3,600世帯分の消費電力に相当する。
- ホームページやXなどを通じて、広く水源状況や利水補給などの情報を発信している。

利水補給4

利水補給6

利水補給7

利水補給8

【今後の方針】

- 浦山ダムは、滝沢ダム、二瀬ダム及び荒川貯水池と連携を図りながら、効率的なダム運用を引き続き実施していく。
- 今後も利水補給等について、住民等へ分かりやすい情報提供を引き続き実施していく。

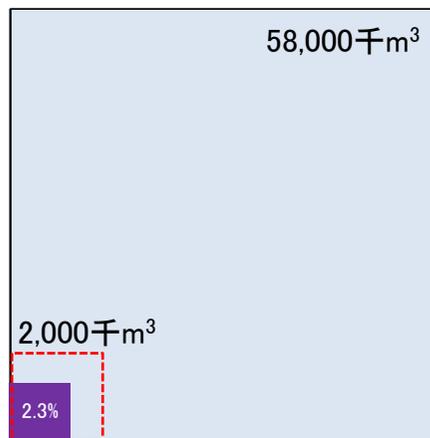
堆砂状況

- 令和6年度までの浦山ダム堆砂量は1,336千 m^3 であり、計画堆砂量2,000千 m^3 に対する堆砂率は66.8%である。
- 管理を開始した平成11年度から令和6年度にかけては、実績年平均堆砂量が49.6千 m^3 /年、年計画堆砂量20千 m^3 /年に対して2.5倍程度となっている。
- 至近7カ年では、令和元年度の出水により堆砂が進み、実績年平均堆砂量が56.8千 m^3 /年、年計画堆砂量の2.8倍程度で推移している。

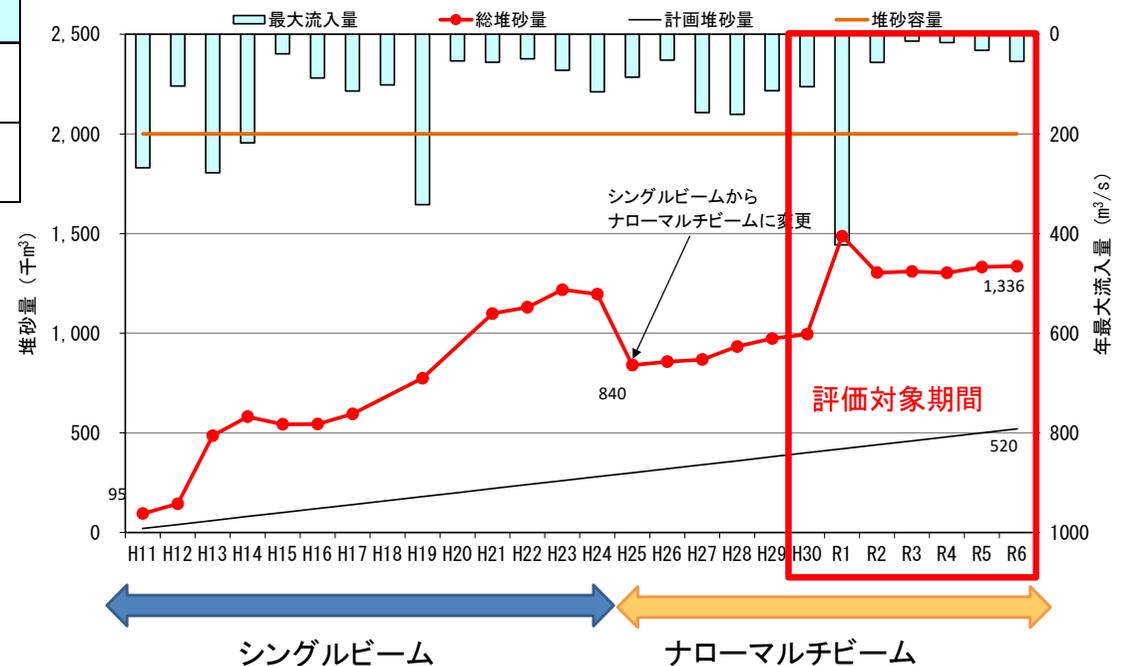
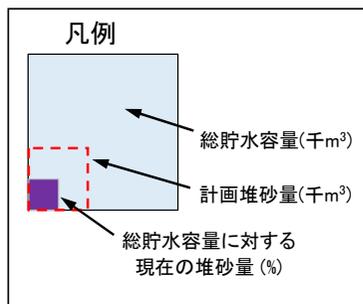
ダム名	計画堆砂年	経過年数 (R6時点)	現在(R6)の 堆砂量 (千 m^3)	総貯水容量 (千 m^3)	全堆砂率 ^{※1}	年計画堆砂量 (千 m^3 /年)
				計画堆砂量 (千 m^3)	堆砂率 ^{※2}	至近7カ年の 年実績堆砂量(千 m^3 /年)
浦山	100	26	1,336	58,000	2.3	20
				2,000	66.8	56.8

※1 全堆砂率 = (現在の堆砂量) / (総貯水容量)

※2 堆砂率 = (現在の堆砂量) / (計画堆砂量)



総貯水容量に対する堆砂量

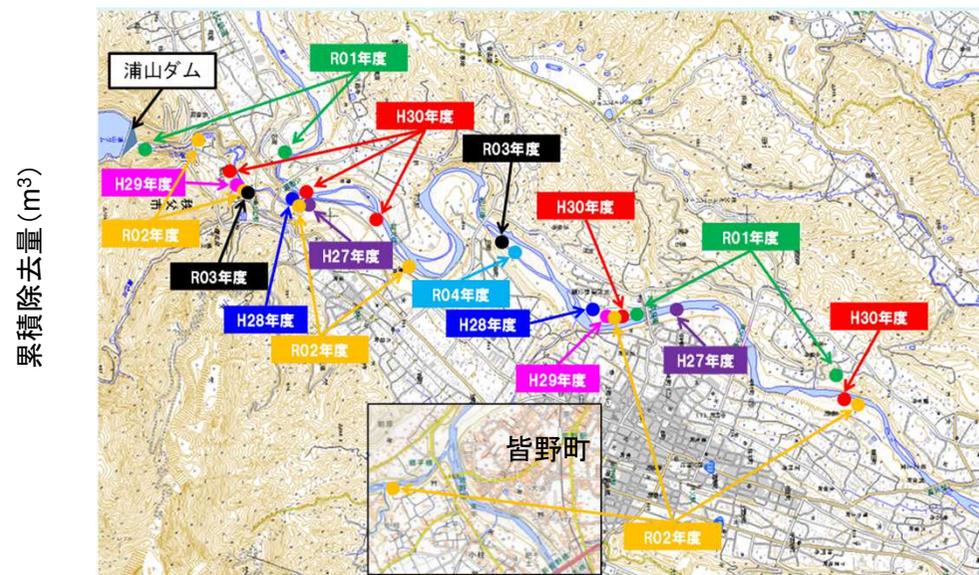
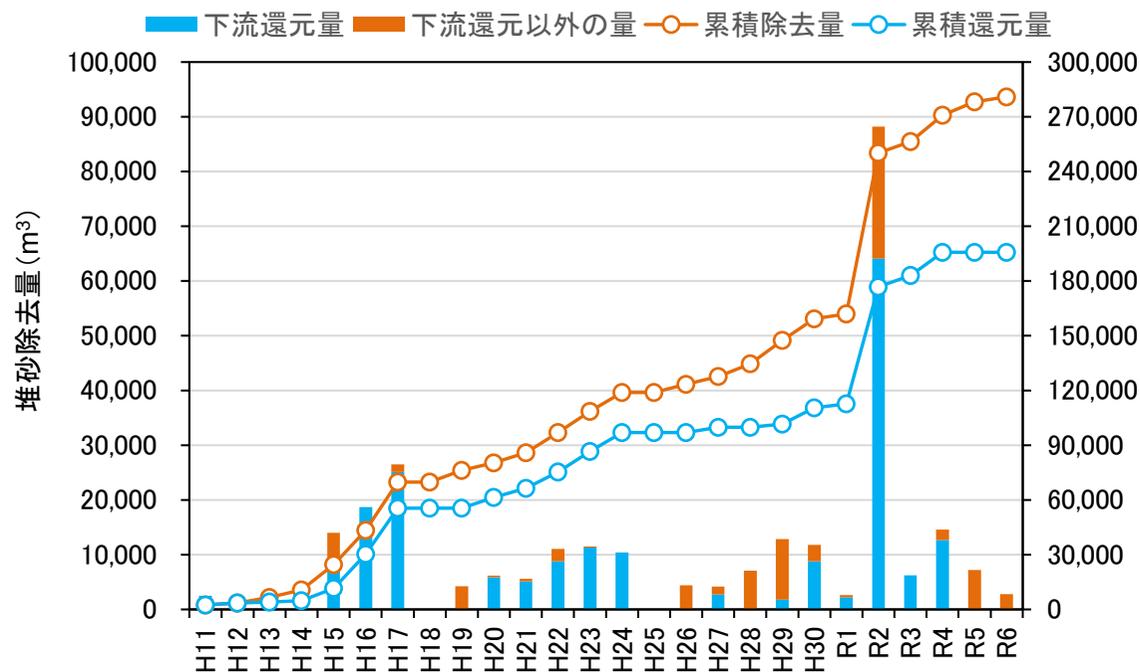


※図の黒線は、堆砂が一定のペースで進み、計画堆砂年で計画堆砂量(100年)に達すると想定して引いた直線

堆砂対策(1)

- 令和6年度までに除去した堆砂量は281千 m^3 であり、令和6年度時点の堆砂量の21%に相当する。
- 除去した堆砂量のうち、土砂還元として下流河川へ搬出している量は累計で196千 m^3 であり、全除去量の70%に相当する。

【浦山ダムの土砂還元の地点】



堆砂対策(2)

- ダム貯水池で発生した堆積土砂等の受入れについて、地元自治体等、国土交通省二瀬ダム管理所及び水資源機構荒川ダム総合管理所で、令和元年に協定を締結している。
- 協定締結後、秩父市へ3,950m³、長瀨町へ5,970m³搬入している。その他関係機関へ5,520m³、民間へ14,930m³搬入し、有効利用を図っている。



秩父市（グラウンド整備）



長瀨町（駐車場整備）



秩父市長との協定締結記念写真

※協定書締結先

秩父郡市(1市4町)及び秩父広域市町村圏組合

(1市4町:秩父市、横瀨町、皆野町、長瀨町、小鹿野町)

単位:m³

年度	秩父市	長瀨町	その他 関係機関	民間	備考
平成30年度			3,000		進入路整備
令和元年度					
令和2年度	3,950	2,570	2,520	13,750	グラウンド、公園、敷地整備
令和3年度					
令和4年度				370	敷地整備
令和5年度		1,300		810	運動施設、敷地整備
令和6年度		2,100			駐車場整備
合計	3,950	5,970	5,520	14,930	

堆砂のまとめ

- 令和6年度の浦山ダム堆砂量は1,336千 m^3 である。これは、計画堆砂量の66.8%にあたる。
- 平成11年度から令和6年度の年実績堆砂量は49.6千 m^3 /年であり、年計画堆砂量20千 m^3 /年の2.5倍程度の速度で堆砂が進行している。至近7カ年では、令和元年度に大きな出水があり、堆砂は年計画堆砂量の2.8倍程度で推移している。
- 除去した堆砂量は、令和6年度までの累計で281千 m^3 である。
- 除去した堆砂量の70%は、河川の環境改善のため、下流河川へ還元するとともに、近隣市町に提供して有効利用している。

堆砂1

堆砂1

堆砂2

堆砂2、3

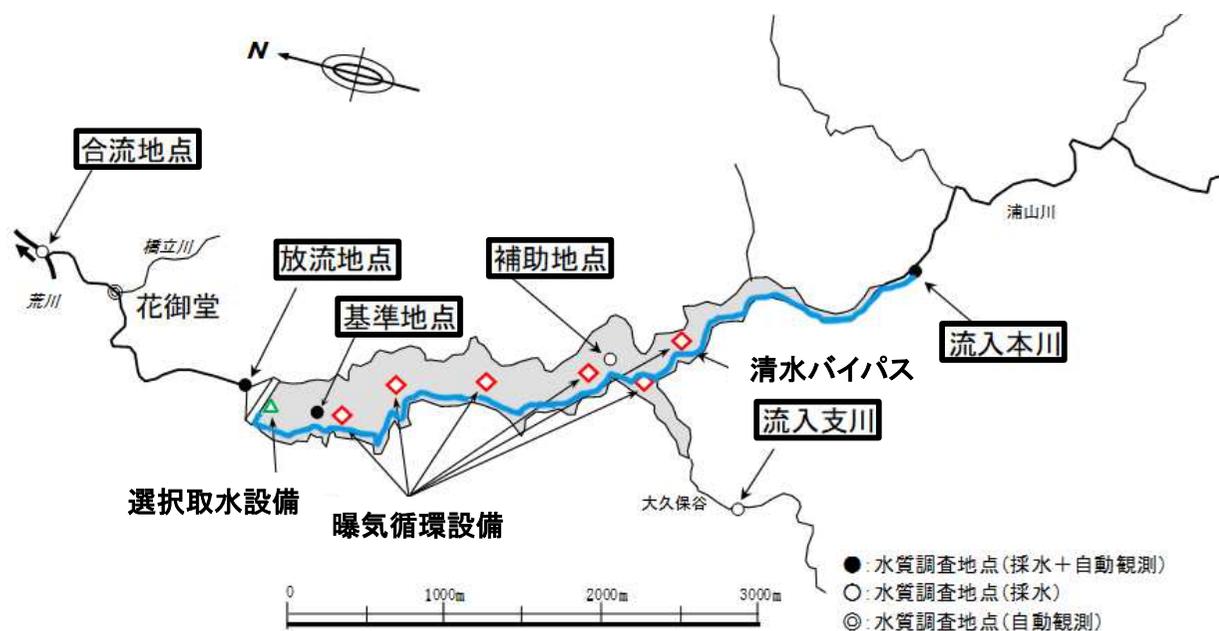
【今後の方針】

- 浦山ダムの堆砂は計画を上回ったペースで進んでおり、今後も引き続き堆砂状況を監視するとともに、堆砂除去を引き続き実施していく。
- 除去した堆積土砂等については、下流河川へ還元するとともに、近隣市町に提供して有効利用を図っていく。

環境基準類型指定状況

- 浦山ダムにおいては、流入河川(流入本川、流入支川)、貯水池内(基準地点、補助地点)、下流河川(放流地点、合流地点)において月1回水質調査を実施している。
- 浦山ダム・浦山川において、環境基準の類型指定はされていないため、近傍の二瀬ダムの類型指定である河川AA類型、湖沼A・Ⅲ類型を準用して水質を評価する。

【水質調査地点】



【二瀬ダム及び二瀬ダム流入河川・下流河川の環境基準】

	BOD	COD	pH	SS	DO	大腸菌群数	大腸菌数	T-P
湖沼 A・Ⅲ類型	—	3mg/L 以下	6.5以上 8.5以下	5mg/L 以下	7.5mg/L 以上	1,000MPN /100mL以下	300CFU/1 00mL以下	0.03mg/L 以下
河川 AA類型	1mg/L 以下	—	6.5以上 8.5以下	25mg/L 以下	7.5mg/L 以上	50MPN /100mL以下	20CFU/10 0mL以下	—

注) 大腸菌群数はR4.3以前、大腸菌数はR4.4以降

水質測定項目

■ 至近7カ年における水質調査項目・実施頻度は、以下のとおりである。

浦山ダム水質調査項目一覧(至近7カ年)

項目	放流河川		貯水池内				流入河川	
	合流地点	放流地点	基準地点			補助地点	流入本川	流入支川
			表層	中層	底層			
一般項目	濁度	○	○	○	○	○	○	○
	電気伝導度	○	○	○	○	○	○	○
生活項目	pH	○	○	○	○	○	○	○
	DO	○	○	○	○	○	○	○
	BOD	○	○	○	○	○	○	○
	COD	○	○	○	○	○	○	○
	SS	○	○	○	○	○	○	○
	大腸菌群数	○※1	○※1	○※1	○※1	○※1	○※1	○※1
	大腸菌数	○※1	○※1	○※1	○※1	○※1	○※1	○※1
	全亜鉛	○	○	○	○	○	○	○
	総窒素	○	○	○	○	○	○	○
	総リン	○	○	○	○	○	○	○
	ノニルフェノール			○				
LAS			○					
富栄養化関連項目	アンモニア態窒素			○	○	○		○
	溶解性総リン			○	○	○	○	○
	オルトリン酸態リン			○	○	○	○	○
	溶解性オルトリン酸態リン			○	○	○	○	○
	クロロフィルa	○	○	○	○	○	○	○
	フェオフィチン			○	○	○		
水道関連項目	植物プランクトン			○				
	動物プランクトン			△				
水道関連項目	2-MIB			○				
	ジオスミン			○				

※1 大腸菌群数: 令和4年3月まで年12回実施それ以降は、大腸菌数に切り替わったため、調査終了
大腸菌数: 令和4年4月より年12回実施

項目	放流河川		貯水池内				流入河川	
	合流地点	放流地点	基準地点			補助地点	流入本川	流入支川
			表層	中層	底層			
健康項目	カドミウム			▽				
	全シアン			▽				
	鉛			▽				
	六価クロム			▽				
	砒素			▽				
	総水銀			▽				
	アルキル水銀			▽				
	PCB			▽				
	ジクロロメタン			▽				
	四塩化炭素			▽				
	1, 2-ジクロロメタン			▽				
	1,1-ジクロロエチレン			▽				
	シス-1,2-ジクロロエチレン			▽				
	1,1,1-トリクロロエタン			▽				
	1,1,2-トリクロロエタン			▽				
	トリクロロエチレン			▽				
	テトラクロロエチレン			▽				
	1,3-ジクロロプロペン			▽				
	チウラム			▽				
	シマジン			▽				
	チオベンカルブ			▽				
	ベンゼン			▽				
	セレン			▽				
	硝酸性窒素及び亜硝酸性窒素			○	○	○	○	○
	フッ素			▽				
	ホウ素			▽				
	1,4-ジオキサン			▽				
	マンガン		○	○	○	○		
	鉄			○	○	○		
	ケイ素			○	○	○	○	○
溶存態ケイ素			○	○	○	○	○	

※総水銀が検出された場合、アルキル水銀の分析を実施

○ : 年12回測定 (月1回測定) □ : 年4回測定 (2, 5, 8, 11月測定) △ : 年3回測定 (6, 8, 11月測定) ▽ : 年1回測定 (8月測定)

水質状況

- 貯水池内底層のDO及び河川の大腸菌群数の超過率が高くなっている。
- 平成25～29年と至近7カ年（平成30～令和6年）における超過率の傾向を見ると、河川のBOD、補助地点表層のCOD、流入本川の大腸菌群数に低下傾向が、SSや基準地点のT-P及び貯水池内表層の大腸菌群数に上昇傾向が認められる。その他は概ね横ばい傾向である。

項目	放流河川				貯水池						流入河川					
	合流地点		放流地点		基準地点			補助地点			流入本川		流入支川			
					表層	中層		底層		表層						
	H25-H29	H30-R6														
pH	0/60	1/84	0/60	0/84	0/60	3/84	0/60	0/84	0/60	0/84	0/60	2/84	0/60	0/84	0/60	0/83
	→		→		→		→		→		→		→		→	
DO	0/60	0/84	0/60	0/84	0/60	0/84	11/60	14/84	43/60	62/84	0/60	0/84	0/60	0/84	0/60	0/83
	→		→		→		→		→		→		→		→	
BOD	2/60	0/84	5/60	0/84	-	-	-	-	-	-	-	-	3/60	0/84	0/60	0/83
	→		↓										↓			→
COD	-	-	-	-	0/60	1/84	0/60	1/84	2/60	1/84	6/60	2/84	-	-	-	-
					→		→		→		↓					
SS	2/60	9/84	1/60	11/84	3/60	8/84	2/60	14/84	17/60	39/84	5/60	11/84	6/60	6/84	0/60	2/83
	↑		↑		→		↑		↑		→		→		→	
T-P	-	-	-	-	1/60	9/84	0/60	9/84	3/60	17/84	4/60	10/84	-	-	-	-
					↑		↑		↑		→					
大腸菌群数	58/60	50/51	36/60	32/51	6/60	9/51	12/60	9/51	9/60	8/51	8/60	9/51	46/60	37/51	38/60	32/50
	→		→		↑		→		→		↑		↓		→	
大腸菌数	-	19/33	-	3/33	-	0/33	-	0/33	-	0/33	-	0/33	-	7/33	-	11/33

注1) n/m: H25～H29と至近7カ年（H30～R6）における水質調査回数をm、環境基準を超過した回数をnとした。

注2) H25～H29と至近7カ年（H30～R6）における超過率（小数第2位を四捨五入）の傾向を↓:低下傾向 ↑:上昇傾向 →:横ばいとした。

注3) —:該当する環境基準の設定なし。

注4) 大腸菌群数は令和4年3月まで測定。大腸菌数は令和4年4月から測定。

	: 環境基準値の超過回数が10%未満
	: 環境基準値の超過回数が10～25%
	: 環境基準値の超過回数が25～50%
	: 環境基準値の超過回数が50%以上

※浦山ダム、浦山川において環境基準の類型指定はされていない。このため、流入河川、下流河川については、近傍の二瀬ダム上流・二瀬ダム下流（中津川合流点まで）の環境基準である河川AA類型の基準値と、貯水池内については、二瀬ダムの環境基準である湖沼A類型、湖沼Ⅲ類型の基準値と比較した。

水質状況：水温

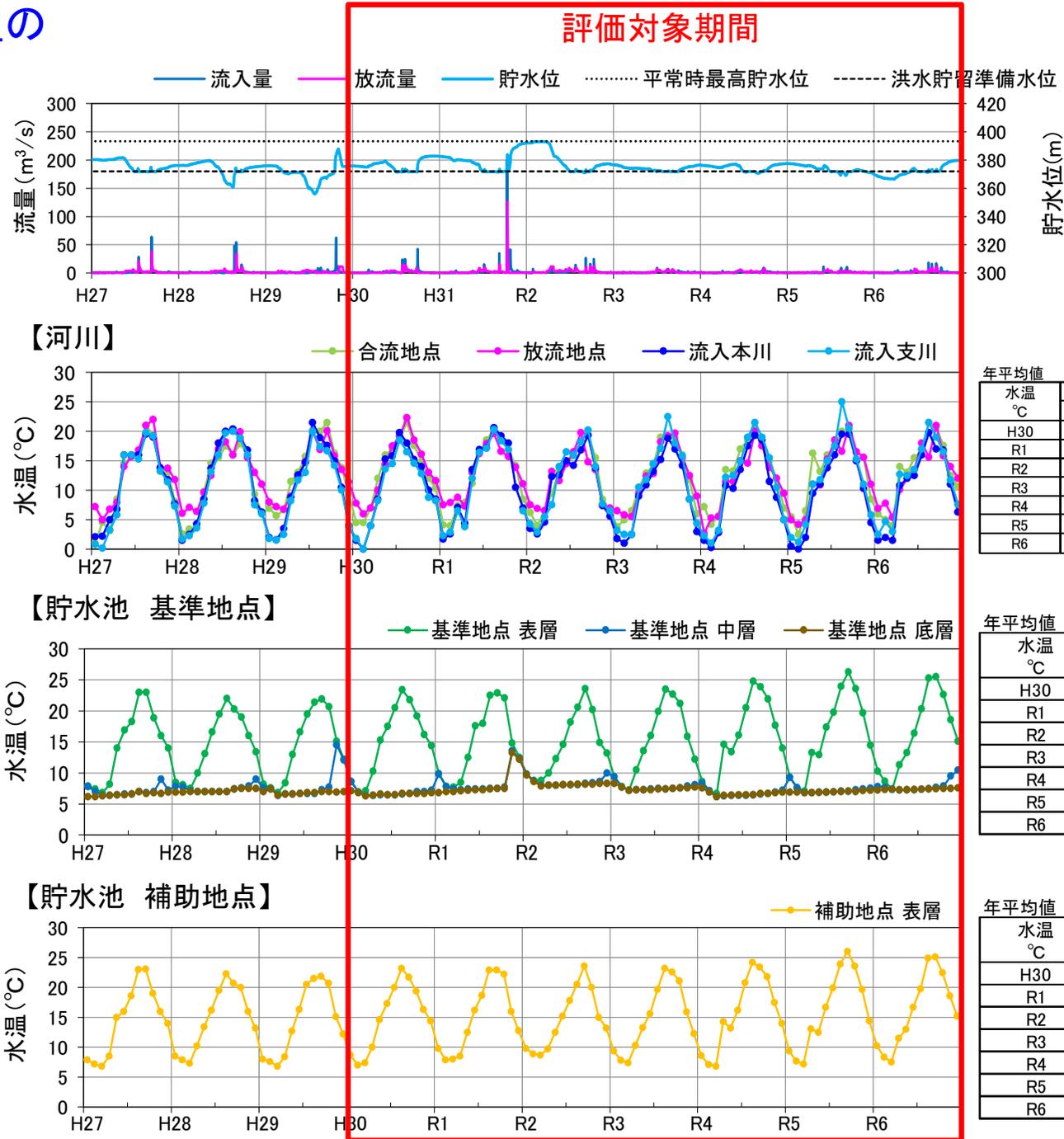
■ 至近7カ年における水温の状況は以下のとおり。

[流入河川・下流河川]

- ・至近7カ年では、春季から秋季はほぼ同じ水温だが、冬季は下流河川がやや高くなる。
- ・至近7カ年の年平均値は概ね同程度で推移している。

[貯水池]

- ・表層は季節変化が見られ、底層は年間を通じてほぼ一定である。
- ・表層の至近7カ年の年平均値は概ね同程度で推移している。



水質状況：濁度

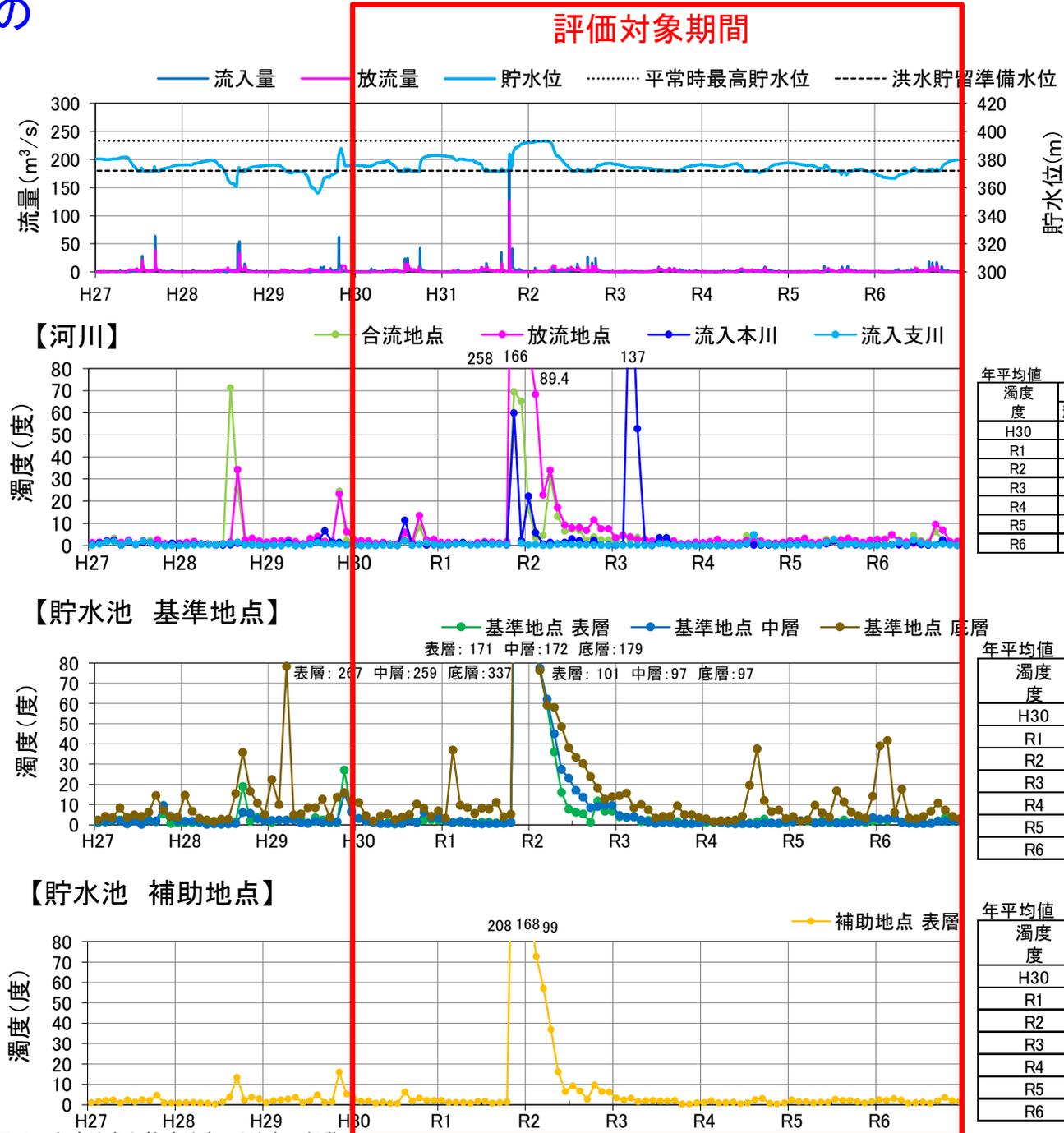
■ 至近7カ年における濁度の状況は以下のとおり。

[流入河川・下流河川]

- 令和元年10月の出水によって、令和元から2年にかけて流入支川以外の地点は長期間にわたって高濁度となった。
- 流入本川は令和3年3~4月に上流の工事の影響により高濁度となった。
- 至近7カ年の年平均値は、流入支川は1度以下で推移し、その他の地点は出水等の影響があった年を除くと概ね3度以下で推移した。

[貯水池]

- 至近7カ年の底層は表層に比べて高い値を示した。
- 令和元年10月の出水によって全層で高濁度の状態となり、表層でも令和2年4月まで濁度10度以上であった。
- 至近7カ年の表層の年平均値は出水による影響があった令和元年と令和2年を除くと概ね2度程度となっている。



年平均値

濁度 度	流入河川		下流河川	
	流入本川	流入支川	放流地点	合流地点
H30	1.2	0.4	3.1	1.9
R1	5.7	0.5	36.3	12.0
R2	3.4	0.3	24.2	8.4
R3	16.5	0.3	2.4	1.8
R4	0.2	0.7	1.6	1.0
R5	0.5	0.6	2.1	1.3
R6	0.6	0.7	3.1	2.5

年平均値

濁度 度	基準地点		
	表層	中層	底層
H30	1.9	2.0	5.7
R1	37.5	36.7	51.3
R2	27.8	33.3	42.4
R3	1.9	1.9	7.5
R4	1.1	0.9	8.4
R5	1.5	1.5	7.0
R6	1.7	1.7	12.2

年平均値

濁度 度	補助地点 表層
H30	2.2
R1	32.5
R2	27.5
R3	1.9
R4	1.3
R5	1.7
R6	1.9

※流入河川：流入本川と流入支川の2地点の総称 下流河川：合流地点と放流地点の2地点の総称

水質状況:pH

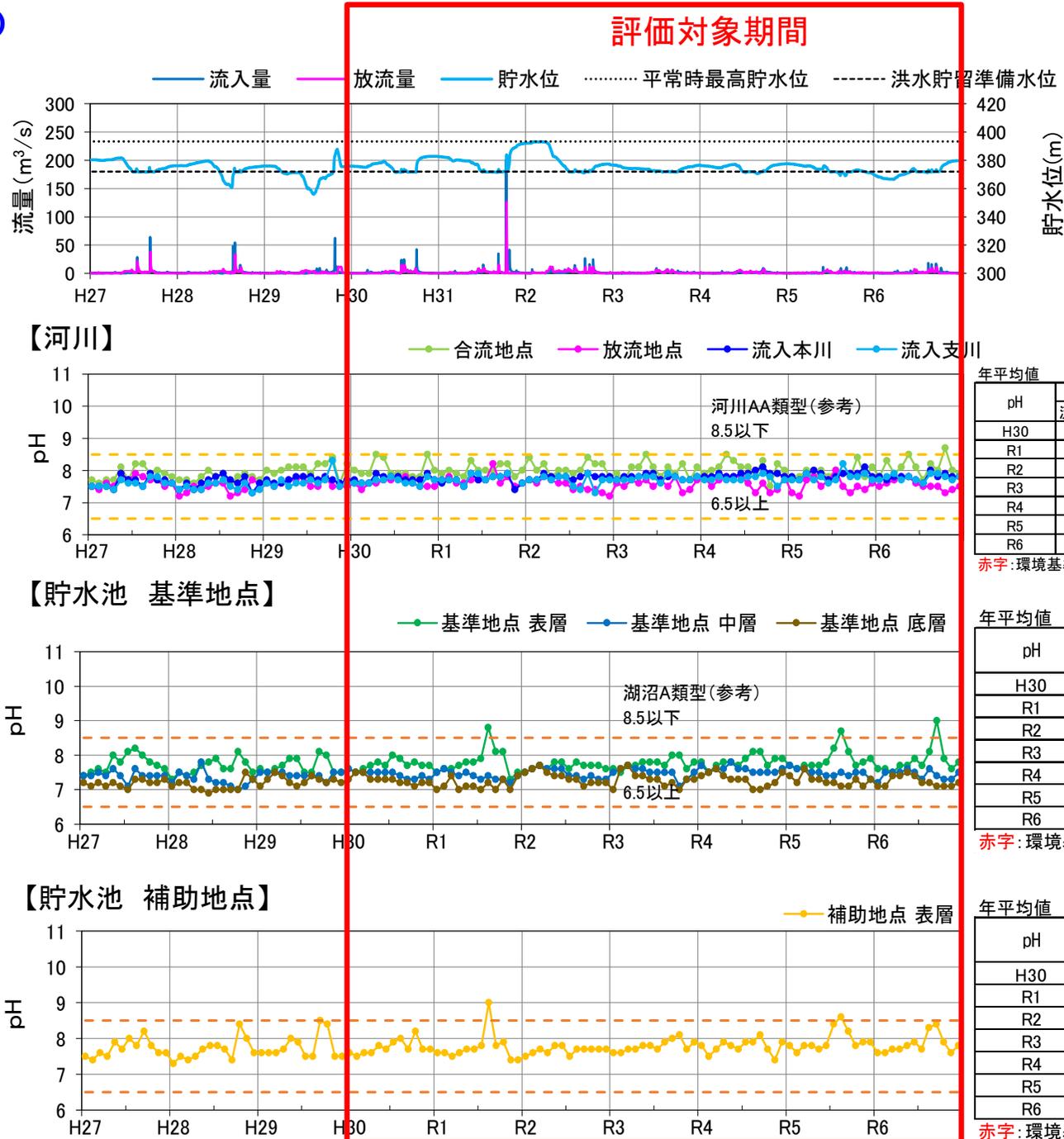
■ 至近7カ年におけるpHの状況は以下のとおり。

【流入河川・下流河川】

- ・至近7カ年は合流地点で一時的に8.5を超えることがあるが、流入河川、下流河川ともに概ね環境基準値内で推移している。
- ・至近7カ年の年平均値は環境基準を満足しており、概ね同程度で推移している。

【貯水池】

- ・至近7カ年の表層は一時的に8.5を超えることがあるが、概ね環境基準値内で推移している。
- ・至近7カ年の表層の年平均値は環境基準を満足しており、概ね同程度で推移している。



※pHにおいて、環境基準の超過は環境基準値の範囲外となることを言う。

※流入河川：流入本川と流入支川の2地点の総称
下流河川：合流地点と放流地点の2地点の総称

水質状況：DO

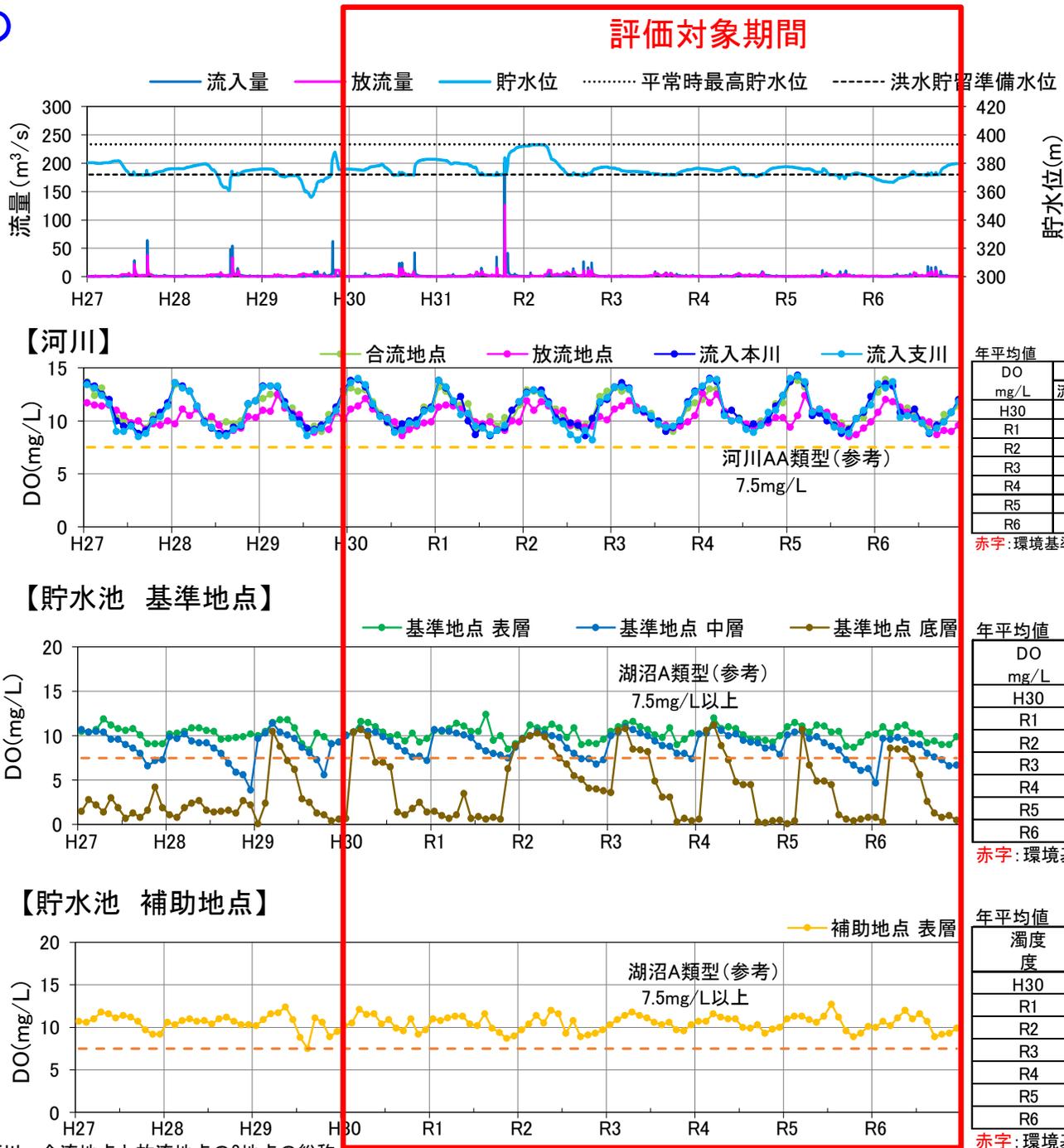
■ 至近7カ年におけるDOの状況は以下のとおり。

[流入河川・下流河川]

- ・至近7カ年の流入河川及び下流河川は冬季に高く、夏季に低くなる季節変化を示しており、環境基準値以上で推移している。
- ・至近7カ年の年平均値は環境基準を満足しており、概ね同程度で推移している。

[貯水池]

- ・至近7カ年の表層は環境基準値以上で推移している。
- ・至近7カ年の底層は令和2年を除き夏季から冬季の嫌気化が顕著になっている。
- ・表層の至近7カ年の年平均値は環境基準を満足しており、概ね同程度で推移している。



年平均値

DO mg/L	流入河川		下流河川	
	流入本川	流入支川	放流地点	合流地点
H30	11.2	11.1	10.3	10.9
R1	10.8	10.7	10.3	10.9
R2	11.0	10.6	10.6	11.3
R3	11.3	11.3	10.5	11.1
R4	11.3	11.1	10.6	11.0
R5	11.1	11.2	10.1	11.2
R6	11.1	11.0	10.3	11.2

赤字:環境基準の超過

年平均値

DO mg/L	基準地点		
	表層	中層	底層
H30	10.3	9.3	5.0
R1	10.4	9.3	2.2
R2	10.2	8.8	7.1
R3	10.5	9.4	5.2
R4	10.3	9.6	4.5
R5	10.3	8.6	3.0
R6	10.1	8.1	3.8

赤字:環境基準の超過(表層のみ対象)

年平均値

濁度	補助地点 表層
H30	10.6
R1	10.4
R2	10.2
R3	10.7
R4	10.5
R5	10.7
R6	10.4

※DOにおいて、環境基準の超過は環境基準値未満となることを言う。

赤字:環境基準の超過

※流入河川：流入本川と流入支川の2地点の総称 下流河川：合流地点と放流地点の2地点の総称

水質状況：BOD

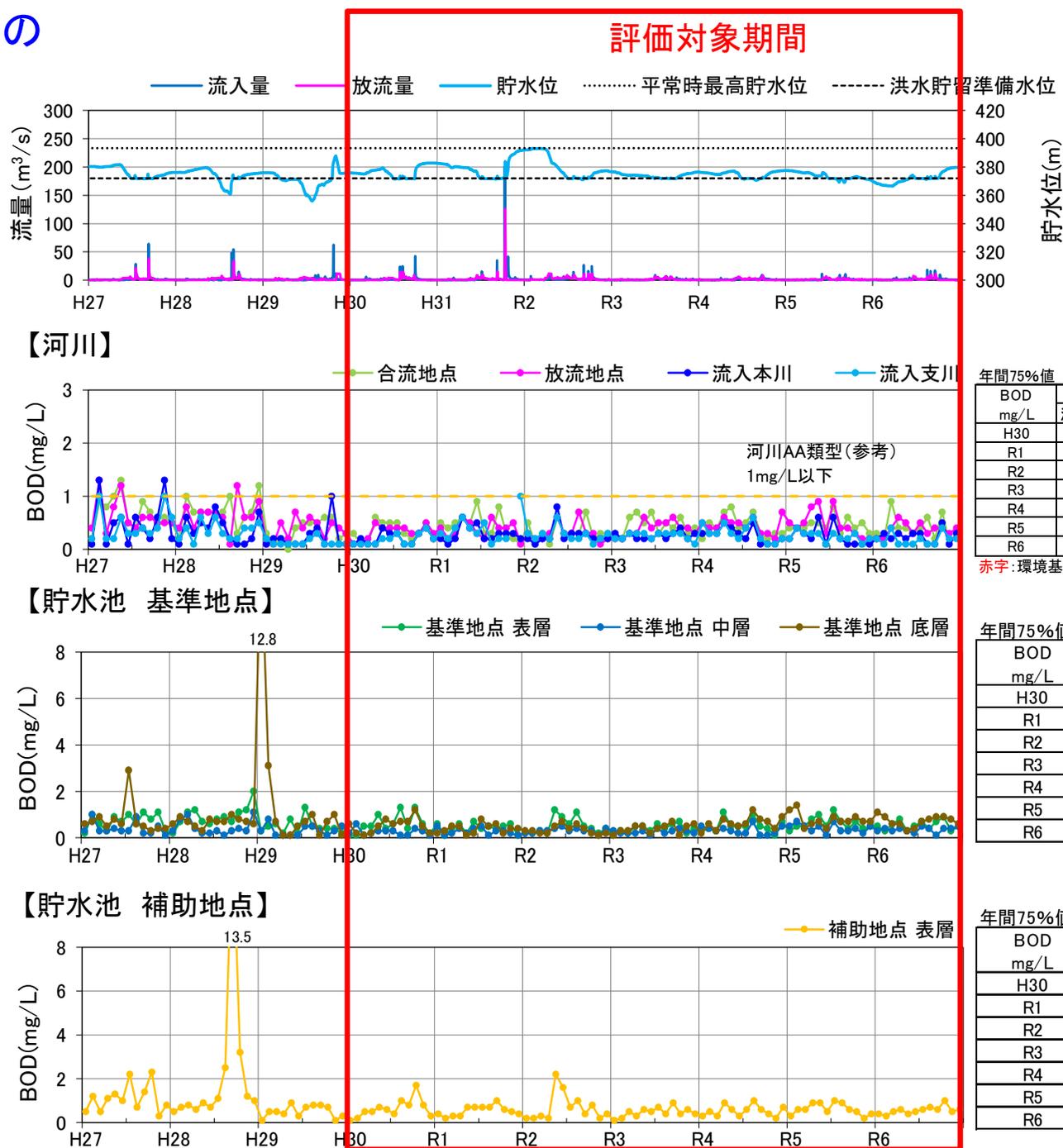
■ 至近7カ年におけるBODの状況は以下のとおり。

[流入河川・下流河川]

- ・至近7カ年の流入河川及び下流河川は環境基準値以下で推移している。
- ・至近7カ年の年間75%値は環境基準を満足しており、概ね同程度で推移している。

[貯水池]

- ・至近7カ年の貯水池内は概ね同程度で推移している。
- ・至近7カ年の表層の年間75%値は概ね同程度で推移している。



水質状況:COD

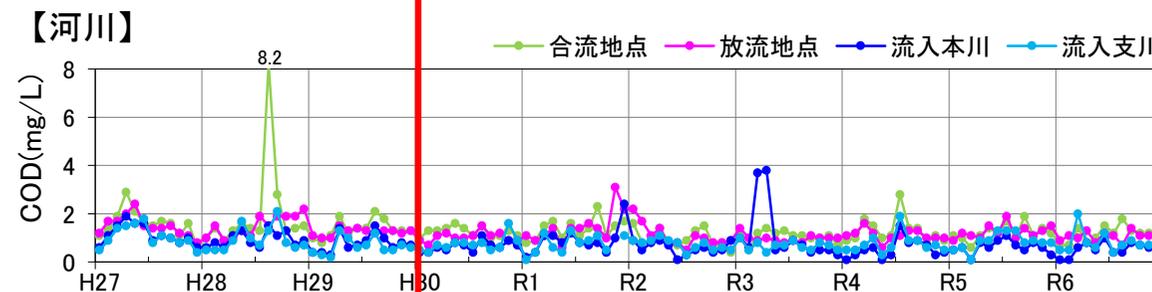
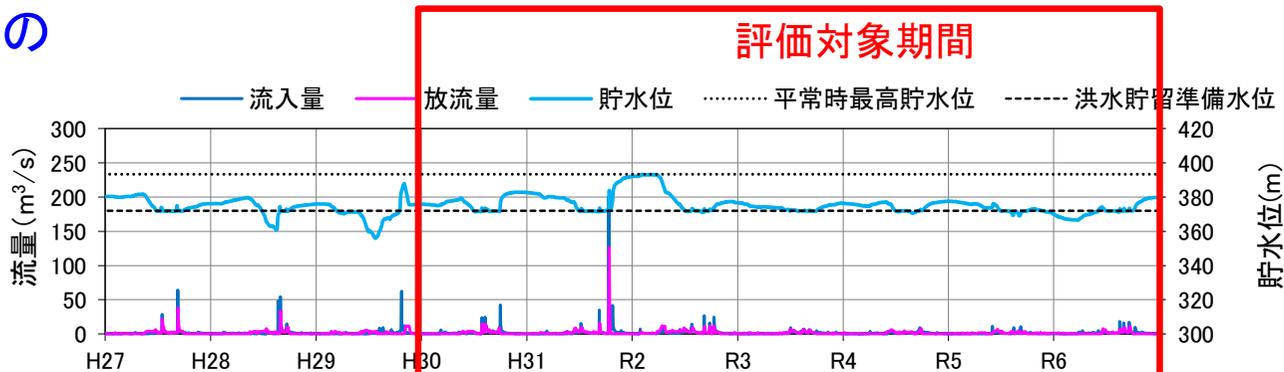
■ 至近7カ年におけるCODの状況は以下のとおり。

[流入河川・下流河川]

- ・至近7カ年の流入河川及び下流河川は概ね同程度で推移している。
- ・至近7カ年の年間75%値は概ね同程度で推移している。

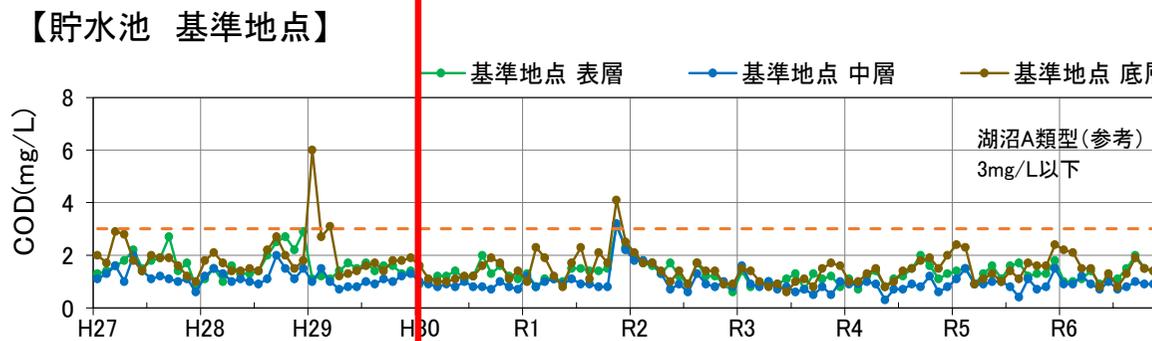
[貯水池]

- ・至近7カ年の表層は概ね環境基準値以下で推移している。
- ・至近7カ年の表層の年間75%値は環境基準を満足しており、概ね同程度で推移している。



年間75%値

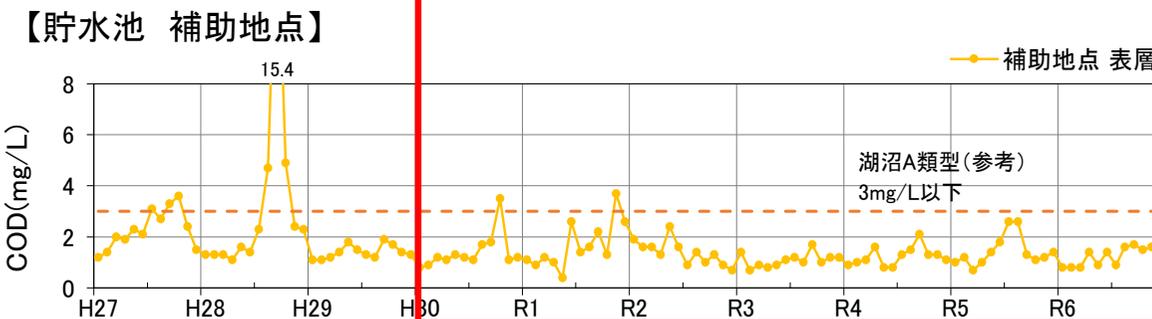
COD mg/L	流入河川		下流河川	
	流入本川	流入支川	放流地点	合流地点
H30	0.7	0.8	1.1	1.4
R1	1.1	1.1	1.4	1.6
R2	0.8	0.9	1.1	1.3
R3	0.9	0.8	1.0	1.2
R4	0.7	0.9	1.2	1.4
R5	0.8	0.9	1.4	1.4
R6	0.7	0.8	1.1	1.3



年間75%値

COD mg/L	基準地点		
	表層	中層	底層
H30	1.3	0.9	1.6
R1	1.5	1.1	2.3
R2	1.7	1.3	1.7
R3	1.2	0.9	1.5
R4	1.4	0.9	1.5
R5	1.6	1.1	1.7
R6	1.5	1.0	1.5

赤字: 環境基準の超過(表層のみ対象)



年間75%値

COD mg/L	補助地点
	表層
H30	1.3
R1	2.2
R2	1.6
R3	1.2
R4	1.3
R5	1.4
R6	1.6

赤字: 環境基準の超過

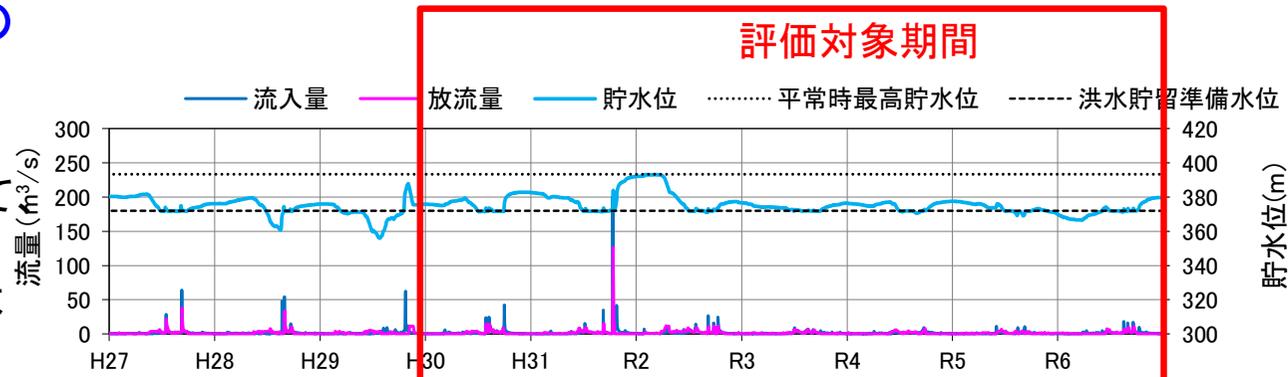
※流入河川: 流入本川と流入支川の2地点の総称
下流河川: 合流地点と放流地点の2地点の総称

水質状況:SS

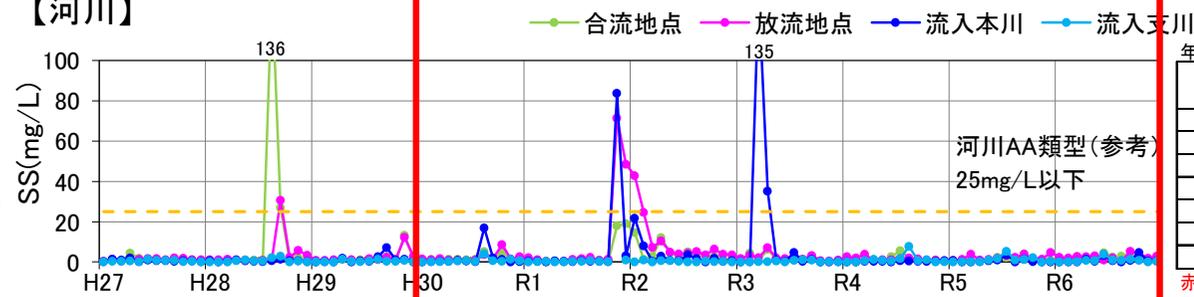
■ 至近7カ年におけるSSの状況は以下のとおり。

[流入河川・下流河川]

- ・令和元年10月の出水によって流入本川において令和元年11月に、放流地点においては令和2年1月まで環境基準値を超過した。
- ・上流の工事の影響により、令和3年3~4月に流入本川で環境基準値を超過した。
- ・至近7カ年の年平均値は環境基準を満足している。



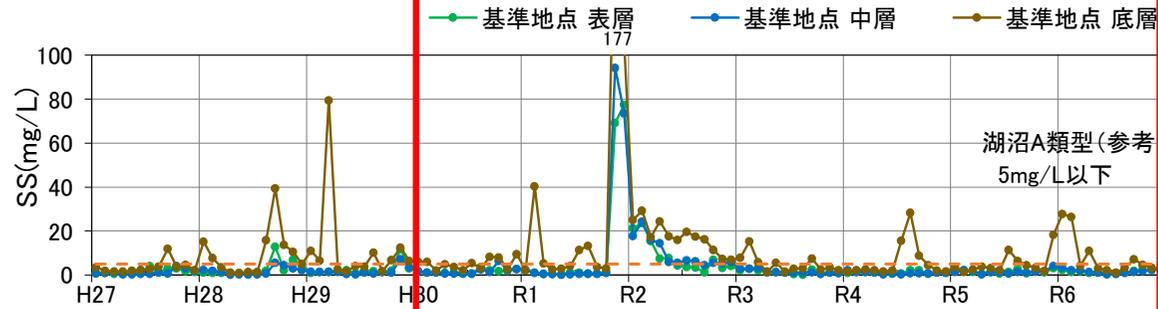
【河川】



SS mg/L	流入河川		下流河川	
	流入本川	流入支川	放流地点	合流地点
H30	1.9	0.8	2.2	1.8
R1	7.5	0.4	11.0	3.7
R2	3.6	0.4	10.1	4.7
R3	14.9	0.4	2.2	1.7
R4	0.4	1.3	1.6	1.4
R5	0.7	1.1	2.3	1.4
R6	1.1	0.9	2.6	2.2

赤字:環境基準の超過

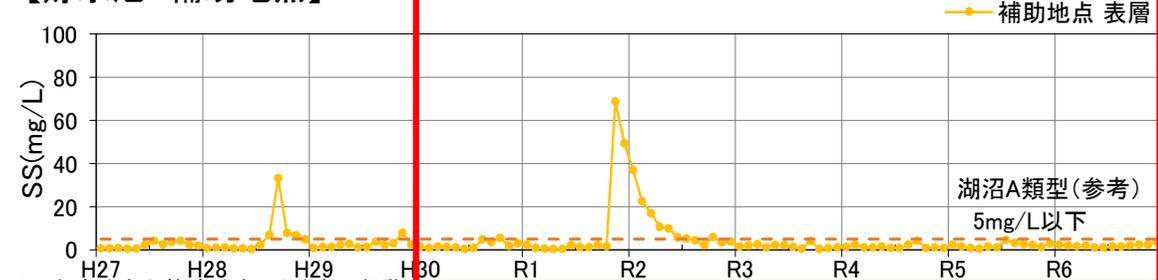
【貯水池 基準地点】



SS mg/L	基準地点		
	表層	中層	底層
H30	1.6	1.8	5.1
R1	13.0	14.5	30.8
R2	8.5	9.8	17.4
R3	1.4	1.5	4.9
R4	1.2	1.0	6.1
R5	1.6	1.5	5.2
R6	1.6	1.7	8.0

赤字:環境基準の超過(表層のみ対象)

【貯水池 補助地点】



SS mg/L	補助地点
	表層
H30	2.2
R1	11.0
R2	10.7
R3	1.7
R4	1.5
R5	2.1
R6	2.0

赤字:環境基準の超過

※流入河川: 流入本川と流入支川の2地点の総称 下流河川: 合流地点と放流地点の2地点の総称

水質状況:T-N

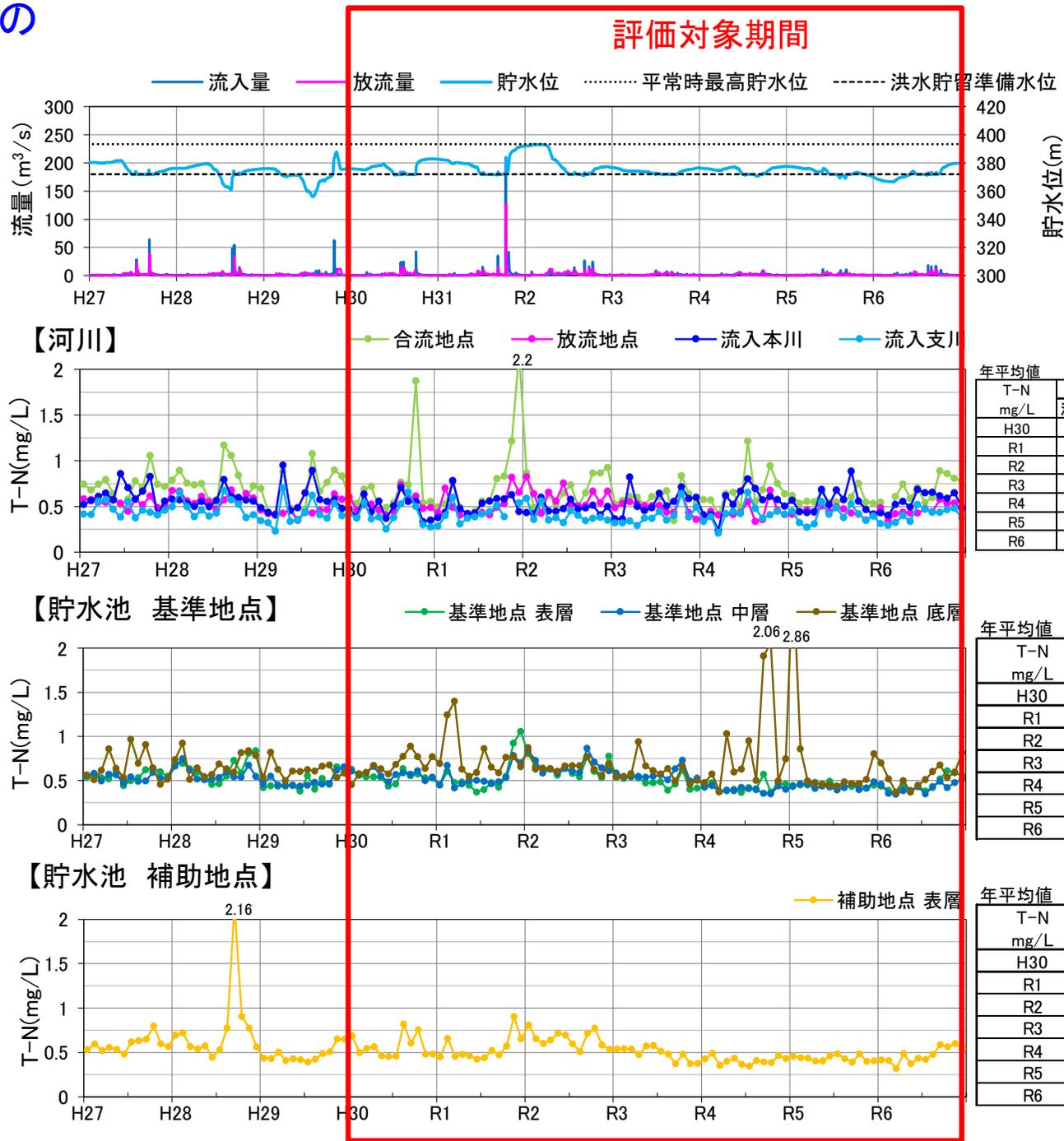
■ 至近7カ年におけるT-Nの状況は以下のとおり。

[流入河川・下流河川]

- ・至近7カ年の下流河川の合流地点において高い値を示すことがある。
- ・至近7カ年の年平均値は概ね同程度で推移している。

[貯水池]

- ・至近7カ年の貯水池内は季節変化はなく、基準地点底層において高い値を示すことがある。
- ・至近7カ年の年平均値は概ね同程度で推移している。



年平均値

T-N mg/L	流入河川		下流河川	
	流入本川	流入支川	放流地点	合流地点
H30	0.49	0.41	0.53	0.71
R1	0.52	0.42	0.51	0.77
R2	0.48	0.40	0.60	0.69
R3	0.55	0.39	0.49	0.59
R4	0.55	0.42	0.44	0.68
R5	0.56	0.41	0.44	0.58
R6	0.56	0.40	0.46	0.67

年平均値

T-N mg/L	基準地点		
	表層	中層	底層
H30	0.54	0.57	0.67
R1	0.56	0.54	0.78
R2	0.64	0.67	0.67
R3	0.49	0.56	0.60
R4	0.43	0.40	0.86
R5	0.45	0.43	0.73
R6	0.46	0.42	0.55

年平均値

T-N mg/L	補助地点
	表層
H30	0.57
R1	0.54
R2	0.65
R3	0.49
R4	0.41
R5	0.43
R6	0.47

※流入河川：流入本川と流入支川の2地点の総称
下流河川：合流地点と放流地点の2地点の総称

水質状況:T-P

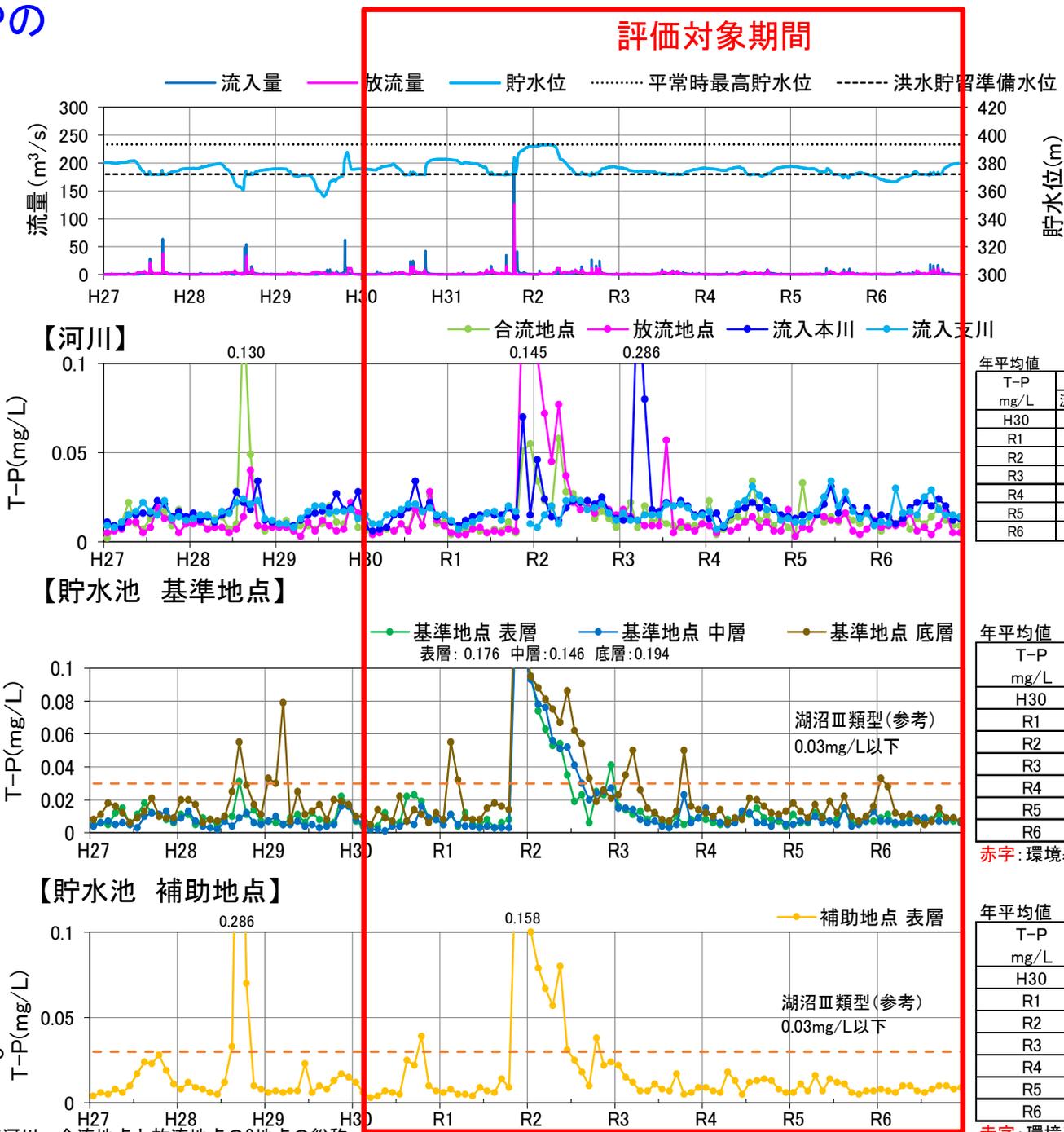
■ 至近7カ年におけるT-Pの状況は以下のとおり。

[流入河川・下流河川]

- ・令和元年10月の出水による影響により、流入河川及び下流河川で、令和元年から令和2年に高い値を示している。
- ・至近7カ年の年平均値は概ね同程度で推移している。

[貯水池]

- ・至近7カ年の表層は、令和元年10月の出水による影響により、令和元年から令和2年に高い値を示している。
- ・至近7カ年の表層の年平均値は、令和2年を除き環境基準を満足している。



年平均値

T-P mg/L	流入河川		下流河川	
	流入本川	流入支川	放流地点	合流地点
H30	0.015	0.016	0.010	0.010
R1	0.019	0.013	0.026	0.014
R2	0.022	0.017	0.039	0.024
R3	0.034	0.016	0.014	0.012
R4	0.017	0.018	0.009	0.014
R5	0.018	0.018	0.010	0.014
R6	0.017	0.018	0.009	0.011

年平均値

T-P mg/L	基準地点		
	表層	中層	底層
H30	0.010	0.006	0.011
R1	0.030	0.025	0.041
R2	0.043	0.048	0.059
R3	0.010	0.010	0.022
R4	0.008	0.008	0.013
R5	0.008	0.008	0.014
R6	0.008	0.007	0.013

赤字: 環境基準の超過(表層のみ対象)

年平均値

T-P mg/L	補助地点 表層
H30	0.012
R1	0.028
R2	0.046
R3	0.011
R4	0.010
R5	0.009
R6	0.008

赤字: 環境基準の超過

※流入河川: 流入本川と流入支川の2地点の総称 下流河川: 合流地点と放流地点の2地点の総称

水質状況：クロロフィルa

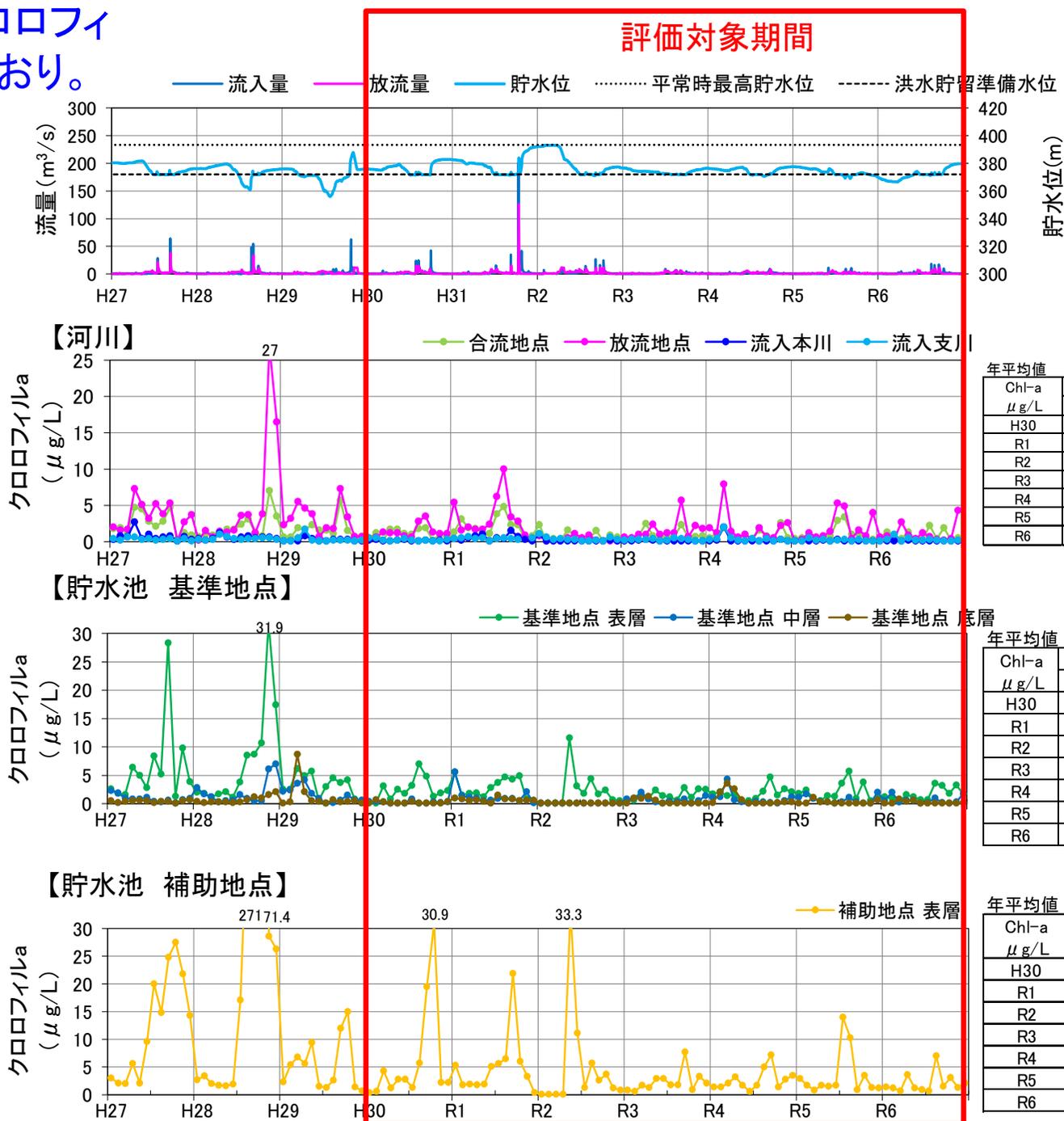
■ 至近7カ年におけるクロロフィルaの状況は以下のとおり。

【流入河川・下流河川】

- ・至近7カ年の流入河川は、下流河川に比べて低くなる傾向がある。
- ・至近7カ年の年平均値は概ね同程度で推移している。

【貯水池】

- ・表層では、夏季に高くなる傾向を示している。
- ・補助地点では、平成30年から令和2年に一時的に高い値となっている。同時期に植物プランクトンの増殖による淡水赤潮が確認された。
- ・至近7カ年の表層の年平均値について、平成30年から令和2年で高い値となった。



年平均値

Chl-a μg/L	流入河川		下流河川	
	流入本川	流入支川	放流地点	合流地点
H30	0.2	0.2	1.3	1.1
R1	0.5	0.4	3.2	2.1
R2	0.2	0.4	0.4	0.8
R3	0.1	0.3	1.6	0.9
R4	0.3	0.4	1.9	1.0
R5	0.1	0.2	1.8	1.0
R6	0.1	0.3	1.1	0.9

年平均値

Chl-a μg/L	基準地点		
	表層	中層	底層
H30	2.4	0.3	0.2
R1	2.8	1.3	0.7
R2	2.2	0.1	0.1
R3	1.5	0.7	0.4
R4	1.8	0.9	0.9
R5	2.0	0.7	0.3
R6	1.7	0.6	0.2

年平均値

Chl-a μg/L	補助地点
	表層
H30	6.2
R1	5.1
R2	5.0
R3	2.3
R4	2.7
R5	3.5
R6	2.1

※流入河川：流入本川と流入支川の2地点の総称
下流河川：合流地点と放流地点の2地点の総称

水質状況:大腸菌群数・大腸菌数

■ 至近7カ年における大腸菌群数と大腸菌数の状況は以下のとおり。

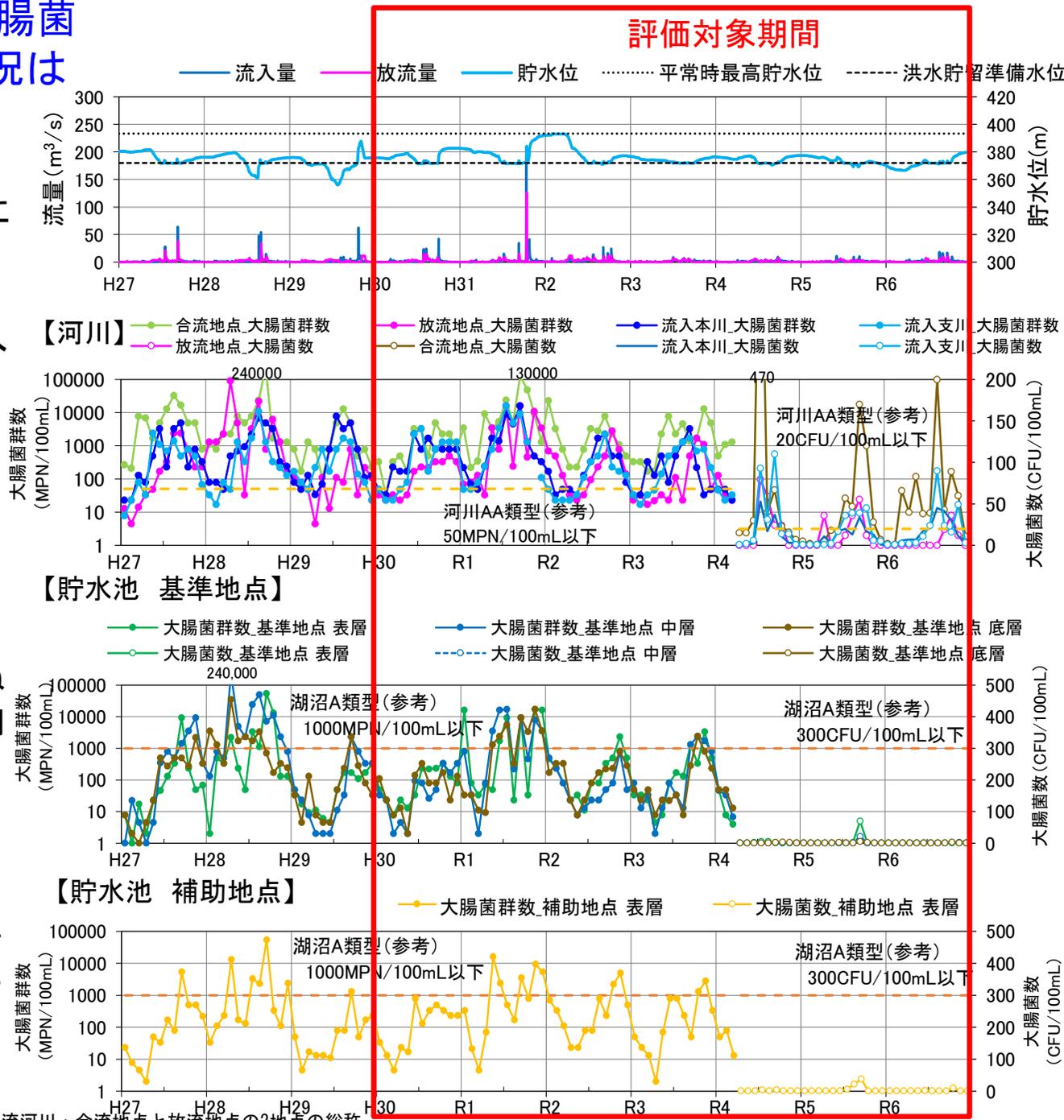
【流入河川・下流河川】

- ・大腸菌群数、大腸菌数ともに夏季に高くなる傾向がある。
- ・至近7カ年の大腸菌群数の年平均値は、令和4年の流入河川を除き環境基準を満足していない。
- ・至近7カ年の大腸菌数の年間90%値は、流入本川と放流地点の一部の年を除き、環境基準を満足していない。

【貯水池】

- ・貯水池の大腸菌群数は概ね夏季から秋季に高くなる傾向がある。
- ・大腸菌数は低い値で推移している。
- ・至近7カ年の表層の大腸菌群数の年平均値は令和元年以外は環境基準を満足した。また大腸菌数の年間90%値は環境基準を満足している。

評価対象期間



年平均値	流入河川		下流河川	
	流入本川	流入支川	放流地点	合流地点
大腸菌群数 MPN/100mL	717	890	187	1561
H30	2967	3292	4317	20064
R1	479	326	496	3853
R2	541	522	302	3258
R3	40	34	62	963
R4	-	-	-	-
R5	-	-	-	-
R6	-	-	-	-

赤字:環境基準の超過

年間90%値	流入河川		下流河川	
	流入本川	流入支川	放流地点	合流地点
大腸菌群数 CFU/100mL	-	-	-	-
H30	-	-	-	-
R1	-	-	-	-
R2	-	-	-	-
R3	-	-	-	-
R4	53	110	97	470
R5	20	39	8	120
R6	41	49	3	89

赤字:環境基準の超過

年平均値	基準地点		
	表層	中層	底層
大腸菌群数 MPN/100mL	-	-	-
H30	114	95	92
R1	5782	4890	3543
R2	384	155	221
R3	492	538	326
R4	20	29	37
R5	-	-	-
R6	-	-	-

赤字:環境基準の超過(表層のみ対象)

年間90%値	基準地点		
	表層	中層	底層
大腸菌数 CFU/100mL	-	-	-
H30	-	-	-
R1	-	-	-
R2	-	-	-
R3	-	-	-
R4	5	2	4
R5	2	1	2
R6	1	2	1

赤字:環境基準の超過

年平均値	補助地点	
	表層	底層
大腸菌群数 MPN/100mL	-	-
H30	218	-
R1	3215	-
R2	830	-
R3	537	-
R4	47	-
R5	-	-
R6	-	-

赤字:環境基準の超過

年間90%値	補助地点	
	表層	底層
大腸菌数 CFU/100mL	-	-
H30	-	-
R1	-	-
R2	-	-
R3	-	-
R4	4	-
R5	22	-
R6	2	-

※大腸菌群数調査はR4.3で終了
 ※流入河川: 流入本川と流入支川の2地点の総称 下流河川: 合流地点と放流地点の2地点の総称

水質状況：水質鉛直分布

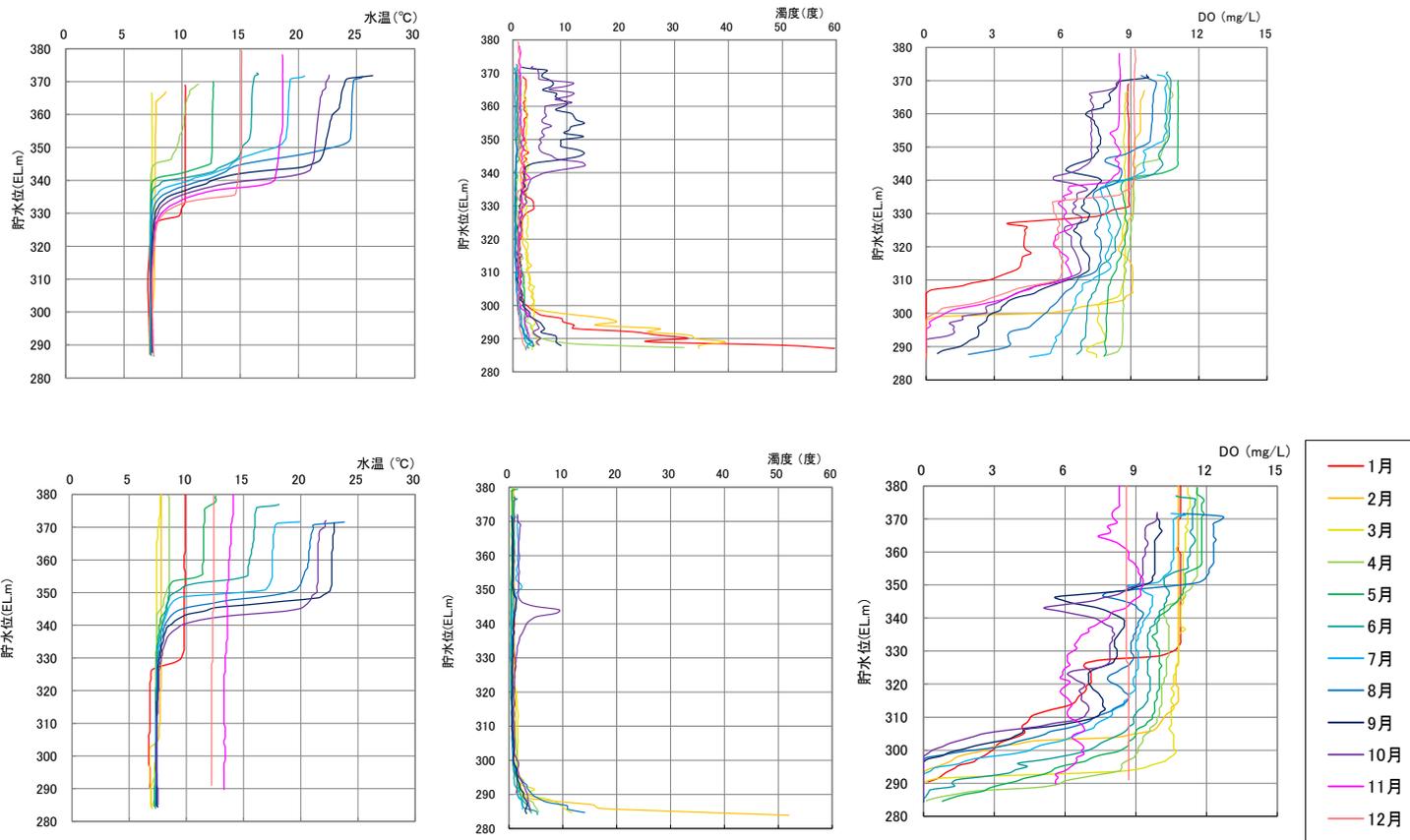
■ 浦山ダムは年回転率、7月回転率から成層型に分類され、水温躍層が発達しやすい貯水池である。

■ 水温躍層は4月頃から形成されはじめ、夏季には躍層の位置は概ね水深20mとなる。浅層曝気循環設備(吐出水深は通常水深20m)による影響と考えられる。

■ DO濃度は、表層～中層にかけてはほぼ一様な分布となっているが、中層～底層は夏季から冬季に低下する傾向がある。

平水年 (R6)

洪水年 (R1)



貯水池内基準地点における水質鉛直分布

浦山ダムの回転率 (平成30年～令和5年)

	H30	R1	R2	R3	R4	R5	R6	平均
年回転率	1.11	1.66	1.35	0.82	0.78	0.69	1.02	1.06
7月回転率	0.12	0.20	0.25	0.17	0.08	0.06	0.08	0.14

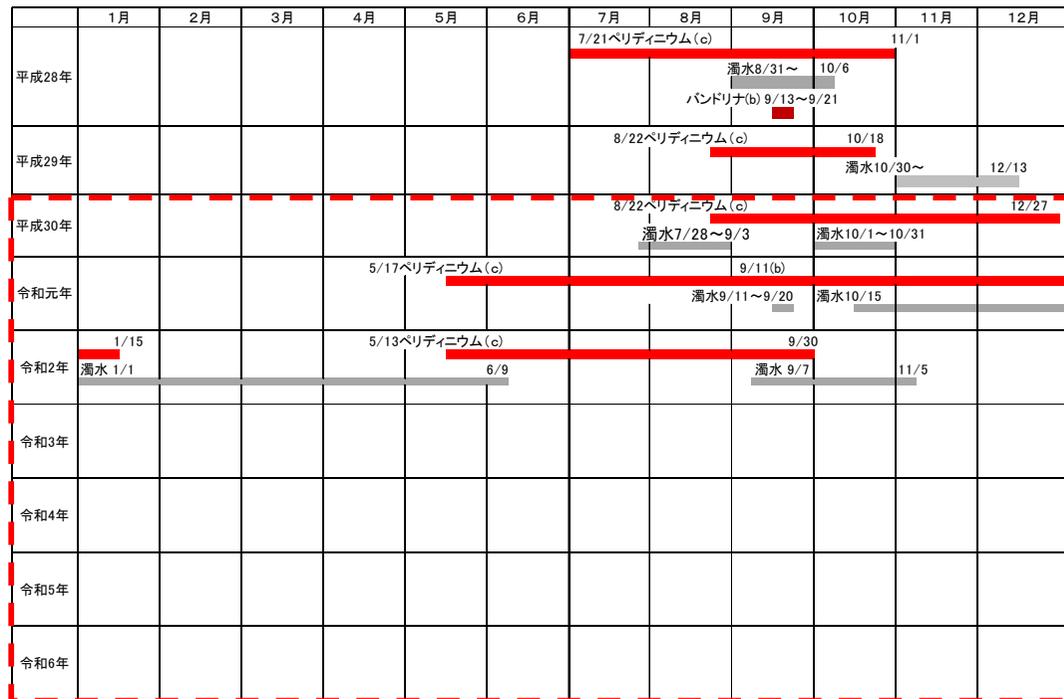
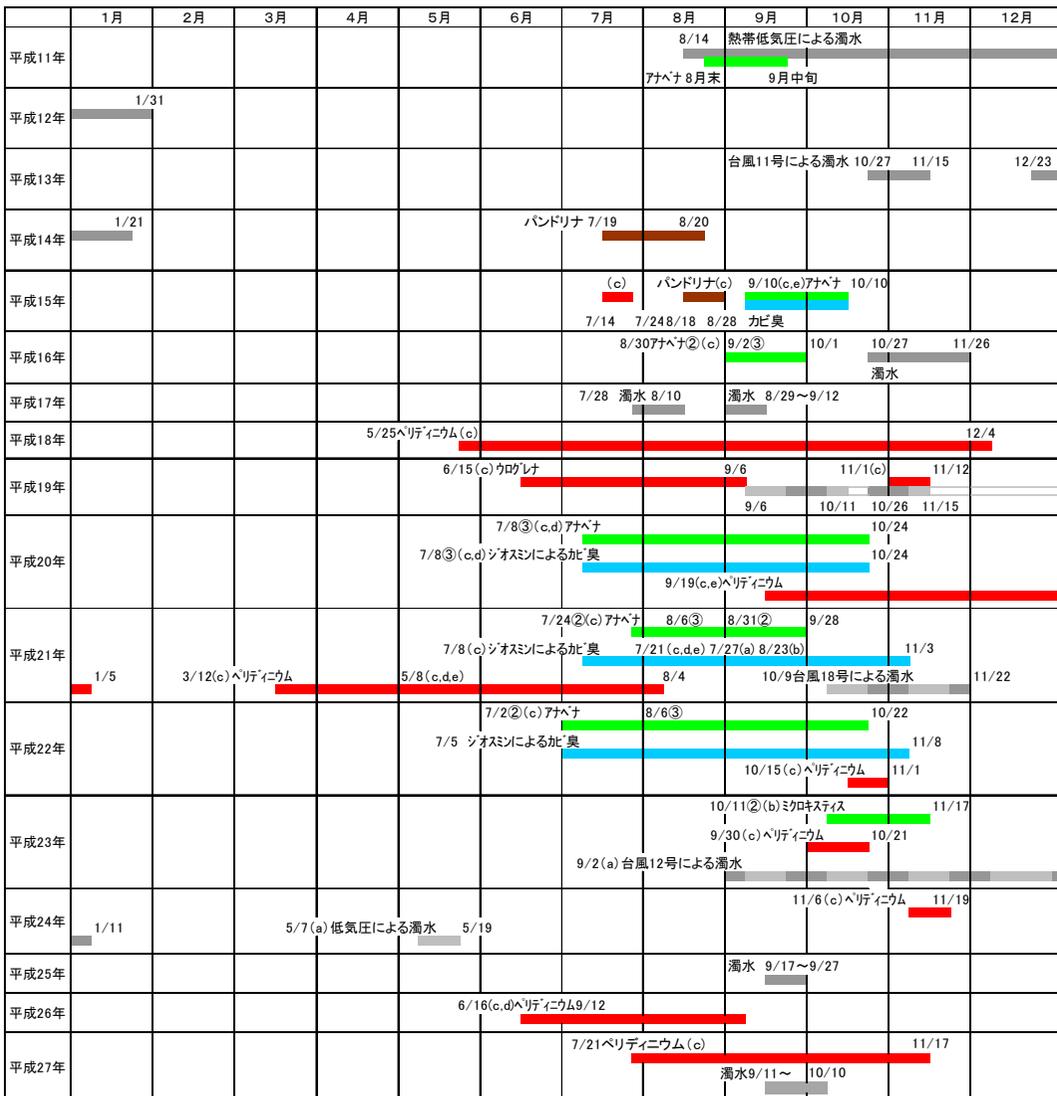
洪水年
平水年

水理・水文指標による成層型の分類

水温成層の形態	年回転率	7月回転率
成層型	10以下	1以下
成層型(成層Ⅱ型)または中間型	10～20(例外あり)	1～5(例外あり)
混合型	20以上(例外あり)	5以上(例外あり)

水質障害の発生状況

■ 至近7カ年の主な水質異常は、ペリディニウムによる淡水赤潮と、出水にともなう濁水長期化であり、令和3年以降の水質異常は確認されていない。

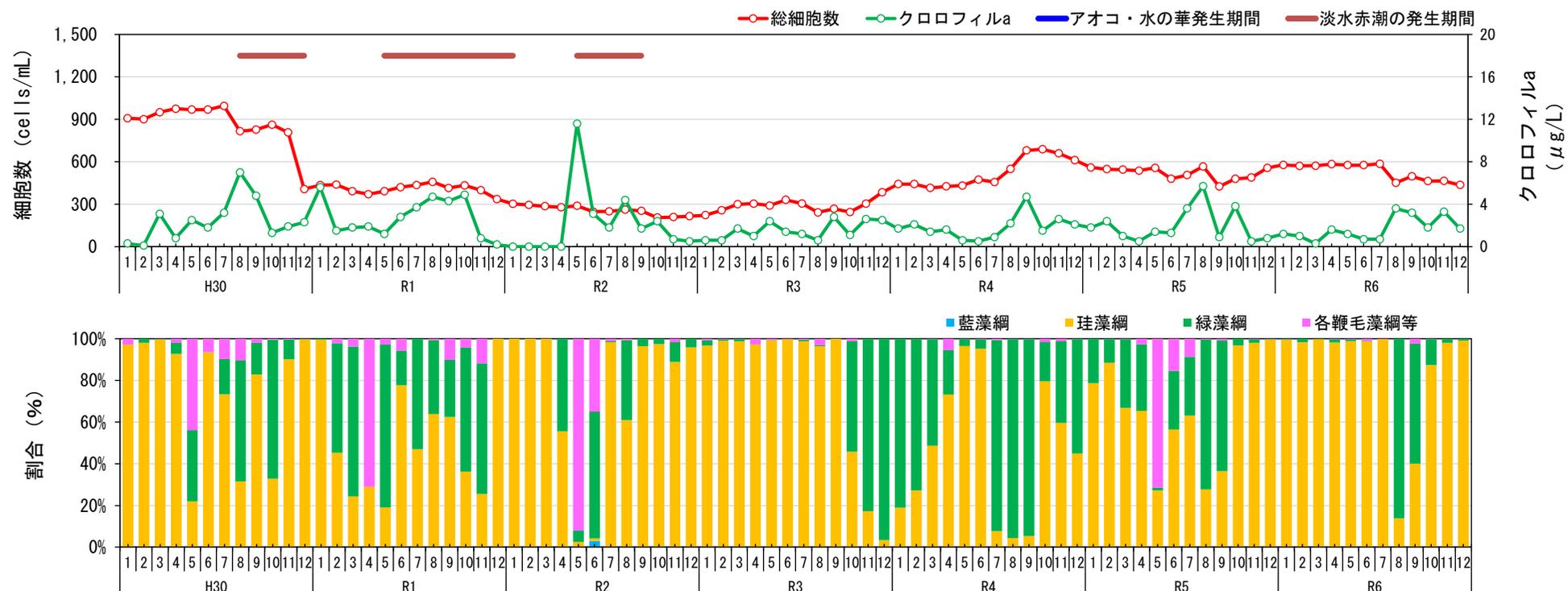


評価対象期間

凡例	()内の「-a.b.c.d.e」は発生場所を示す。	○の数字はアオコの集積レベルを示す。
	a: 貯水池全面 b: ダムサイト付近 c: 流入部付近 d: 湖心部 e: 沿岸部	① レベル1 ネットで引いたり、白いバットに込んで良く見ると確認できる ② レベル2 うすらとすじ状にアオコの発生が認められる ③ レベル3 アオコが水の表面全体に広がり、所々パッチ状になっている ④ レベル4 膜状にアオコが湖面を覆う ⑤ レベル5 厚くマット状にアオコが湖面を覆う ⑥ レベル6 アオコがスクラム状(厚く堆積し表面が白っぽくなったり青の縞模様になることもある)に湖面を覆い、腐敗臭がする
	■ 淡水赤潮 ■ アオコ ■ その他の水の華 ■ 冷濁水 ■ その他	

植物プランクトンの発生状況

- クロロフィルaは夏季から秋季に高くなることが多く、優占種は珪藻綱または緑藻綱である。
- 至近7カ年では、アオコ及び水の華は発生していないが、平成30年、令和元年、及び令和2年に渦鞭毛藻綱のペリディニウム属による淡水赤潮が発生した。



平成30年8月22日の上流端の状況



令和元年5月17日の上流端の状況



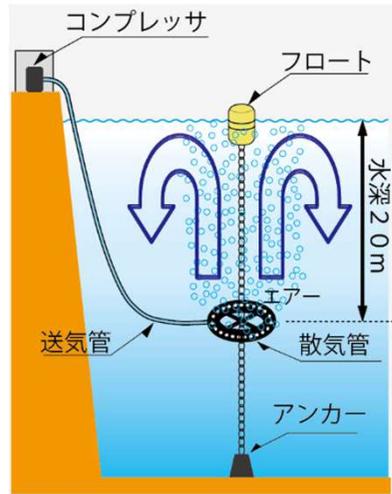
令和2年5月13日の支川合流付近の状況

水質保全対策の概要

- 浦山ダムでは、貯水池内及び下流河川の水質保全のため、選択取水設備、清水バイパス、浅層曝気循環設備を運用している。

浅層曝気循環設備

夏季に藍藻類の異常増殖により、水道水の異臭味障害が発生していたため、藍藻類の発生抑制対策として浅層曝気循環設備を設置している。

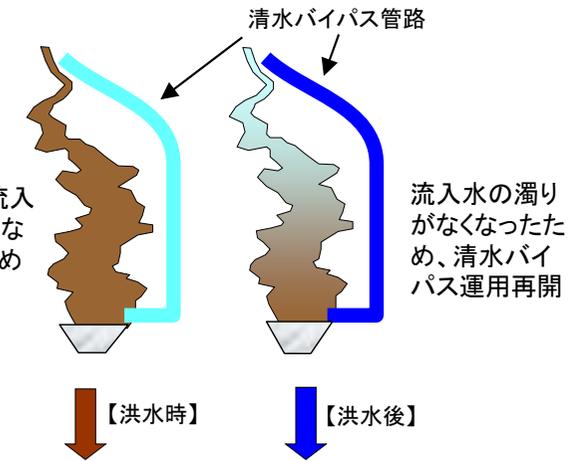
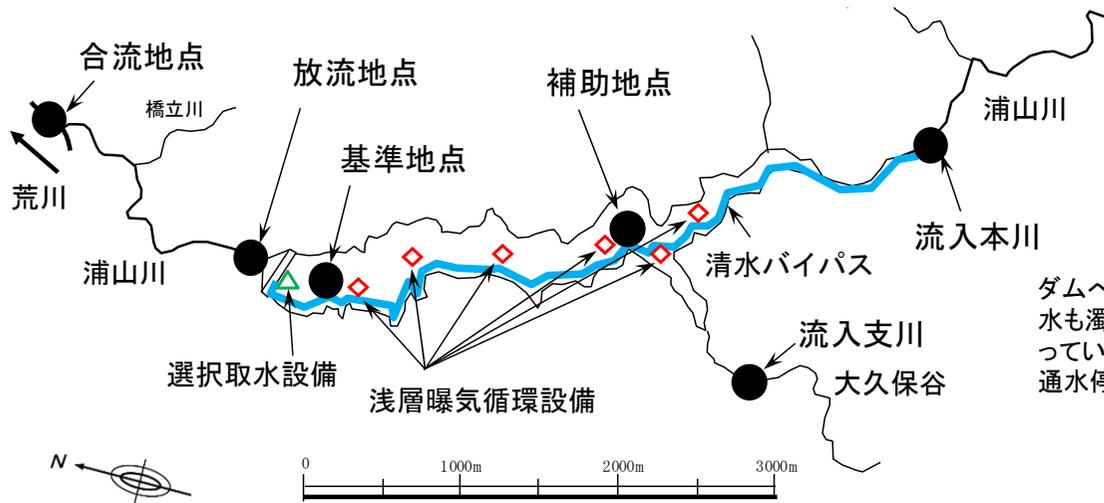


浅層曝気設備模式図



清水バイパス

濁水長期化に対する対策として、貯水池の濁度が高い時に上流側で取り込んだ清水を選択取水設備に連結した管路を經由させて下流側に放流することを目的に設置している。



水質保全施設	H11	H12	H13	H14	H15	H16	H17	H18	H19	H20	H21	H22	H23	H24	H25	H26	H27	H28	H29	H30	R1	R2	R3	R4	R5	R6
選択取水設備	■																									
清水バイパス									■		■		■			■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
浅層曝気循環設備													■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■

※清水バイパスは補修工事や土砂堆積等による使用できない期間がある。
 ※浅層曝気循環設備は冬季は稼働していない。

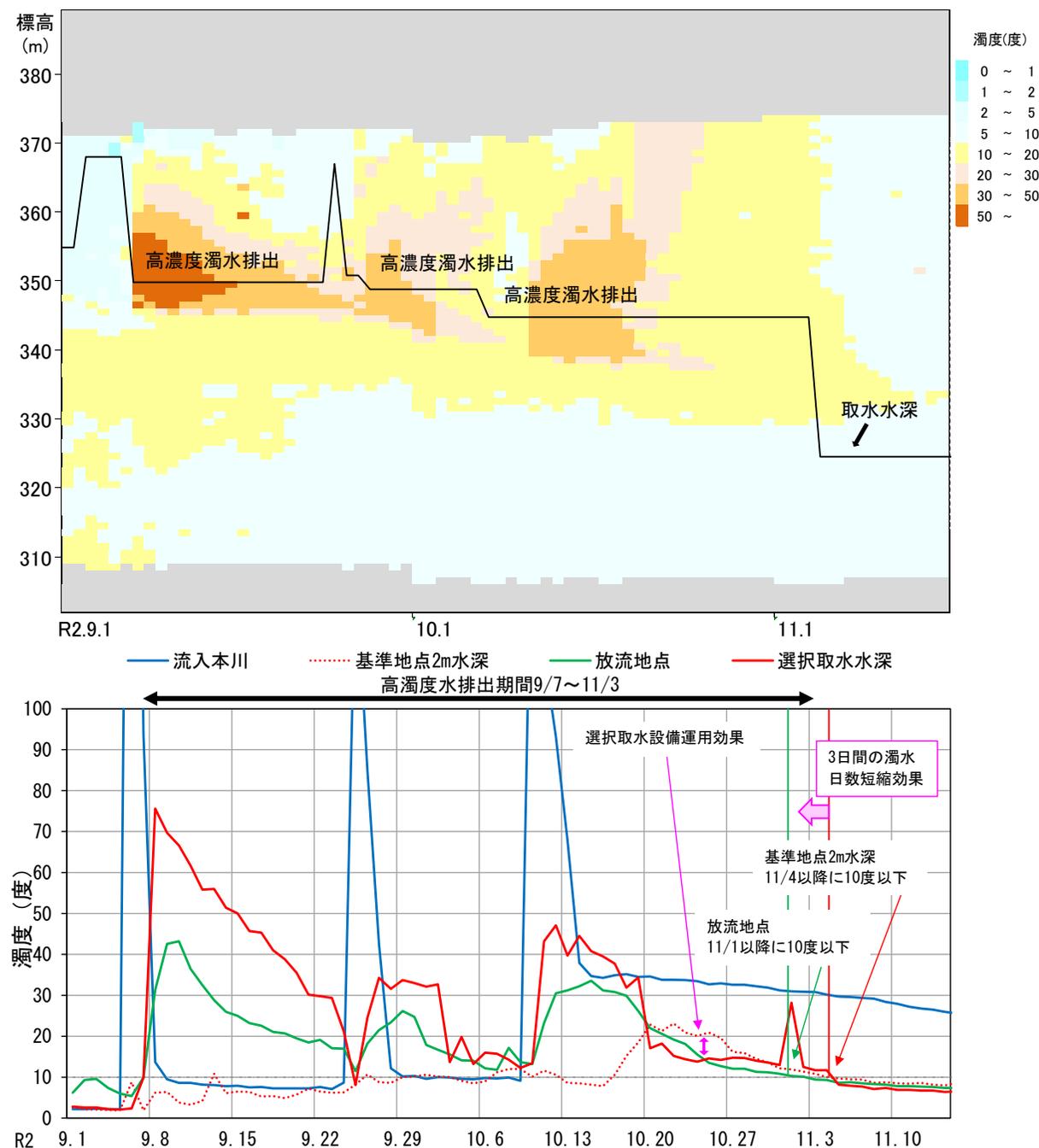
水質保全対策の効果 濁水長期化の短縮

令和2年9月出水時の貯水池内濁度

- 貯水池内濁度(基準地点2m水深)は、9月6日より上昇し始め、10月22日には23度に達した。
- その後、徐々に低下して、11月4日に10度以下となった。

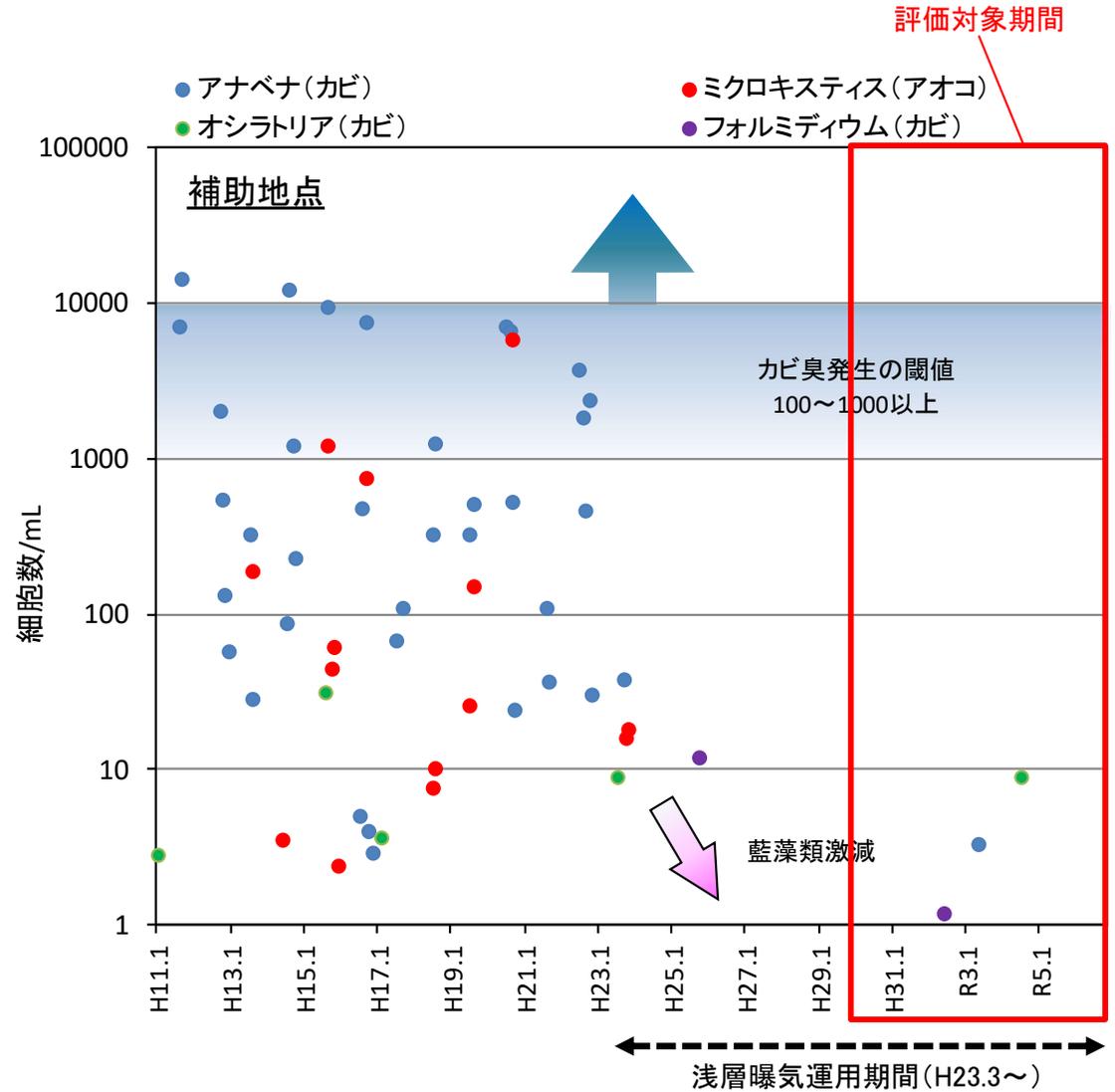
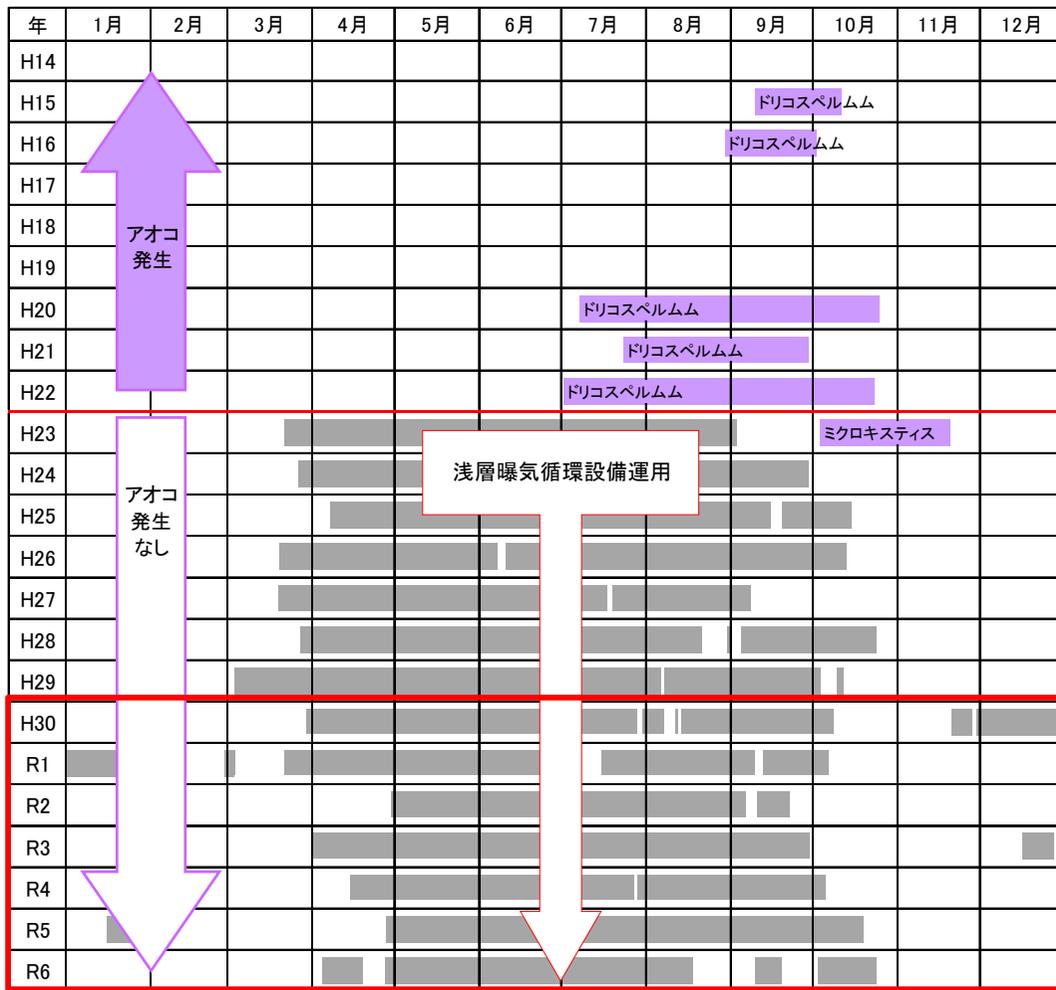
選択取水設備の運用

- 令和2年9月出水後の9月7日から11月3日にかけて、選択取水設備を運用することにより、濁水の早期排出操作を行ったため、放流地点の濁度は9月10日の43度をピークに、10月31日まで10度を超える濁度が継続した。
- 11月3日以降は、濁度の低い層から取水するように変更した。
- 基準地点(2m水深)から取水したと仮定した場合に比べて、3日間の濁水日数短縮効果が認められた。



水質保全対策の効果 浅層曝気循環設備

- 浅層曝気循環設備運用後の平成23年以降、夏季のアオコやカビ臭の発生が確認されなくなった。
- 至近7カ年では、令和2年から令和4年に、カビ臭発生原因種のドリコスペルムム(アナベナ)、オシラトリア、プセウドアナベナ(フォルミディウム)が確認されたが、アオコやカビ臭などによる水質異常の発生は、近年確認されていない。

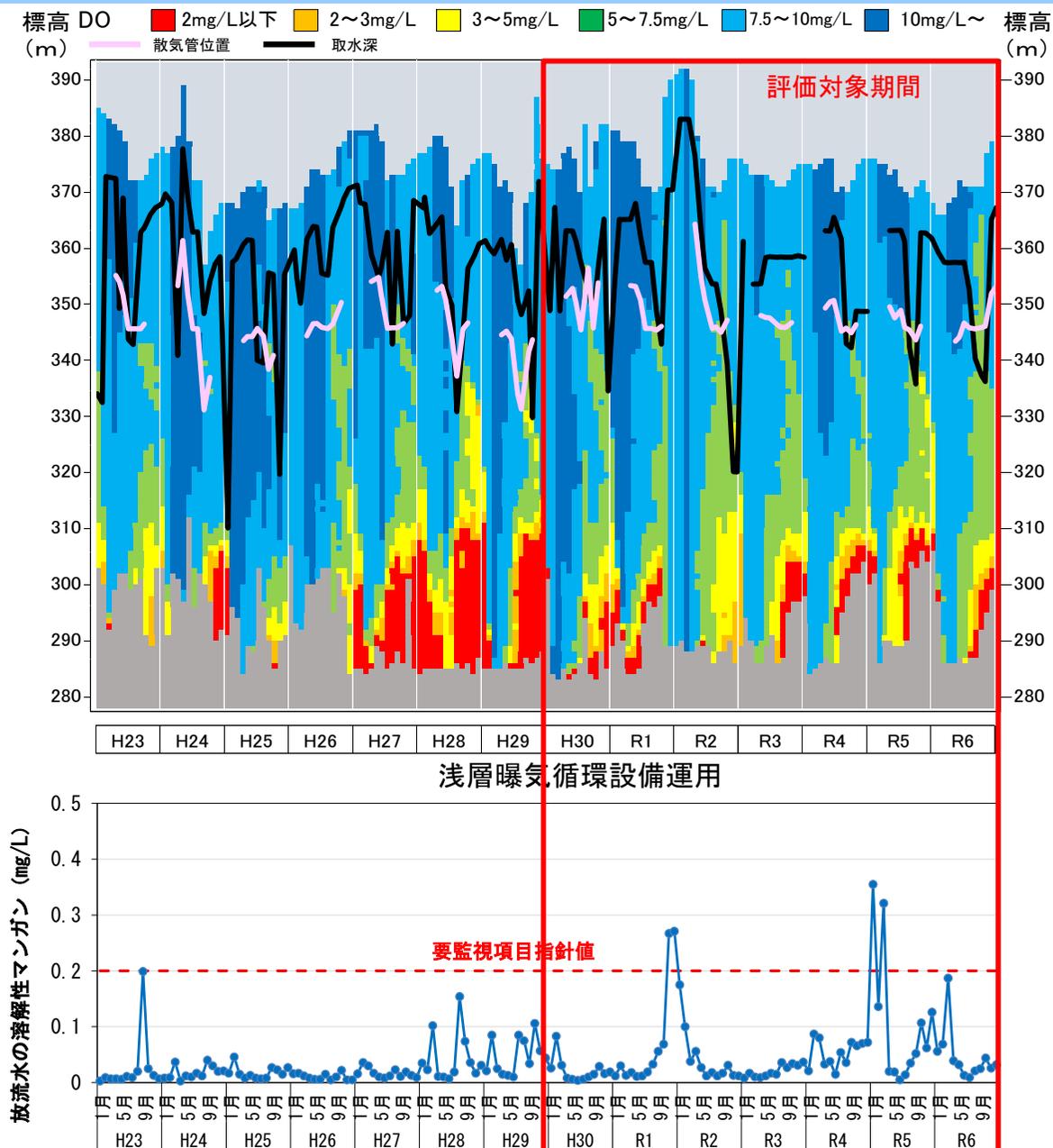


評価対象期間

評価対象期間

水質保全対策の効果 選択取水設備

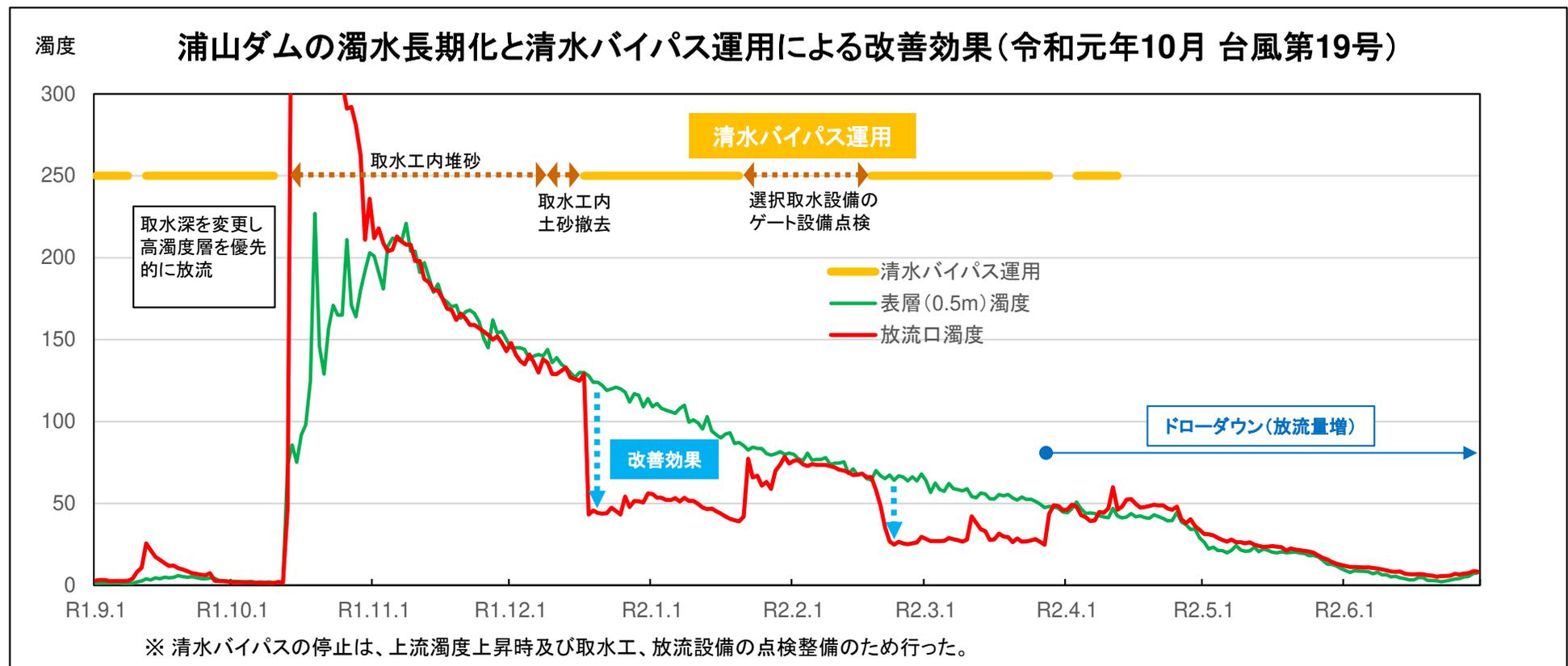
- 平成27年以降、夏季から冬季の底層DOの低下とともに放流水の溶解性マンガン濃度は上昇している。
- 至近7カ年では、放流水の溶解性マンガン濃度は0.01~0.4mg/Lの範囲であり、令和元年、令和5年を除いて要監視項目指針値0.2mg/L以下となっている。
- 浦山ダムでは、選択取水設備の運用により表層取水を基本としているため、下流浄水場等においては、黒水の苦情等の問題は発生していない。



水質汚濁に係る環境基準 要監視項目:「人の健康の保護に関連する物質ではあるが、公共用水域等における検出状況等からみて、直ちに環境基準とはせず、引き続き知見の集積に努めるべきもの」

水質保全対策の効果 清水バイパス

- 浦山ダムでは濁水長期化対策として、平成19年から清水バイパスを運用している。
- 令和元年10月12日発生 of 台風第19号の出水に伴い10月15日から令和2年6月9日までで濁水長期化が発生した。
- 上流河川の濁度低減および取水工内の土砂撤去により清水バイパスが運用できる状態となっから約0.5m³/sの通水運用を行い、一定の改善効果が得られた。



- 至近7カ年の主な水質異常は、ペリディニウムによる淡水赤潮と、出水にともなう濁水長期化であり、令和3年以降の水質異常は確認されていない。 水質18
- 選択取水設備の運用により、令和2年9月出水に対して3日間の濁水日数短縮効果が認められた。 水質21
- 平成27年以降、夏季から冬季にかけて底層のDO低下が見られる。 水質23
- 至近7カ年では、放流水の溶解性マンガン濃度は0.01～0.4mg/Lの範囲であり、令和元年、令和5年を除いて要監視項目指針値0.2mg/L以下となっている。 水質23
- 令和元年10月出水による濁水長期化時に清水バイパスを運用した結果、一定の改善効果が得られた。 水質24

【今後の方針】

- 各水質調査項目について、引き続き監視を行う。
- 各施設を適切に運用し、水質異常の軽減に努める。

調査の実施状況

- 浦山ダムにおける「河川水辺の国勢調査」は、平成14年度から開始している。
- 至近7カ年では、魚類、底生動物、動植物プランクトン、両生類・爬虫類・哺乳類、陸上昆虫類等及びダム湖環境基図の調査を実施している。また、環境保全対策に関する調査として猛禽類調査を実施している。

調査実施状況	モニタリング調査						河川水辺の国勢調査																						
	環境保全対策に関する調査																												
調査項目	H8	H9	H10	H11	H12	H13	H14	H15	H16	H17	H18	H19	H20	H21	H22	H23	H24	H25	H26	H27	H28	H29	H30	R1	R2	R3	R4	R5	R6
魚類	●	●	●	●	●	●						■									■				■				
底生動物	●	●	●	●	●	●				■			▲	■▲	▲	▲	▲		■						■				■
動植物 プランクトン	●	●	●	●	●	●				■				■				△	■△	△	△	△	■△	△	△	△	■△	■△	△
植物	植物相	●	●	●	●	●	■								■								■						
	植生	●					■				■					■						■				■			
鳥類	●	●	●	●	●	●			■			■										■							
両生類	●	●	●		●				■								■										■		
爬虫類	●	●	●		●				■								■										■		
哺乳類	●	●	●		●				■								■										■		
陸上昆虫類	●	●	●	●	●	●		■										■										■	
猛禽類		▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲

評価対象期間

注) H18以降の植生調査はダム湖環境基図作成調査として実施

●: モニタリング調査、■: 河川水辺の国勢調査、▲: 保全対策調査、△: 水質調査

<調査範囲>

・水域調査(ダム湖内、流入河川、下流河川)

1.魚類、2.底生動物、3.動植物プランクトン(ダム湖内)、5.鳥類、6.両生類・爬虫類・哺乳類

・陸域調査(ダム湖周辺:ダムの平常時最高水位から500m程度の範囲)

4.植物、5.鳥類、6.両生類・爬虫類・哺乳類、7.陸上昆虫类等

- ダム湖周辺で最も大きな面積を占めるのは、スギ・ヒノキ植林、次いでケヤキ群落である。
- 最新の河川水辺の国勢調査において、動物では主に以下の種が確認されている。

鳥類	トビ、ノスリ、カワセミ、アオゲラ、カワガラス、ミソサザイ、クロツグミ、オオルリ、シジュウカラ、メジロ、ホオジロ、カワラヒワ、マヒワ、イカル、カケス等
両生類	ヒガシヒダサンショウウオ、アズマヒキガエル、ヤマアカガエル、モリアオガエル、カジカガエル等
爬虫類	ヒガシニホントカゲ、ニホンカナヘビ、シマヘビ、アオダイショウ、シロマダラ、ヒバカリ、ヤマカガシ等
哺乳類	キクガシラコウモリ、モモジロコウモリ、ニホンリス、ムササビ、アカネズミ、ツキノワグマ、タヌキ、ニホンジカ、カモシカ等
陸上昆虫類等	タニマノドヨウグモ、キバネハサミムシ、ササキリモドキ、ヤマトフキバツタ、エゾスズ、ヒナガメ、スカシシリアゲモドキ、ムラサキトビケラ、クモガタヒョモン、ミスジチョウ、オナガミズスマシ、等



ヤマトフキバツタ



ヤマアカガエル



スギ・ヒノキ植林



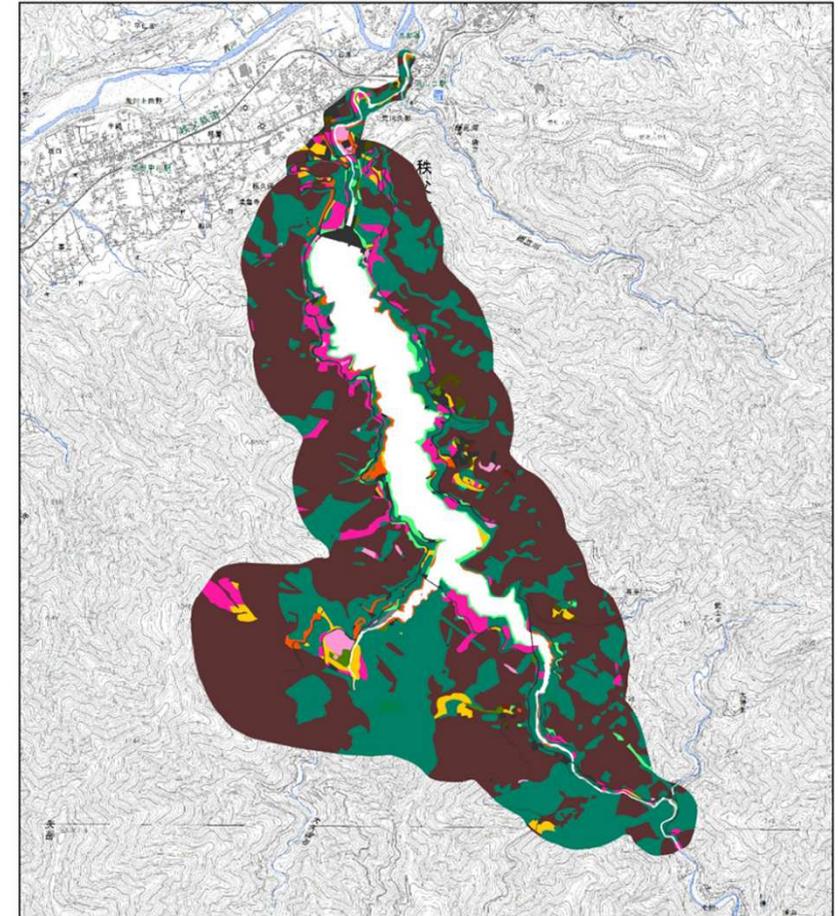
ジムグリ



テングコウモリ



ケヤキ群落



植生凡例

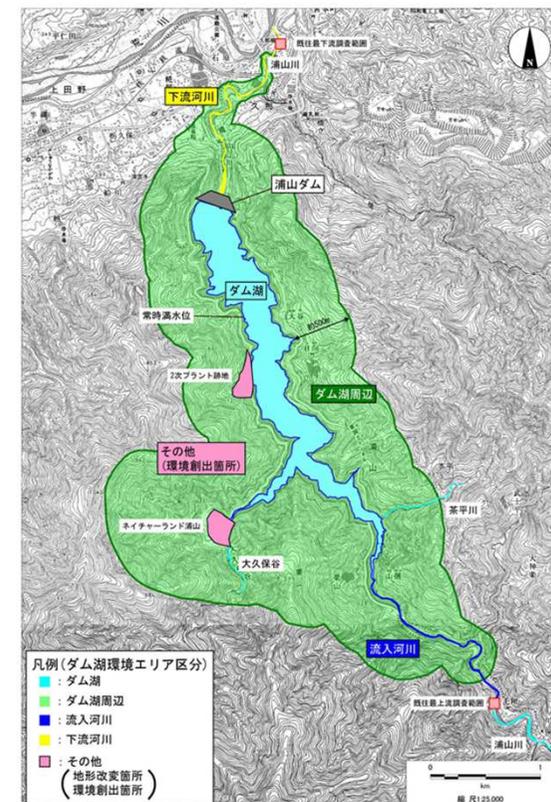
一年生草本群落	植林地(スギ・ヒノキ)
多年生広葉草本群落	植林地(その他)
単子葉草本群落(ツルヨシ群落)	果樹園
単子葉草本群落(その他の単子葉草本群落)	畑
その他の低木林	グラウンドなど
落葉広葉樹林	人工構造物
常緑針葉樹林	自然裸地
植林地(竹林)	開放水面



ダム湖及びその周辺の環境・水域

- 最新の河川水辺の国勢調査において、水域における生物(鳥類は水辺を利用する鳥)は、主に以下の種が確認されている。

流入河川	魚類	ウグイ、ニッコウイワナ、サクラマス(ヤマメ)
	底生動物	フタスジモンカゲロウ、シロハラコカゲロウ、エルモンヒラタカゲロウ、タイリククロスジヘビトンボ、ガロアシマトビケラ等
	鳥類	イワツバメ、キセキレイ、カワガラス、ヤマガラ、カケス等
ダム湖	魚類	コイ(型不明)、ゲンゴロウブナ、ギンブナ、ウグイ、ワカサギ、ニッコウイワナ、オオクチバス、サクラマス(ヤマメ)等
	底生動物	サカマキガイ、フタスジモンカゲロウ、スジエビ等
	鳥類	カイツブリ、カワウ、アオサギ、オシドリ、マガモ、コガモ、カルガモ、ホオジロ等
下流河川	魚類	アブラハヤ、ウグイ、ヒガシシマドジョウ、サクラマス(ヤマメ)、カジカ等
	底生動物	ナミウズムシ、ユリミズ、サカマキガイ、フタスジモンカゲロウ、シロハラコカゲロウ、コバントビケラ等
	鳥類	カルガモ、セグロセキレイ、ヒヨドリ、ウグイス、ホオジロ等



ニッコウイワナ



カジカ



ナミウズムシ



タイリククロスジヘビトンボ

ダム湖及びその周辺の 重要種・外来種の確認状況

■ 最新の河川水辺の国勢調査で確認された重要種・外来種は以下の通りである。

	重要種	外来種
魚類 (R2)	ギバチ、ニッコウイワナ、サクラマス(ヤマメ)、サクラマス、カジカ 計4種 (サクラマスは1種として計数)	ニジマス、ブルーギル、オオクチバス、コクチバス
底生動物 (R6)	ナミウスムシ、 コシダカヒメモノアラガイ 、 モノアラガイ 、サワガニ、ムカシトンボ、クロサナエ、ヒメクロサナエ、ヒメサナエ、ヤマトカワゲラ、オオアメンボ、ナベブタムシ、タイリククロスジヘビトンボ、ムナグロナガレトビケラ、コバントビケラ、ホソバトビケラ、ムラサキトビケラ、 コオナガミズスマシ 、マサダチビヒラタドROMシ、ゲンジボタル、 ミスバチ 計21種	コモチカワツボ コシダカヒメモノアラガイ サカマキガイ 計3種
植物 (H30)	アカハナワラビ 、ナツノハナワラビ、 アオホラゴケ 、ウスヒメワラビ、クモノスシダ、 サトメシダ 、サクライカグマ、 ザゼンソウ 、 エンレイソウ 、ヤマカシユウ、サルマメ、ギンラン、 キンラン 、シュンラン、クモキリソウ、タヌキラン、コウモリカズラ、ミツバベンケイソウ、サイカチ、エドヒガン、 シロヤマブキ 、オオツルウメモドキ、 マルミノヤマゴボウ 、 クリンソウ 、 ウメガサソウ 、 ベニドウダン 、ギンリョウソウモドキ、コイケマ、 ヒラギソウ 、 ハッカ 、ハグロソウ、カワラヨモギ、 アワコガネギク 計34種、	シンテップウユリ、 ヒメヒオウギスイセン 、コヌカグラ、 メリケンカルカヤ 、カモガヤ、シナダレスズメガヤ、 ネズミホソムギ 、ネズミムギ、モウソウチク、オニウシノケグサ、ナギナタガヤ、イタチハギ、アレチヌスビトハギ、ハリエンジュ、 アレチウリ 、ニワウルシ、オランダガラシ、エゾノギシギシ、アメリカネナシカズラ、 マルバルコウ 、 オオカワヂシャ 、フサフジウツギ、オオブタクサ、アメリカセンダングサ、コシロノセンダングサ、コセンダングサ、アワコガネギク、ヒメジョオン、セイタカアワダチソウ、セイヨウタンポポ、オオオナモミ 計31種
鳥類 (H29)	アオサギ、 オシドリ 、 ハチクマ 、トビ、 オオタカ 、ツミ、ノスリ、 サシバ 、 クマタカ 、 ハヤブサ 、オオバン、イソシギ、フクロウ、カワセミ、アオゲラ、ルリビタキ、イソヒヨドリ、トラツグミ、クロツグミ、ヤブサメ、ウグイス、センダイムシクイ、キビタキ、オオルリ、エナガ、ヒガラ、ヤマガラ、ホオジロ、アオジ、ベニマシコ 計30種	ガビチョウ 、 ソウシチョウ 計2種
両生類・爬虫類・哺乳類 (R4)	ヒガシヒダサンショウウオ 、アズマヒキガエル、ナガレタゴガエル、ヤマアカガエル、モリアオガエル、カジカガエル、ヒガシニホトカゲ、ニホンカナヘビ、タカチホヘビ、シマヘビ、アオダイショウ、ジムグリ、シロマダラ、ヒバカリ、ヤマカガシ、ニホンマムシ、カワネズミ、コキクガシラコウモリ、キクガシラコウモリ、ニホンウサギコウモリ、コテングコウモリ、 Denggokoumori 、 ニホンモモンガ 、ムササビ、ツキノワグマ、カモシカ 計26種	ライイグマ 、ハクビシン 計2種
陸上昆虫類等 (R5)	タニマノドヨウグモ、 アカイトリノフンダマシ 、トゲグモ、 ルリボシヤンマ 、 コシボソヤンマ 、ヒメクロサナエ、 ヒメアカネ 、キバネハサミムシ、ササキリモドキ、 ヒメツユムシ 、エソズヒナバタ、 ナキイナゴ 、ヤマトフキバタ、ヤスマツトビ、ナナフシ、アヤヘリハネナガウンカ、 アカヘリサシガメ 、ヒメナガメ、ズグロシラホシカメムシ、オオアメンボ、タイリククロスジヘビトンボ、 プライヤーヒロバカゲロウ 、 ミスジシリアゲ 、 オオナガレトビケラ 、 ホソバトビケラ 、ムラサキトビケラ、 オオチャバネセセリ 、 ゴイシジミ 、クモガタヒヨモン、 ミスジチョウ 、 ヒメハチモドキハナアブ 、 オナガミズスマシ 、 キオビホオナガスズメバチ 、 コイケアワフキバチ 、 クロマルハナバチ 計35種	アオマツムシ 、ヨコヅナサシガメ、 アカボシゴマダラ 、ラミーカミキリ、 バタクサハムシ 、 セイヨウミツバチ 計6種

赤字は法指定又は環境省レッドリスト該当種 青字は特定外来生物 は最新年度調査における新規確認種

※1 重要種は①文化財保護法・条例等で指定された「特別天然記念物」、「天然記念物」、②種の保存法で指定された「国内希少野生動植物種」、③環境省RL(2020)の掲載種、④埼玉県RDB

(動物2018、植物2025)の掲載種を対象とした。

※2 外来種は①外来種法で指定された「特定外来生物」、②「我が国の生態系等に被害を及ぼすおそれのある外来種リスト」(環境省及び農林水産省)の掲載種を対象とした。

ダム湖中層で生息する魚種の経年変化

- 在来種はギンブナ、ウグイ、ニッコウイワナ、国内移入種はワカサギなどが確認されている。
- 最新の令和2年度調査結果と既往調査を比べると、在来種の種数は平成27年度に1種増えた後維持しており、在来種の個体数は概ね変化が無く維持状態にあった。
- ダム湖で懸念される遊泳魚外来種のコクチバス、ブルーギル、オオクチバスの個体数は減少傾向である。
- 以上より、ダム湖中層で生息する魚類の生息状況に大きな変化はみられない。

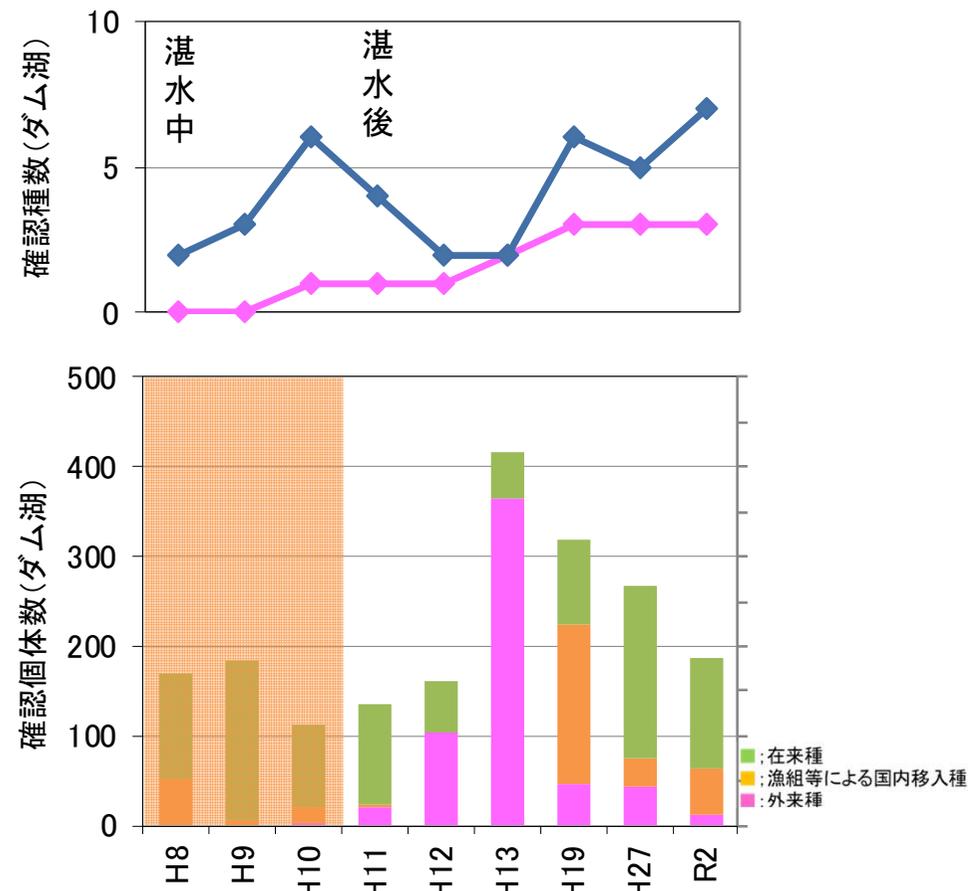
ダム湖中層で生息する魚種の経年変化

魚類の分類		在来・外来区分			H8 (湛水 予定地)	H9	H10	H11	H12	H13	H19	H27	R2
科名あるいは属名	種名	在来種 遊泳魚	在来種 底生魚	外来種									
コイ科	コイ属	コイ	○			2		1			1		5
	フナ属	ゲンゴロウブナ	○				フナ属7	1					9
		ギンブナ	○				フナ属7	41	2	6	2	24	4
	ハス属	オイカワ	○				1						
	カワムツ属	カワムツ	○										
	ヒメハヤ属	アブラハヤ	○										
	ウグイ属	ウグイ	○			119	178	84	73	55	46	92	168
モツゴ属	モツゴ	○											
キュウリウオ科	ワカサギ	○									164	8	37
アユ科	アユ	○									9		
サケ科	イワナ属	ニッコウイワナ	○				フナ属1					1	1
	サケ属	ニジマス		○								2	
		サクラマス(ヤマメ)	○			51	3	8			5	22	1
サンフィッシュ科		ブルーギル		○					5	35	18	1	
		オオクチバス		○			4	20	103	359	8	22	1
		コクチバス		○								4	9
合計	確認種数(種)	16	-		3	6	8	5	4	6	12	11	13
	確認個体数(個体)	-	-		170	183	97	136	160	416	318	267	187
	調査回数	-	-		3	1	1	1	1	1	3	3	2
	調査地区数	-	-		1	3	3	3	3	3	2	2	2

■ : 湛水前より河川に生息していた在来種

■ : 漁組等により放流された種、またそれに混入した国内移入種

■ : 外来種



注1) 平成27年度と令和2年度の調査では調査回数が異なっている(3回→2回)。

ダム湖中層で生息する魚種の経年変化(上:種数、下:個体数)

ダム湖で生息し一生の一時を流入河川で生息する魚種の経年変化

- 在来種はウグイ、ニッコウイワナ、国内移入種はサクラマス(ヤマメ)が確認されている。
- 最新の令和2年度調査結果と既往調査を比べると、確認種数は概ね変化がないものの、確認個体数では主に国内移入種のサクラマス(ヤマメ)に減少傾向がみられた。
- 流入河川ではこれまでに外来種は確認されていない。

ダム湖で生息し一生の一時を流入河川で生息する魚種の経年変化

魚類の分類		在来・外来区分			H8	H9	H10	H11	H12	H13	H19	H27	R2
科名あるいは属名	種名	在来種 遊泳魚	在来種 底生魚	外来種	流入 河川 ※								
コイ科	ウグイ属	ウグイ	○		49	3	18	23	4	7	4		
サケ科	イワナ属	ニッコウイワナ	○		イワナ属1	イワナ属1					6	3	3
	サケ属	サクラマス(ヤマメ)	○		167	50	37	28	19	45	33	195	10
合計	確認種数(種)	3	-		2	2	2	1	1	1	2	2	2
	確認個体数(個体)	-	-		217	54	55	51	23	52	43	198	13
	調査回数	-	-		3	1	1	1	1	1	3	3	2
	調査地区数	-	-		3	3	3	3	3	3	1	1	1

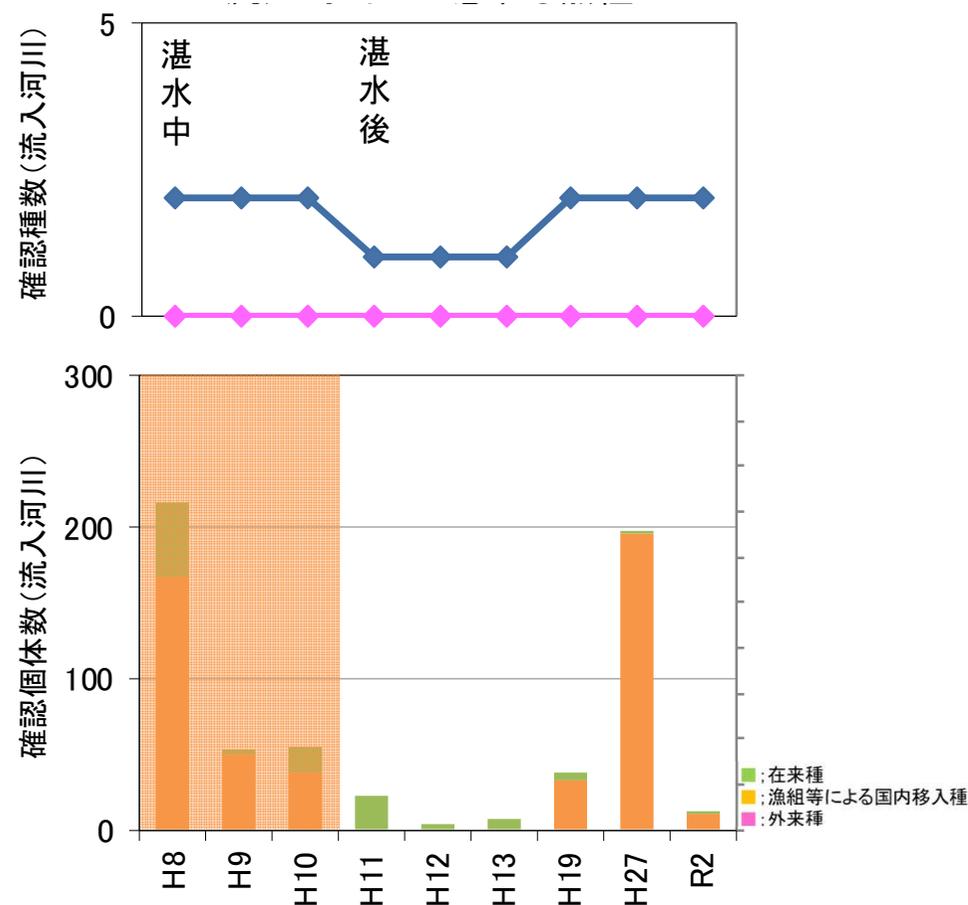
■ : 湛水前より河川に生息していた在来種

■ : 漁組等により放流された種、またそれに混入した国内移入種

■ : 外来種

注1)ダム湖で生息し一生の一時を流入河川で生息する魚種のうち、ダム湖かつ流入河川の両方での確認を対象とし、そのうち流入河川での個体数を示した。

注2)平成27年度と令和2年度の調査では調査回数が異なっている(3回→2回)。



ダム湖で生息する魚種の経年変化(上:種数、下:個体数)

下流河川における河床が浮き石等で構成されている河川を利用する魚種の経年変化

- 在来種はウグイ、ヒガシシマドジョウなどが確認されている。
- 最新の令和2年度調査結果と既往調査を比べると、確認種数は減少傾向がみられるものの、確認個体数には大きな変化がみられない。
- 下流河川にて懸念される外来種のおオクチバスは令和2年度調査では確認されず、ニジマスは2個体の確認にとどまった。

下流河川における河床が浮き石等で構成されている河川を利用する魚種の経年変化

魚類の分類			在来・外来区分			H8	H9	H10	H11	H12	H13	H19	H27	R2
科名あるいは属名		種名	在来種 遊泳魚	在来種 底生魚	外来種	下流 河川 ※								
コイ科	ハス属	オイカワ	○			12	3	5	2	3	7	2	1	
	カワムツ属	カワムツ	○										1	
	ヒメハヤ属	アブラハヤ	○			2	23	66	1	1	30	3	16	5
	ウグイ属	ウグイ	○			237	95	62	20	87	54	230	161	186
	モツゴ属	モツゴ	○				3				3			
	カマツカ属	スナゴカマツカ		○		3		1						
ドジョウ科	シマドジョウ属	ヒガシシマドジョウ		○		5	4	3	1	1	2	8	10	9
ギギ科		ギバチ		○								6	1	2
アユ科		アユ	○			1	4	4	1	4		1		
サケ科	イワナ属	ニッコウイワナ	○			3	イワナ属1			イワナ属1		3	3	
	サケ属	ニジマス	○		○								30	2
		サクラマス(ヤマメ)	○				28	21	33	46	16	49	120	31
カジカ科		カジカ		○		15	4	5	9	21	18	81	59	84
サンフィッシュ科		オオクチバス	○		○					21	2		2	
合計	確認種数(種)	15	-			9	9	8	7	9	8	9	11	7
	確認個体数(個体)	-	-			306	158	179	80	155	165	454	315	289
	調査回数	-	-			3	1	1	1	1	1	3	3	2
	調査地区数	-	-			2	2	2	2	2	2	2	2	2

■ : 湛水前より河川に生息していた在来種

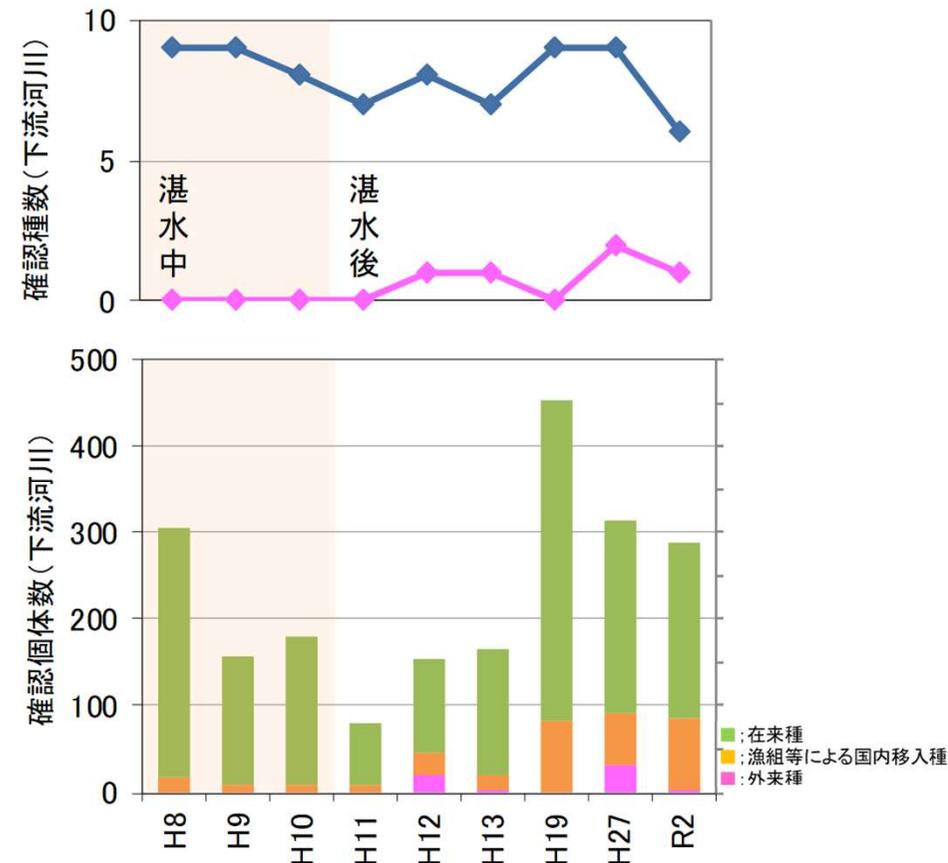
■ : 漁組等により放流された種、またそれに混入した国内移入種

■ : 外来種

注1) サクラマス(ヤマメ)の放流は下流河川で実施していないため、在来種として扱った。

注2) カジカは下流河川で放流しているため、漁組等による国内移入種として扱った。

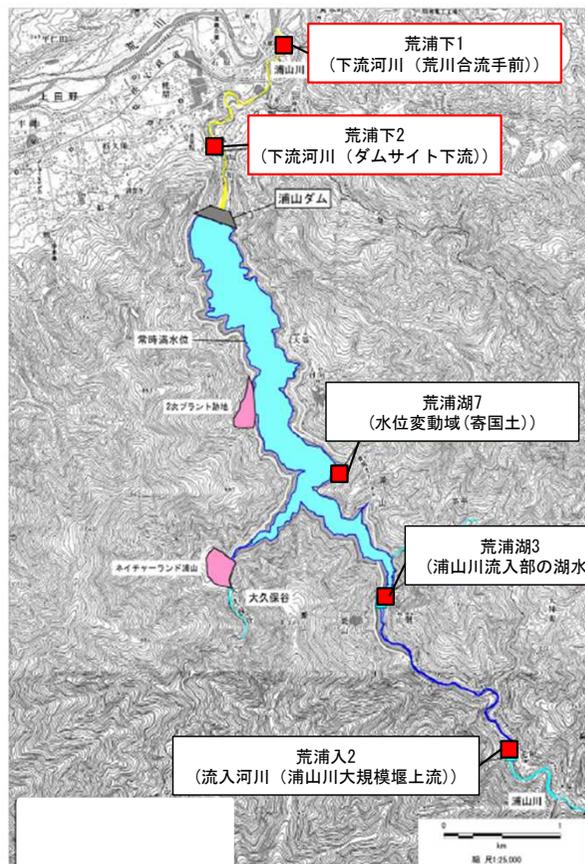
注3) 平成27年度と令和2年度の調査では調査回数が異なっている(3回→2回)。



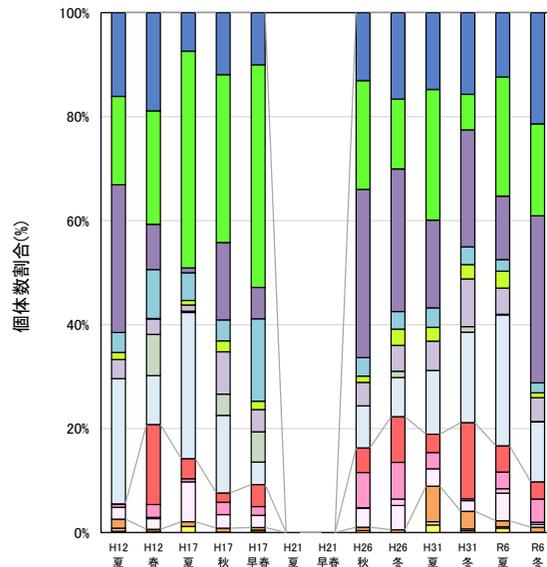
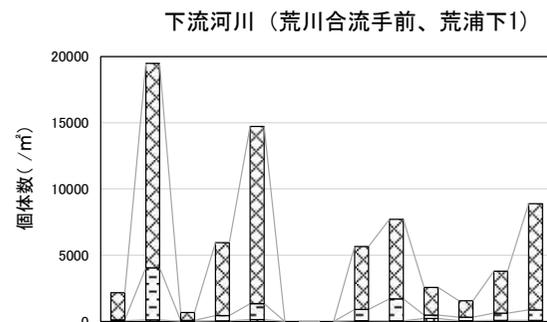
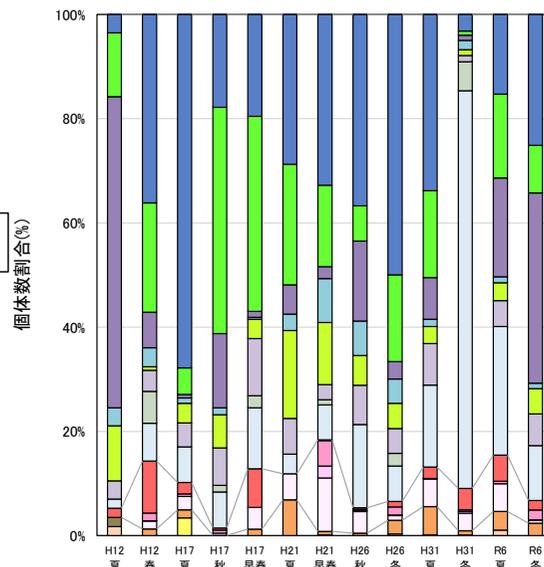
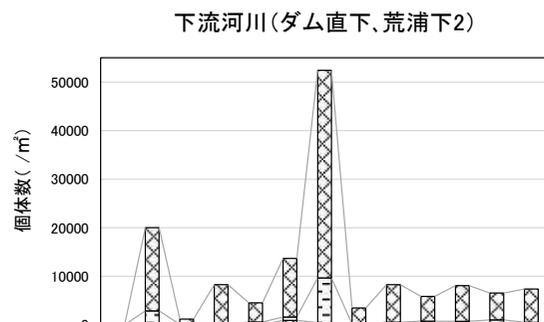
下流河川で生息する魚種の経年変化(上:種数、下:個体数)

下流河川における優占種群の経年変化

- 下流河川(荒川合流手前)で確認された個体数は、平成31年度までは減少傾向であった。しかし令和6年度では平成31年度調査より個体数が増加する結果となった。
- 夏季優占種群は、コカゲロウ科、シマトビケラ科であった。
冬季優占種群は、シマトビケラ科、マダラカゲロウ科であった。
- 個体数割合は年変動があるものの、ハエ目以外の節足動物が8割ほど、ハエ目が2割ほどで推移している。



分析対象とした調査地区



凡例

- 節足動物門(ハエ目以外)
- マダラカゲロウ科
- コカゲロウ科
- シマトビケラ科
- ヒラタカゲロウ科
- ヒゲナガカワトビケラ科
- ナガシトビケラ科
- トビロカゲロウ科
- その他1

節足動物門(ハエ目のみ)

- エリュスリカ亜科
- ヒメガガンボ科
- ヤマユスリカ亜科
- その他2

環形・軟体動物門等

- サンカウアタマウスムシ科
- イトミミズ科
- ミズミミズ科
- その他3

注1) H12の「荒浦下2」、H17の「荒浦下2」において、ダニ目が合わせて595個体確認されたが、底生動物に含まれないものとして除外した。

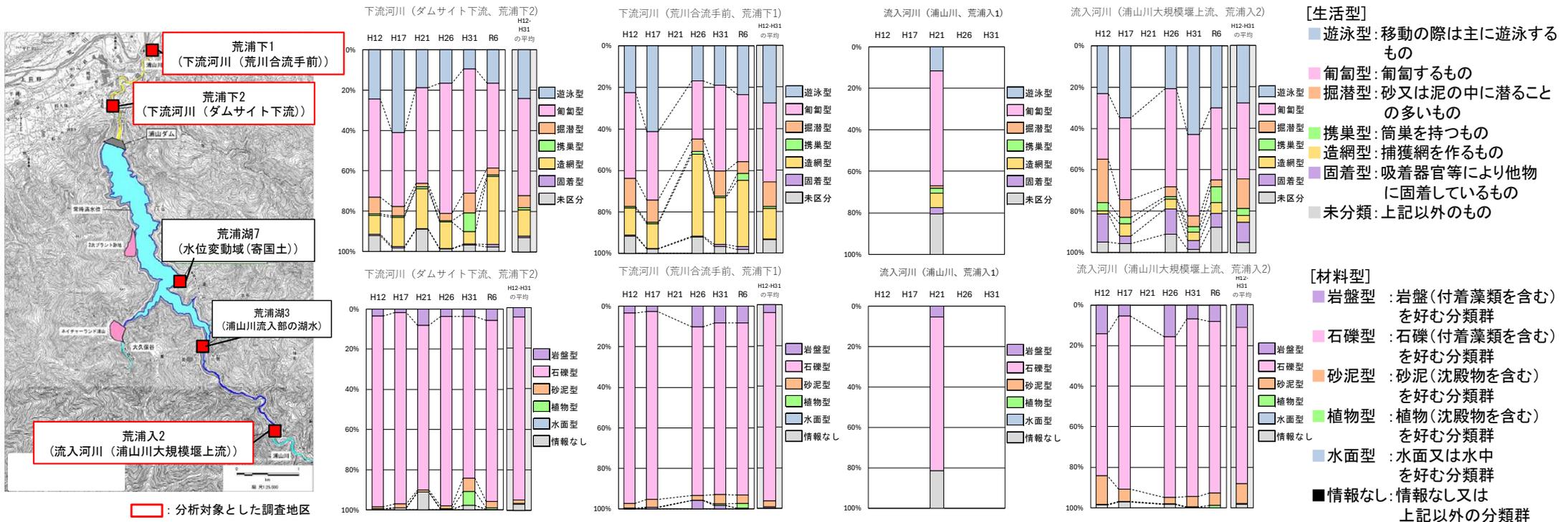
注2) H17の「荒浦下1」、H17の「荒浦下2」において、河床材料の状態とは無関係に、石面にアシマダラフユ属が一時的に付着して優占した(20%以上)ため、当該調査地区の個体数データは異常値として除外した。

注3) 比較対象とした調査結果は、平成11年管理開始以降の5年ごとの生物調査結果を用いた。

優占種群の経年変化(下流河川)

生活型及び材料型分類による経年変化

- 下流河川(荒川合流手前)の生活型分類では、令和6年度と既往平均の比較で[遊泳型+匍匐型]はやや減少している一方で[造網型]は増加している。また材料型分類では、令和6年度と既往平均の比較で[岩盤型]及び[石礫型]ともに大きな変化がみられない。
- 流入河川(浦山川大規模堰上流)の生活型分類では、令和6年度と既往平均の比較で[遊泳型+匍匐型]及び[造網型]ともに大きな変化がない。また材料型分類では、令和6年度と既往平均の比較で[石礫型]及び[砂泥型]に大きな変化がみられない。



生活型(上段)／材料型(下段)分類による個体数割合の経年変化

プランクトン① 植物プランクトン優占種の経年変化(0.2km地点)

■ 植物プランクトンの優占種の経年変化について、珪藻綱が優占する年が多く、令和元年度以降は、一部緑藻綱が優占する年が確認されている。全体を通して珪藻綱及び緑藻綱が優占する結果となった。

■ 確認種数について、経年的に緑藻綱や珪藻綱の確認種数が多く、藍藻綱、各鞭毛藻綱とともに顕著な変化傾向はみられていない。

■ 被食-捕食関係にある珪藻綱と輪形動物(次項参照)については、経年的に各増減が概ね等しく推移しているため、輪形動物が珪藻綱を捕食するという標準的で適切な捕食関係があると考えられる。

※平成28年度の河川水辺の国勢調査マニュアルの改訂により、動植物プランクトン調査の調査頻度や調査方法の変更が行われた。また平成27年度調査より動植物プランクトンの分類体系が大きく変更されたことから、ここでは平成28年度以降調査結果を整理対象とした。

植物プランクトンの優占種の経年変化

年度	優占種1位			優占種2位			優占種3位		
	種名	細胞数 (/L)	%	種名	細胞数 (/L)	%	種名	細胞数 (/L)	%
平成28年度	<i>Aulacoseira granulata</i> f. <i>granulata</i> タラシオンシラ科	10,555,000	62.7%	<i>Asterionella formosa</i> 群 イタケイソウ科	2,705,500	16.1%	<i>Fragilaria crotonensis</i> イタケイソウ科	1,321,000	7.8%
平成29年度	<i>Asterionella formosa</i> 群 イタケイソウ科	6,015,000	57.6%	<i>Aulacoseira granulata</i> f. <i>granulata</i> タラシオンシラ科	2,229,000	21.4%	その他の小型コアマケイソウ垂目珪藻 珪藻綱	642,000	6.2%
平成30年度	<i>Aulacoseira granulata</i> f. <i>granulata</i> タラシオンシラ科	1,933,000	41.0%	<i>Mougeotia</i> 属 ホシミドロ科	810,000	17.2%	<i>Fragilaria crotonensis</i> イタケイソウ科	505,000	10.7%
令和元年度	<i>Mougeotia</i> 属 ホシミドロ科	945,000	27.6%	<i>Aulacoseira granulata</i> f. <i>granulata</i> タラシオンシラ科	592,800	17.3%	<i>Dictyosphaerium</i> 属 ディクティオスファエリウム科	480,000	14.0%
令和2年度	<i>Aulacoseira ambigua</i> f. <i>japonica</i> タラシオンシラ科	845,100	23.3%	<i>Aulacoseira granulata</i> f. <i>granulata</i> タラシオンシラ科	542,900	15.0%	<i>Asterionella formosa</i> 群 イタケイソウ科	530,400	14.6%
令和3年度	<i>Dictyosphaerium</i> 属 ディクティオスファエリウム科	2,252,000	45.2%	その他の小型コアマケイソウ垂目珪藻 珪藻綱	703,900	14.1%	<i>Asterionella formosa</i> 群 イタケイソウ科	698,700	14.0%
令和4年度	<i>Dictyosphaerium</i> 属 ディクティオスファエリウム科	3,056,800	46.8%	<i>Fragilaria crotonensis</i> イタケイソウ科	978,000	15.0%	その他の小型コアマケイソウ垂目珪藻 珪藻綱	739,600	11.3%
令和5年度	その他の小型コアマケイソウ垂目珪藻 珪藻綱	2,292,500	33.4%	<i>Aulacoseira granulata</i> f. <i>granulata</i> タラシオンシラ科	1,925,700	28.0%	<i>Mougeotia</i> 属 ホシミドロ科	1,621,700	23.6%
令和6年度	<i>Aulacoseira granulata</i> f. <i>granulata</i> タラシオンシラ科	1,324,100	29.4%	その他の小型コアマケイソウ垂目珪藻 珪藻綱	698,200	15.5%	<i>Asterionella formosa</i> 群 イタケイソウ科	608,600	13.5%



ダム湖内における植物プランクトンの分類群別種数の経年変化

注1) 定期水質調査地点の表層0.5m層のデータを使用した。

注2) 細胞数は令和6年度は4~12月の合計とし、それ以外は年間の総合計とした。また種数は年間の総種数とした。

プランクトン② 動物プランクトン優占種の経年変化(0.2km地点)

- 動物プランクトンの優占種の経年変化について、輪形動物が優占していることが確認されている。
- 確認種数について、経年的に輪形動物の確認種数が多く、節足動物、原生動物ともに顕著な変化傾向はみられていない。
- 被食-捕食関係にある珪藻綱と輪形動物(前項参照)については、経年的に各増減が概ね等しく推移しているため、輪形動物が珪藻綱を捕食するという標準的で適切な捕食関係があると考えられる。

動物プランクトンの優占種の経年変化

年度	優占種1位			優占種2位			優占種3位		
	種名	個体数 (/m ³)	%	種名	個体数 (/m ³)	%	種名	個体数 (/m ³)	%
平成28年度	<i>Tintinnopsis</i> 属 スナカラムシ科	47,000	28.9%	ハネウデワムシ属 ヒゲワムシ科	43,000	26.4%	スジワムシ ヒゲワムシ科	25,130	15.4%
平成29年度	ハネウデワムシ属 ヒゲワムシ科	192,600	70.5%	ドロワムシ属 ヒゲワムシ科	19,000	7.0%	ハナビワムシ科 単生殖巣綱	16,000	5.9%
平成30年度	ハネウデワムシ属 ヒゲワムシ科	131,000	44.1%	スジワムシ ヒゲワムシ科	77,000	25.9%	ゾウミジンコ ゾウミジンコ科	33,000	11.1%
令和元年度	ハネウデワムシ属 ヒゲワムシ科	608,000	91.3%	スジワムシ ヒゲワムシ科	18,000	2.7%	ゾウミジンコ ゾウミジンコ科	9,700	1.5%
令和2年度	ハネウデワムシ属 ヒゲワムシ科	46,000	48.5%	<i>Tintinnopsis</i> 属 スナカラムシ科	13,300	14.0%	ハナビワムシ科 単生殖巣綱	12,000	12.7%
令和3年度	ハネウデワムシ属 ヒゲワムシ科	260,370	89.5%	ネズミワムシ属 ネズミワムシ科	16,000	5.5%	ゾウミジンコ ゾウミジンコ科	10,000	3.4%
令和4年度	ゾウミジンコ ゾウミジンコ科	20,814	77.8%	ケンミジンコ目(幼体) カイアシ綱	1,930	7.2%	カブトミジンコ ミジンコ科	1,364	5.1%
令和5年度	ハネウデワムシ属 ヒゲワムシ科	440,800	76.8%	<i>Tintinnopsis</i> 属 スナカラムシ科	74,320	13.0%	カイアシ亜綱(ノープリウス) カイアシ綱	16,700	2.9%
令和6年度	ハネウデワムシ属 ヒゲワムシ科	530,000	80.1%	<i>Tintinnopsis</i> 属 スナカラムシ科	94,100	14.2%	ゾウミジンコ ゾウミジンコ科	26,020	3.9%

原生動物
 輪形動物
 節足動物



※平成28年度の河川水辺の国勢調査マニュアルの改訂により、動植物プランクトン調査の調査頻度や調査方法の変更が行われた。また平成27年度調査より動植物プランクトンの分類体系が大きく変更されたことから、ここでは平成28年度以降調査結果を整理対象とした。

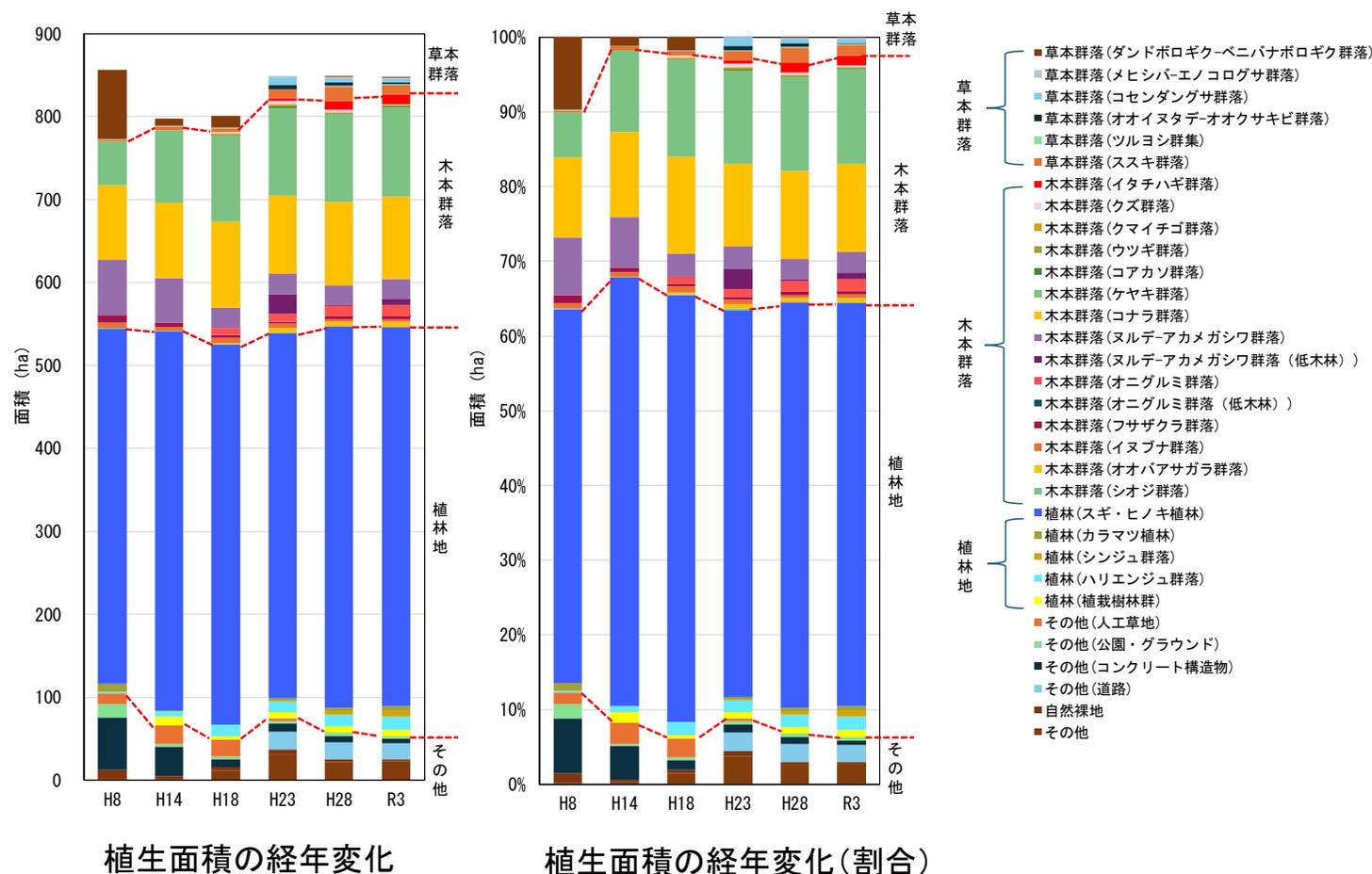
注1) 定期水質調査地点の表層1/4層の種別の細胞数データを使用した。

注2) 細胞数は年間(3季(5月、8月、11月))の総合計とした。種数は年間(3季(5月、8月、11月))の総種数とした。

植物① ダム湖周辺(500mの範囲)における植物群落の経年変化

■ 最新の令和3年度調査において最も割合が高かったのは、スギ・ヒノキ植林で全体の約54%を占めた。次いでケヤキ群落約13%、コナラ群落約12%と植林地と落葉広葉樹林が約8割を占めた。

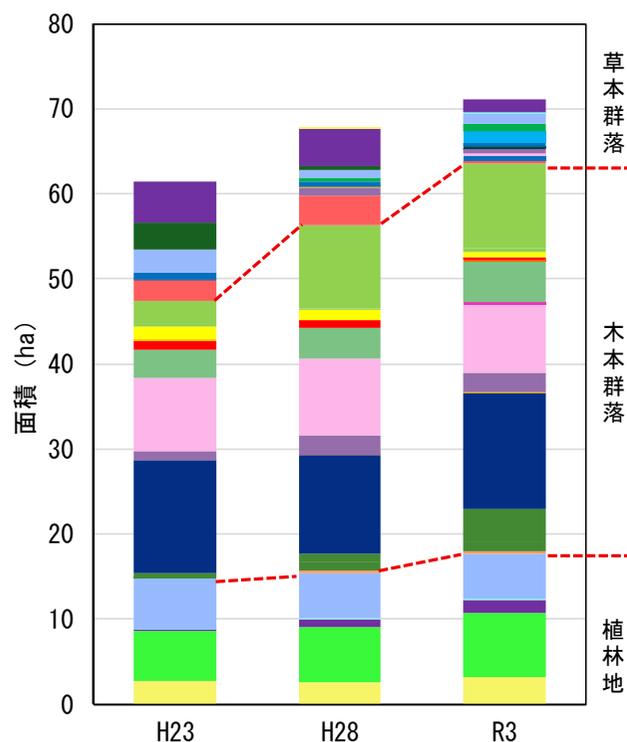
■ 草本群落はやや増加傾向であるが、全体の構成種や構成割合に大きな変化はみられなかった。



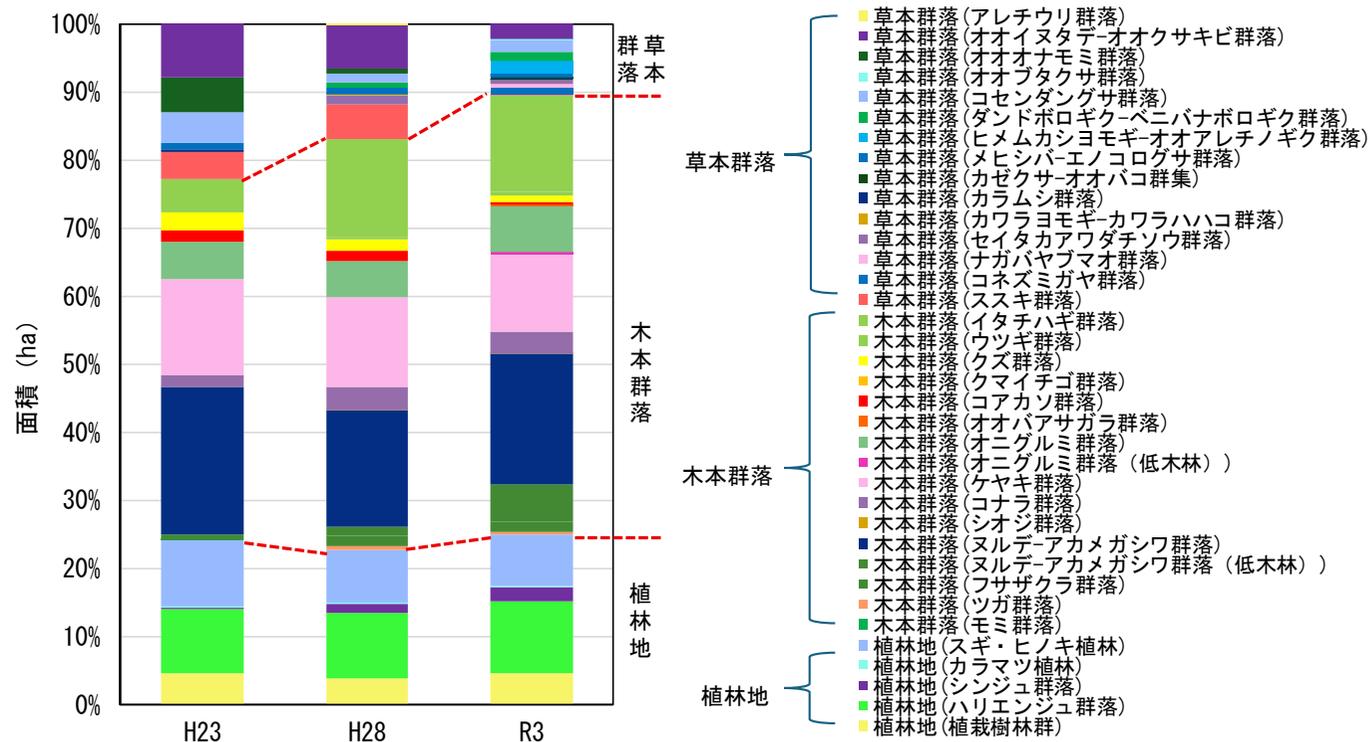
注1) 開放水面は除外して面積集計した。また、平成23年度と平成28年度及び令和3年度は調査範囲が異なる。

植物② ダム湖岸 (50mの範囲) における植物群落の経年変化

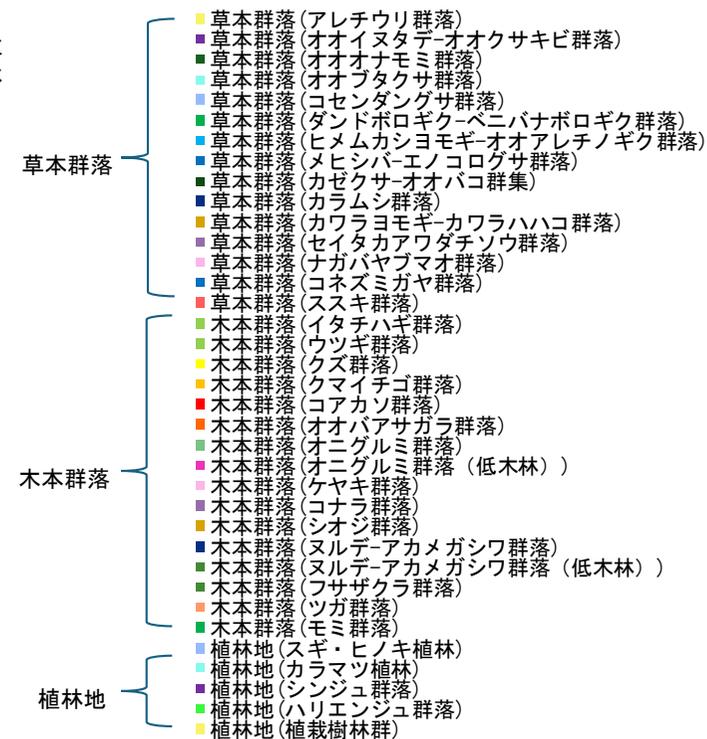
- 最新の令和3年度調査において、最も面積割合が高かったのはヌルデアアカメガシワ群落で全体の約22%を占めた。次いでイタチハギ群落は約16%、ケヤキ群落は約13%を占めた。
- 落葉広葉樹林は、オニグルミ群落は横ばいであり、ヌルデアアカメガシワ群落がやや増加傾向にある。
- 草本群落では、主にススキ群落およびオオイヌタデ-オオクサキビ群落に減少傾向がみられる。



ダム湖岸植生面積の経年変化



ダム湖岸植生面積の経年変化(割合)



ダム湖周辺・流入河川・下流河川における両生類の経年変化

- ダム湖周辺では、源流部に生息するカジカガエル、ナガレタゴガエル、ヒガシヒダサンショウウオや、細流部に生息するヤマアカガエル、モリアオガエル等が継続的に確認されていることから、沢地形や林床が湿潤な状態にある可能性が高い。
- 下流河川では、源流部に生息するカジカガエル、細流部に生息するヤマアカガエルが確認されているため、空隙のある河床の砂礫は維持されている可能性がある。
- ダム湖岸や下流河川では、特定外来生物のウシガエルは平成9年度から令和4年度まで確認されていない。

下流河川・ダム湖周辺・流入河川で確認された両生類の経年変化

科名	和名	生息環境区分			生息場所		生息地域 荒川水系	7～8年度 [確認の有無]	9年度 [全域個体数]	10年度 [全域個体数]	11年度 [全域個体数]	平成16年度での [確認個体数/地区]			平成24年度での [確認個体数/地区]			令和4年度での [確認個体数/地区]		
		両生類の源流	両生類の細流	氾濫原の両生類	成体	産卵場所						下流河川	ダム湖岸及び周辺	流入河川	下流河川	ダム湖岸及び周辺	流入河川	下流河川	ダム湖岸及び周辺	流入河川
サンショウウオ科	ハコネサンショウウオ	○			地表	全く日光の射さない伏流水の岩	●													
	ヒガシヒダサンショウウオ	○			地表	日光の射さない大きな石の下、伏流水	●						1				1			
	クロサンショウウオ		○		地表	森林が隣接している池や沼や沢の溜み	●	○												
イモリ科	アカハライモリ		○		水中	水中の草や枯葉	●													
アオガエル科	カジカガエル	○			樹上 地表	溪流中の岩石や瀬の転石	●	○	4	4	6	228	68	352	3	2	2	6	11	69
	シュレーゲルアオガエル		○		樹上 地表	池沼周辺の土中	●													
	モリアオガエル		○		樹上 地表	池沼周辺の樹木の枝先	●					1	55		1			1	51	
ヒキガエル科	アズマヒキガエル		○		地表	緩やかに流れる湿地や山道の水たまり	●	○	100	100	1		30	153		21	1		123	201
アマガエル科	ニホンアマガエル		○		樹上 地表	里山の沼や緩やかに流れる湿地	●		2											
アカガエル科	タゴガエル	○			地表	溪流沿いの伏流水、沢の岩や落葉の下	●			1				2		1				
	ナガレタゴガエル	○			地表 (水中)	溪流の緩やかな流れの淀みや瀬	●	○						1					1	
	ヤマアカガエル		○		地表	河川や沢の弱い流れのある止水	●	○	100	100	100	82	11	707	12	13	1	2	1	1061
	ツチガエル		○		地表	河川の水草や水中の枝	●	○												
	ウシガエル			○	地表 (水中)	平地の河川やダム湖の水面	●	○												



モリアオガエル



ヤマアカガエル

● もともと、伏流水の流れる隙間の隙間、溪流の淵や水たまり、溪流の岩の下に産卵し、岩の下や空隙の多い石礫間にて幼生が生息する種である。確認されれば、沢地形や溪流において、樹林に覆われた伏流水もしくは流れの速い源流が存在しており、河川において、河床に空隙のある石礫が多い。

○ もともと、緩やかな流れのある水域の水中にて幼生が生息する種である。多く確認されれば、山腹の林床において、遅い流れのある水域が存在しており、河川においては、流れの多くが植生に接している緩流となっている。

○ もともと、氾濫原の代償として水田に生息する種である。確認されれば、ダム湖岸において、水位操作がたまたまい氾濫原の代償となっている可能性があり、河川においては、河道に止水域が多くある。

生息地域：「●」は、荒川水系の水機構ダムのいずれかで確認された種

確認個体数：捕獲或いは目撃した成体、幼生、孵化幼生は一個体を、目撃した卵塊は一塊を、鳴き声は発生源一箇所を「確認個体数1」として集計した数値である。複数の調査地区分を合わせて、地区数で割り、単位を[確認個体数/地区]とした。なお少数点以下を四捨五入し、0<n<0.5は1とした。

参考：「河川生態学」川那部浩哉 水野信彦 監修、田口勇輝 他執筆、P144～P145、講談社
「野外観察のための日本産両生類図鑑第3版」関慎太郎 著、松井正文 監修、緑書房
「決定版 日本の両生爬虫類」内山りゅう 前田恵男 他著、平凡社
「カエル・サンショウウオ・イモリのオタマジャクシハンドブック」松井正文 解説、関慎太郎 写真、文一総合出版

調査地区： 下流河川 ～ 荒浦下1、荒浦下2
(令和4年度) ダム湖岸及び周辺 ～ 荒浦湖3、荒浦湖7、荒浦湖4、荒浦湖1、荒浦湖2、荒浦他1、荒浦湖5、荒浦他7、荒浦湖6
流入河川 ～ 荒浦入1

生物15 ダム湖周辺・流入河川・下流河川における爬虫類・哺乳類の経年変化

ダム湖周辺において、林床や草地を生息場とする爬虫類、哺乳類の観察数は増加傾向であり、生息場としての林床や草地が適切な状態へ向かっている可能性がある。イノシシの観察数は増加傾向であり、林床や草地への影響が懸念されるニホンジカの観察数は概ね横ばい状態である。

外来種については、アライグマが最新の令和4年度調査で初めて確認され、ハクビシンの観察数が増加傾向にある。

ダム湖周辺・流入河川・下流河川で確認された爬虫類・哺乳類の経年変化

Table with columns for species (区分), names (科名, 和名), habitat (生息場区分), habitat types (生息場所), feeding habits (捕食関係区分), diet (食性), and observation counts (観察数) from 7-8 years ago to the Heisei 24th year.

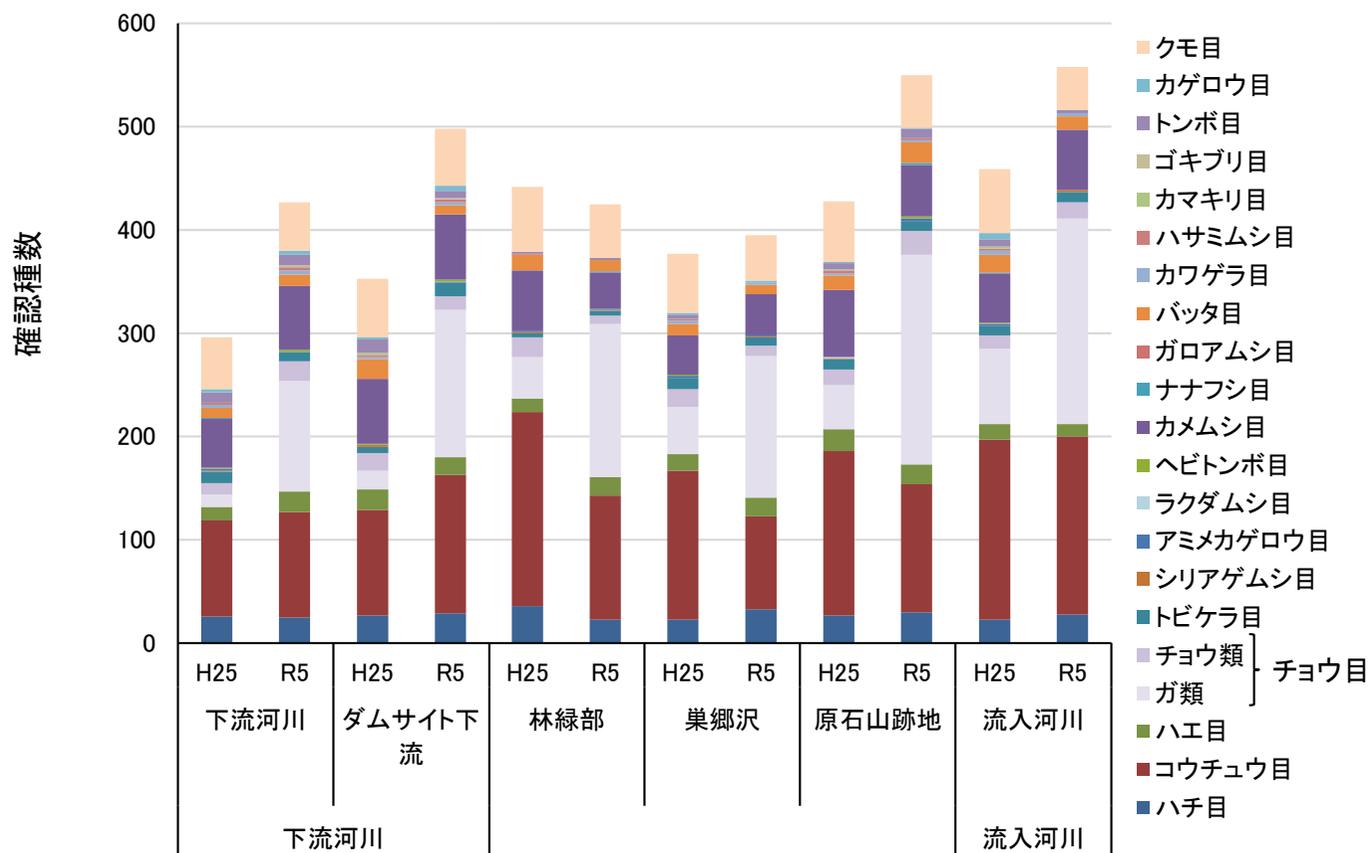


アライグマ(足跡)

Legend for habitat types and feeding habits. Includes text explaining observation methods and data sources. Reference: 決定版 日本の両生類爬虫類 内山りゅう・前田憲男・他著、平凡社

各調査地区における陸上昆虫類等の経年変化

- 河川水辺の国勢調査マニュアル改訂後に実施された平成25年度調査と令和5年度調査について、継続実施された調査地区ごとの確認種数を比較すると、林縁部を除く5地区で増加傾向がみられた。
- 比較した調査地区の全てでガ類(チョウ目)が大きく増加している。



陸上昆虫類等の種数経年変化

ダム湖面及びダム湖岸を利用する鳥類の経年変化

※評価対象期間外の分類群

ダム湖内ではカルガモ、マガモ等のカモ類に増加傾向がみられた。

Table with columns for bird classification (鳥類の分類), important species designation (重要種の指定), seasonal migration type (季節移動型), life type (生活型), and survey content (採餌内容). It includes detailed data for various bird species across different dam lake environments (water surface, shoreline, forest) from 2017 to 2029.

調査地区: 下流河川 ~ 荒浦下2 (平成29年度) ダム湖内及び周辺 ~ 荒浦湖6, 荒浦湖4, 荒浦他2, 荒浦他3, 荒浦他4, 荒浦他6, 荒浦他1, 荒浦他5, 夜間湖周 流入河川 ~ 荒浦入1

(00): 湖面, 水位変動域, 広域定地点

参考: 「フィールド総合図鑑」の生物; 財団法人リバーフロント整備センター編, 山海堂 「DVDブック」知っておきたい鳥の声120 上田秀雄著, 山と溪谷社 「日本で見られる287種判別」のポイント「野鳥」; 真木広道監修, 長岡書店 「はっと見分け観察を楽しむ野鳥図鑑」; 樋口広彦監修, ナツメ社

主な生息場所にて確認された鳥類の経年変化(ダム湖及び周辺)

環境保全対策 希少猛禽類保全対策

- 浦山ダム周辺では1つがいのクマタカの生息が確認されており、繁殖や採餌場所として利用されている。平成27年度以降には1年おきに繁殖成功している。
- 調査結果から本種の生息環境は良好に保全されているものと考えられる。
- これまで28年間実施されてきた調査で蓄積された情報を整理し、「クマタカの生息動向」及び「環境基盤の変化」について総合的に検討した結果、クマタカの流域個体群が存続しており、今後も生息が継続していくものと考えられる。

浦山ダム周辺に生息するクマタカつがいの繁殖状況

年	平成9年	平成10年	平成11年	平成12年	平成13年	平成14年	平成15年	平成16年	平成17年	平成18年	平成19年	平成20年	平成21年	平成22年	平成23年	平成24年	平成25年	平成26年	平成27年	平成28年	平成29年	平成30年	平成31年/ 令和元年	令和2年	令和3年	令和4年	令和5年	令和6年		
ダム建設 事業歴	試験湛水中			ダム供用後																										
Cつがい	× 【巢-B】 ■H8生まれの 若鳥を確認 育雛期中断	× 【巢不明】 ■H8生まれの 若鳥を確認 育雛期中断	× 【巢-C】 育雛期中断	◎ 【巢-A】 育雛期中断	◎ 【巢-B】 ■H13生まれの 若鳥を確認	—	◎ 【巢-B】 ■H15生まれの 若鳥を確認 繁殖兆候確認	—	—	◎ 【巢-B】 ■H18生まれの 若鳥を確認	—	—	—	—	—	—	—	× 【巢不明】 育雛期中断 (幼鳥未確認)	—	× 【巢-E】 抱卵期中断	◎ 【巢-D】 繁殖兆候確認	—	◎ 【巢不明】 ■H29生まれの 若鳥を確認 繁殖兆候確認	—	◎ 【巢不明】 ■R1生まれの 若鳥を確認 抱卵または育 雛期中断	× 【巢-D】 抱卵または育 雛期中断	◎ 【巢不明】 繁殖兆候確認	—	◎ 【巢不明】 ■前年生まれ の若鳥を確認 繁殖兆候確認	—

【凡例】◎：繁殖成功 ×：繁殖途中失敗 —：繁殖未確認



クマタカ成鳥雌
(Cつがい, 令和6年10月30日)



クマタカ成鳥雄
(Cつがい, 令和6年2月7日)

環境保全対策 希少猛禽類保全対策

- コアエリア(高利用域)にダム湖が含まれ、ダム事業による環境変化に関連の深いクマタカCつがいは、試験湛水中からダム供用後の26ヵ年で繁殖成功率が32.1%となっており、クマタカの繁殖成功率の全国平均(33.2%) [出典: 日本鳥学会誌64(2): 195-206, 2015年1月] と同等であった。
- 試験湛水以降のクマタカCつがいの繁殖成功率は、全国平均と同等となっており、当該地域では安定したクマタカの生息環境が保たれているものと考えられる。

クマタカCつがいの繁殖成功率

つがい名	繁殖成功率	備考 (繁殖成功回数/調査回数)
Cつがい	32.1%	(9繁殖期/ 28繁殖期)

- 平成9年以降毎年実施してきたクマタカの流域個体群を把握する猛禽類調査を令和7年で終了し、今後は河川水辺の国勢調査(鳥類調査)に移行する。猛禽類調査の結果を踏まえた河川水辺の国勢調査(鳥類調査)について、学識者の助言を受けながら検討していく。

生物のまとめ①

生物5

生物6

生物7

■ 魚類は、ダム湖内にはダム湛水前から河川に生息する在来種のギンブナ等のほか、放流魚のワカサギが確認されている。外来魚のコクチバス、ブルーギル、オオクチバスには減少傾向がみられる。流入河川では、確認種数に概ね変化はみられないが、国内移入種のサクラマス(ヤマメ)に減少傾向がみられる。下流河川では、確認種数に減少傾向がみられるものの、確認個体数には大きな変化がみられない。

生物8-9

■ 底生動物は、優占種の個体数割合については年変動があるものの、ハエ目以外の節足動物が8割程度、ハエ目が2割程度で推移している。下流河川では、生活型分類にやや年変動がみられたが、材料型分類では大きな変化はみられない。流入河川では、生活型分類及び材料型分類ともに大きな変化はみられない。

生物10-11

■ 植物プランクトンは、緑藻綱や珪藻綱の確認種数が多く、また動物プランクトンは、輪形動物の確認種数が多く、経年的に顕著な変化傾向はみられていない。経年的な増減の傾向から、輪形動物が珪藻綱を捕食する標準的で適切な捕食関係が継続していると考えられる。

生物12-13

■ 植物は、ダム湖周辺(500mの範囲)における全体の構成種や構成割合には、大きな変化がみられない。ダム湖岸(50mの範囲)における草本群落では、主にススキ群落等に減少傾向がみられる。

生物14-15

■ 両生類は、樹林内の源流や細流に生息する種が維持されている。また、特定外来生物のウシガエルは平成9年度から令和4年度まで確認されていない。爬虫類・哺乳類では林床や草地を生息場とする種は増加傾向であり、林床や草地が適切な状態へ向かっている可能性がある。

生物16

■ 陸上昆虫類等は、林縁部を除く調査地区では確認種数は増加傾向であった。比較した調査地区の全てでガ類(チョウ目)が大きく増加している。

生物18-19

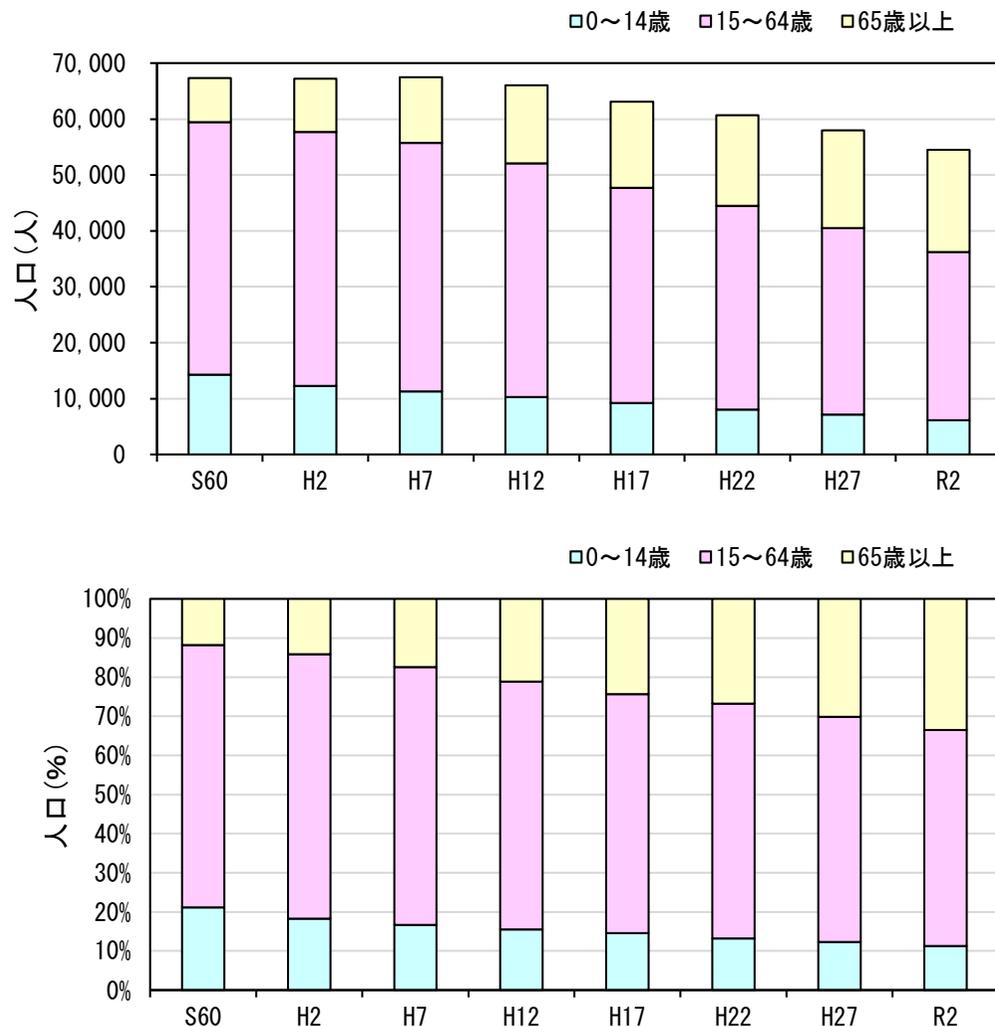
■ 希少猛禽類は、平成9年以降、クマタカの流域個体群が存続しており、今後も生息が継続していくと考えられる。

【今後の方針】

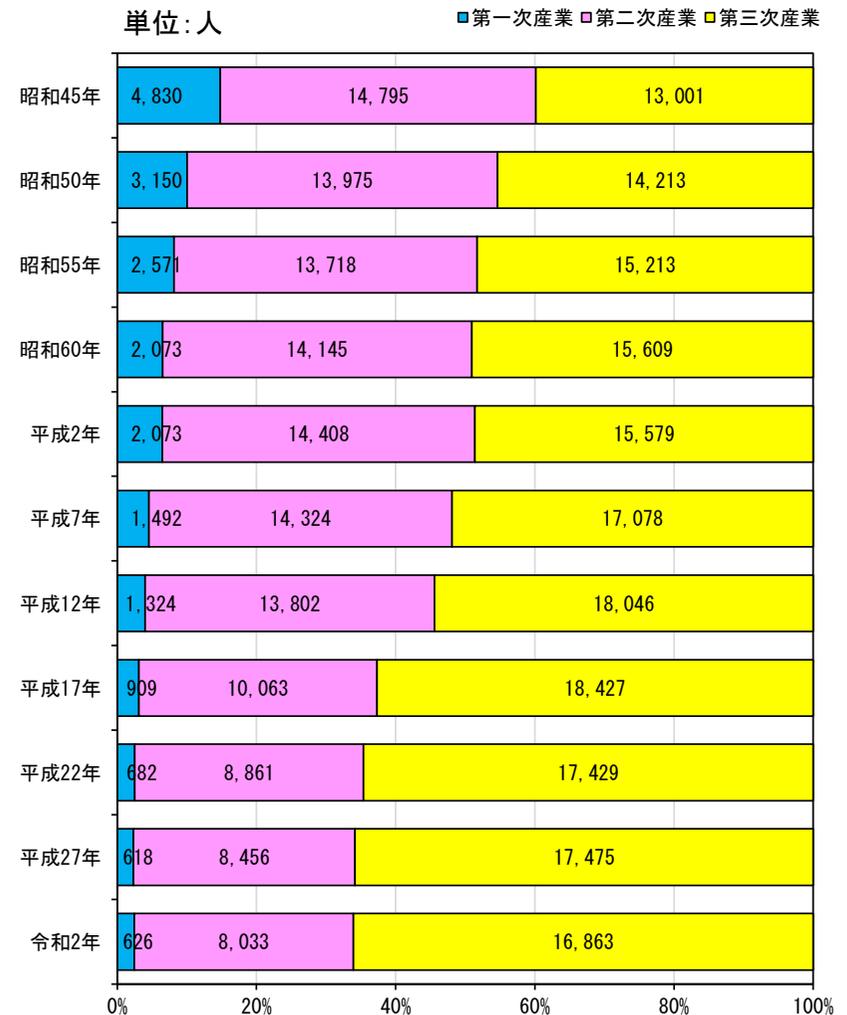
- 河川水辺の国勢調査マニュアルに基づいた全体傾向や経年状況の把握のための生物調査を引き続き実施していく。
- 平成9年以降毎年実施してきたクマタカの流域個体群を把握する猛禽類調査を令和7年で終了し、今後は河川水辺の国勢調査(鳥類調査)に移行する。猛禽類調査の結果を踏まえた河川水辺の国勢調査(鳥類調査)について、学識者の助言を受けながら検討していく。

- 浦山ダムの水源地域である旧秩父市・旧荒川村の人口は、減少傾向であり、少子高齢化が進行し、令和2年における65歳以上の高齢者が人口の約33%を占めている。
- 産業就業別人口割合は、第三次産業の割合が増加傾向となっている。

◆水源地域(旧秩父市・旧荒川村)の3階級別人口

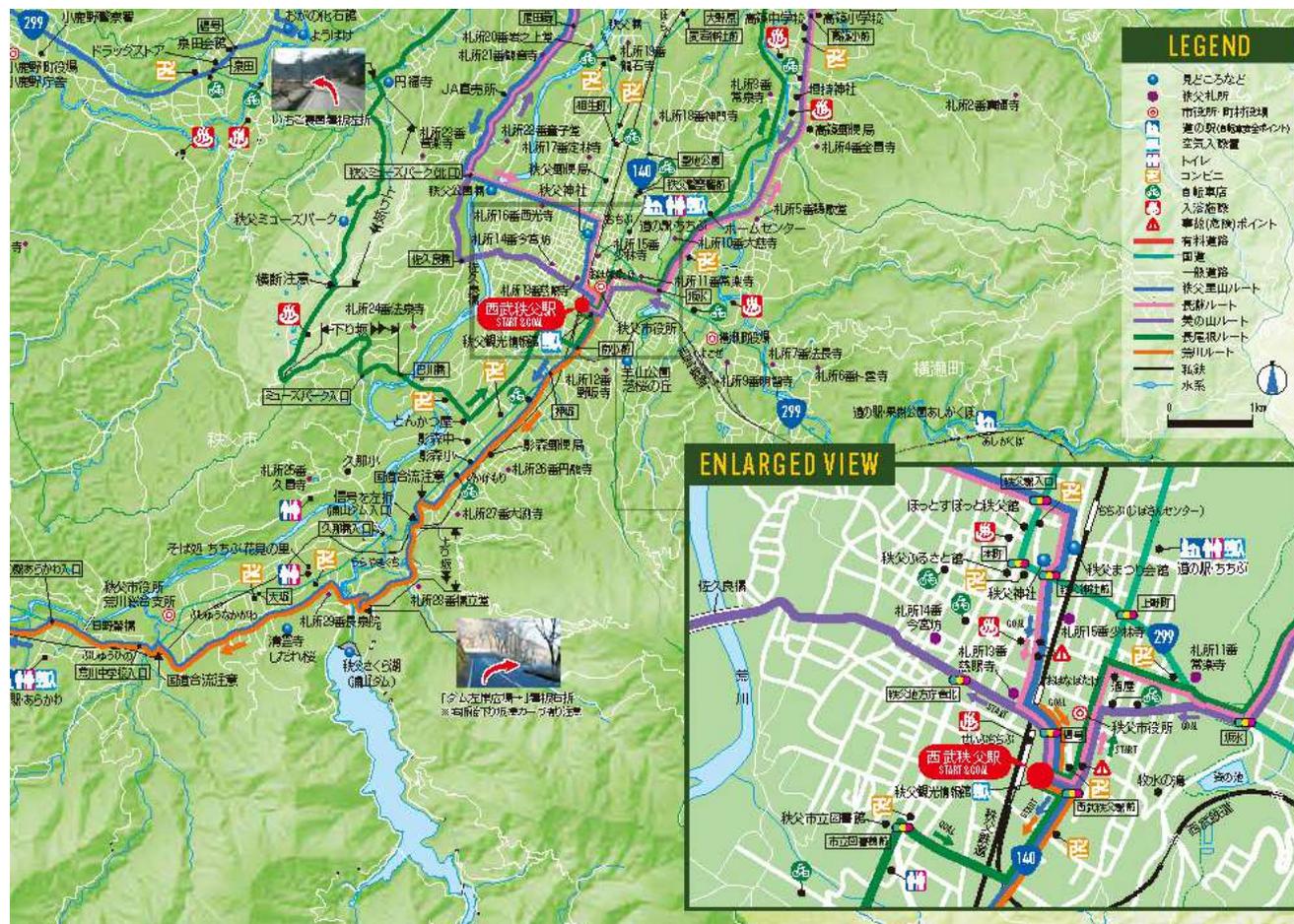


◆水源地域(旧秩父市・旧荒川村)の産業別就業人口



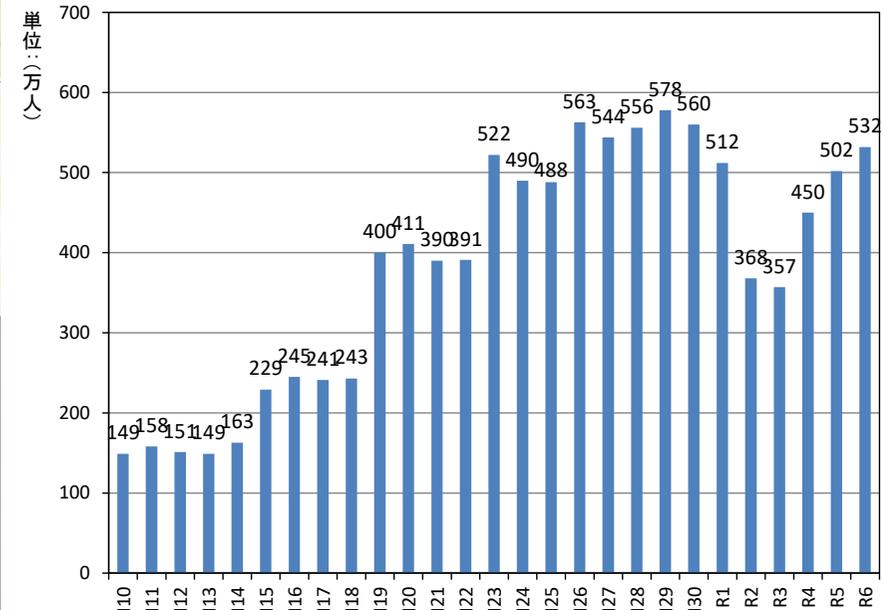
水源地域周辺の観光(1)

- 浦山ダム周辺は優れた自然環境や歴史資源を活用した多様なレクリエーション活動が展開されている。秩父市街地を一望できる羊山公園には秩父の新名所「芝桜の丘」がある。
- 観光入込客数は、令和2年度以降は新型コロナウイルスの感染拡大による影響で減少したが、その後、徐々に回復傾向にある。



出典：秩父観光ナビ

秩父市内 観光マップ



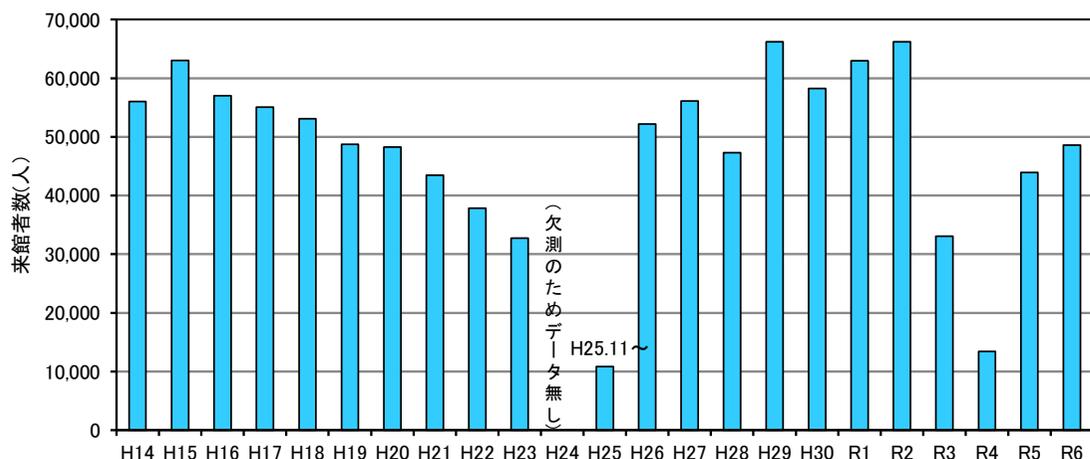
注) 平成19～30年は合併後の新秩父市のデータ

出典：平成30年浦山ダム定期報告書(H19以前)、埼玉県HP(H20-R5)

秩父市の観光入込客数の推移

- 浦山ダム周辺には、浦山ダム資料館(うららぴあ)をはじめ、橋立鍾乳洞、清雲寺等があり、施設利用を目的とした来訪者が多い。
- 浦山ダム資料館(うららぴあ)の訪問者数は、令和2年度以降、新型コロナウイルスの感染拡大による影響で訪問者の減少がみられたが、令和5年度以降は増加傾向となっている。

◆浦山ダム資料館(うららぴあ)の訪問者数

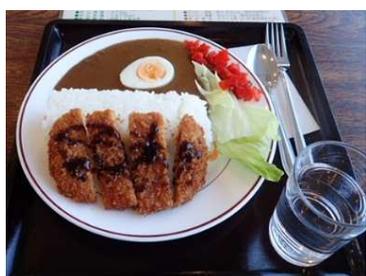


※H14~H23:うららぴあ来訪者数で確認、H25~R6:ダム堤体頂部パスカウンターで確認。

※H24については、来訪者の確認をしていない。



浦山ダム資料館(うららぴあ)



浦山ダムカレー



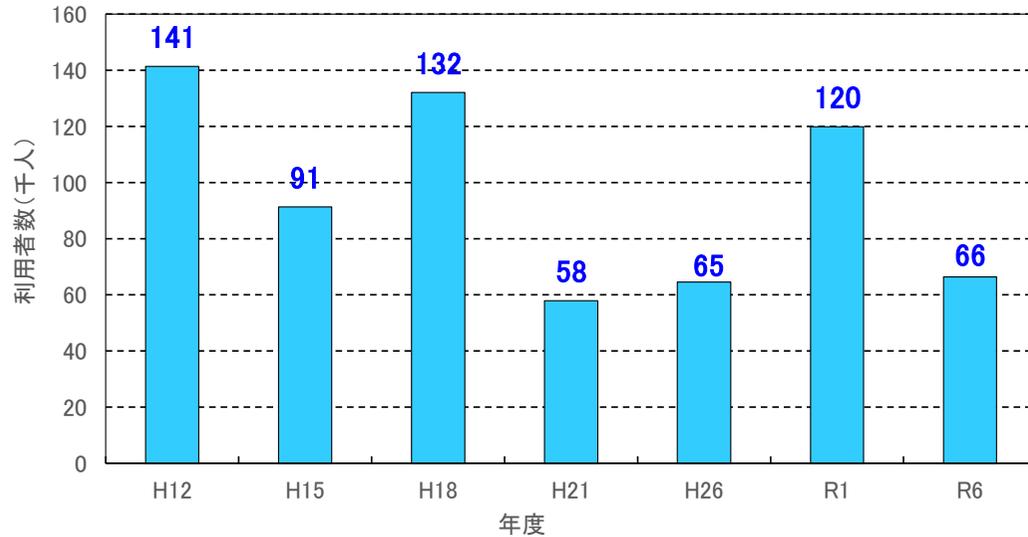
橋立鍾乳洞



清雲寺(しだれ桜)

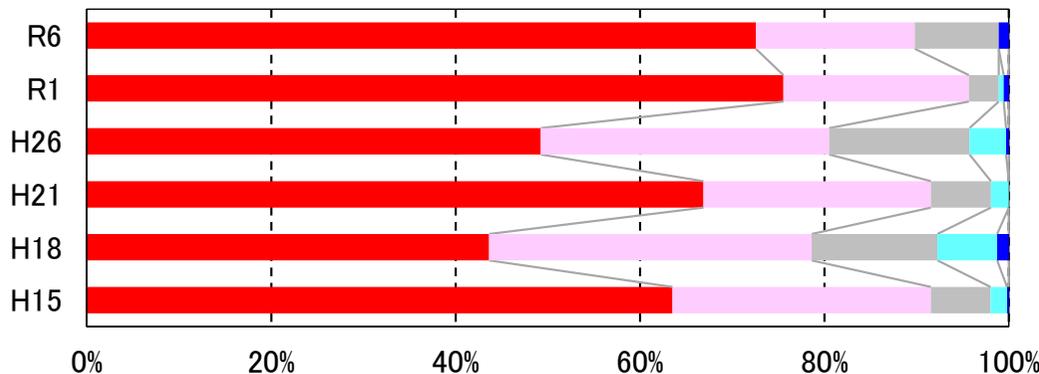
- 浦山ダムにおける年間利用者数は、令和6年度(ダム湖利用実態調査)において約6万6千人となっている。利用形態別にみると、散策、施設利用が多い結果となった。
- アンケート調査の結果、80%以上の方が「満足」、「まあ満足」という結果であった。

◆年間利用者数の推移

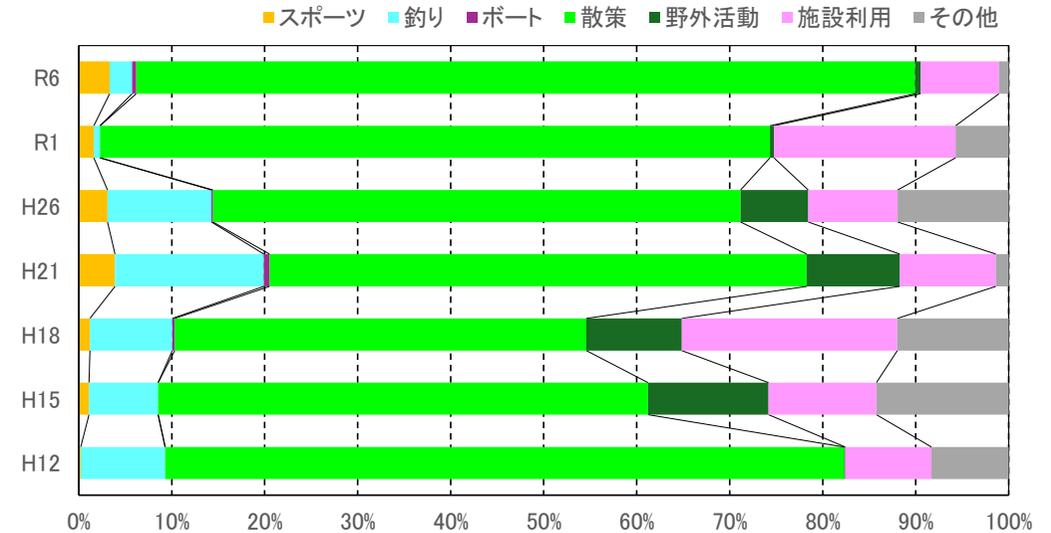


◆アンケート調査結果(満足度の推移)

- 満足している
- まあ満足している
- どちらともいえない
- やや不満である
- 不満である



◆利用形態別年間利用者の推移



◆主な意見・要望(令和6年度調査結果)

<「満足」・「まあ満足」の理由>

- ・ 景色が良い。
- ・ 自然が豊か。
- ・ ダムが大きくて迫力がある。ダムから見た景色に感動した。
- ・ ダムカードがあるのが良い。
- ・ 混雑しておらず、静かが良い。良い気分転換になった。
- ・ エレベーターが利用できるのが良かった。
- ・ ダム内部を見学できるのが良かった。景色がゲームや映画の世界のようで面白かった。
- ・ 無料で見学できて良かった。
- ・ 資料館の資料が豊富で良かった。

<「不満」・「やや不満」の理由>

- ・ ダムまでの道中の道路が汚かった。
- ・ 道中の植物が管理されていない。
- ・ トイレが汚かった。
- ・ 喫煙所が無い。

水源地域ビジョン(1)

■ 荒川ダム水源地域ビジョン

- ・荒川ダム水源地域ビジョンは、滝沢ダムの完成に合わせて、隣接する二瀬ダムと連携して平成16年3月に策定された。
- ・平成20年9月「秩父4ダム連携検討会」を正式に立ち上げ、秩父地域の1市4町及び関係機関の賛同を得て、「荒川ビジョン推進協議会」が平成29年2月に新たに設立された。
- ・荒川ビジョン推進協議会では、荒川流域の活性化と地域住民の交流等を推進するための活動として、助成事業を活用した取り組み、上下流交流、各種勉強会、大学との連携等を実施している。ダム管理者として、本協議会事務局と一体となって取り組みを進めている。
- ・「秩父4ダム」では、上下流交流として「4ダム探検隊が往く！」を実施している。

※秩父4ダム：浦山ダム・滝沢ダム・二瀬ダム・合角ダム

新たな荒川ビジョンの組織体系について

- 組織運営について
 - ・荒川ビジョン推進協議会を母体とした、ダム周辺地域毎の自由な発想と独自性を生かした活動に期待し、大滝推進協議会、浦山推進協議会、合角推進協議会を発足した。
 - ・荒川源流地域のすべての自治体(1市4町)をメンバーとした。
- 運営資金について
 - ・トンネル焼酎の保管料及び各種助成金等を充てる。
- 事務局
 - ・NPO法人「森」が事務局を担当する。



過去に例のない源流地域全体を巻き込み地域に根付くビジョンとして再スタート

荒川ビジョンの組織体系

◆「秩父4ダム探検隊が往く！」の実施状況

秩父4ダム探検隊が往く！

令和6年7月27日(土)開催

二瀬ダム
国土交通省
管理開始から33年

浦山ダム
独立行政法人 水資源機構
管理開始から25年

合角ダム
「水の国」さいたま 埼玉県
管理開始から27年

滝沢ダム
独立行政法人 水資源機構
管理開始から16年

水はどこから来るのか？
川はどこから流れているのか？
秩父は、荒川・隅田川の源です。そこには大切な水を守りみなさんの生活を支え、暮らしをおびやかす洪水からみなさんを守っている4つのダムがあります。
秩父4ダムを巡りながら、秩父の自然、文化に触れ、水について考えてみませんか。

全体説明



滝沢ダムでの説明



浦山ダムでの見学



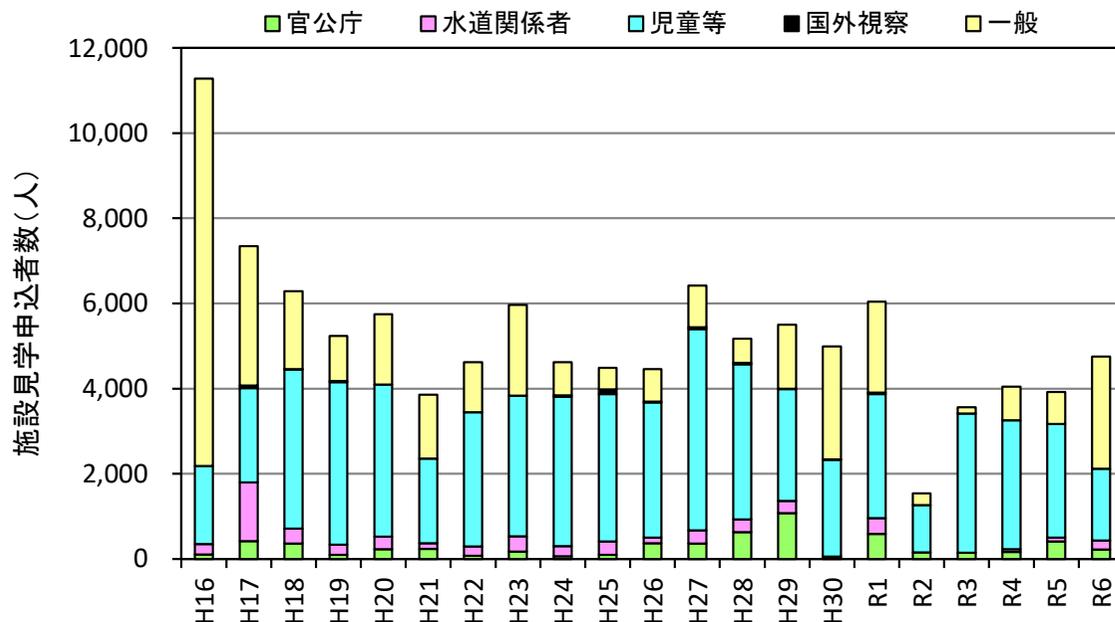
二瀬ダムでの説明



合角ダムでの見学

- 事前申込による浦山ダム施設見学の見学者数は、4,000～6,000人/年であり、小・中学生の見学がもっとも多く、教育施設としての役割も担っている。令和2年度には新型コロナウイルスの感染拡大による影響で、一時的に減少したが、徐々に増加傾向にある。
- 浦山ダムでは、出前講座、ダム見学会、ダム堤体のライトアップ等が行われ、地域の一員として、地域のイベントへの協力、清掃活動にも参加している。
- その他の大規模なイベントとして、ダム堤体上において痛車ミーティング & コスプレ撮影会「進撃の浦山ダム」が平成26年より開催されている。

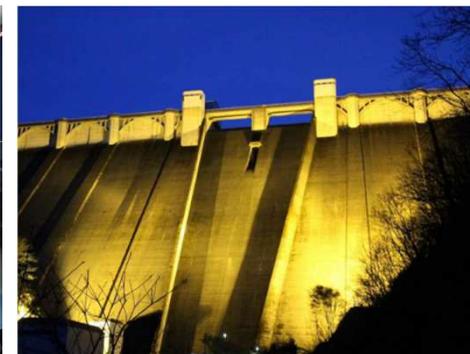
◆浦山ダム施設見学申込者数の推移



※令和6年度からは官公庁と国外視察の集計を統一している。



出前講座(荒川東小学校)



浦山ダム堤体のライトアップ



痛車ミーティング & コスプレ撮影会「進撃の浦山ダム」



- 秩父さくら湖内では、ブラックバスやワカサギ等の釣り、カヌー、ボート等の水上スポーツの利用も多い。
- 荒川ダム総合管理所のホームページ等で、湖面利用のルール等の情報を発信している。



釣り



カヌー、ボート



秩父さくら湖の利用案内

秩父さくら湖（浦山ダム）の利用方法について、令和6年6月26日以降、以下のとおり変更します。

I. 湖面の利用方法

1. 湖面への進入は、右岸の日向管理用道路とします。
2. 日向進入路の開放時間は、以下のとおりとします。
必ず閉門までに利用を終えて退出してください。

開門 7:15 閉門 17:00

ただし、荒天時、その他ダム管理上必要な場合には、予告無く日向進入路の利用を中止することがあります。

また、年末年始（12/28～1/5）の利用はできません。

※9/7(日)、9/17(水)、9/18(木) は終日、利用できません。

3. 湖面利用の安全のため、「入湖届け」の記入をお願いします。→
記入した入湖届けは、進入路入口の看板に備え付けのポストに投函をお願いします。

入湖届け様式 

4. 日向進入路内の駐車はご遠慮ください。
また、日向進入路内の事故、盗難等は一切責任を負いかねます。

II. 利用時の注意事項

秩父さくら湖の利用について 

さくら湖利用計画 

1. 安全のため、必ずライフジャケット（救命胴衣）を着用してください。
2. 船の航行の際には、危険ですのでフロートに近づかないでください。
3. 湖面及び水中に流木が浮遊している場合がありますので、ご注意ください。
4. 水質保全のため、燃料式船外機の使用は禁止しています。
（電動式船外機の使用は可能です）
5. ブラックバス等外来種を捕獲した場合は再放流及び生きたままの持ち出しは禁止しています。
（参考：埼玉県ホームページ「埼玉の水産／委員会指示」）
6. ゴミは捨てずに持ち帰りましょう。ゴミの不法投棄は法律により罰せられます。
7. たき火等の火気の使用は禁止しています。

秩父さくら湖の利用案内の公開(荒川ダム総合管理所HP)

水源地域動態8

- 浦山ダムでは、ダムを紹介した動画をYouTubeにて発信している。この動画のナレーションは、ちちぶエフエム(株)のパーソナリティーによるものであり、地域愛にあふれた内容となっている。
- ダムの効果や魅力を分かりやすく伝えるため、ホームページやX(旧Twitter)を通じてダムやその周辺に関する情報を配信している。

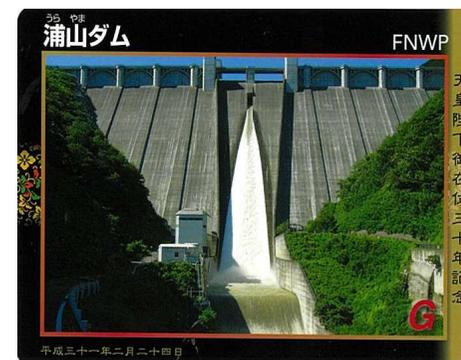
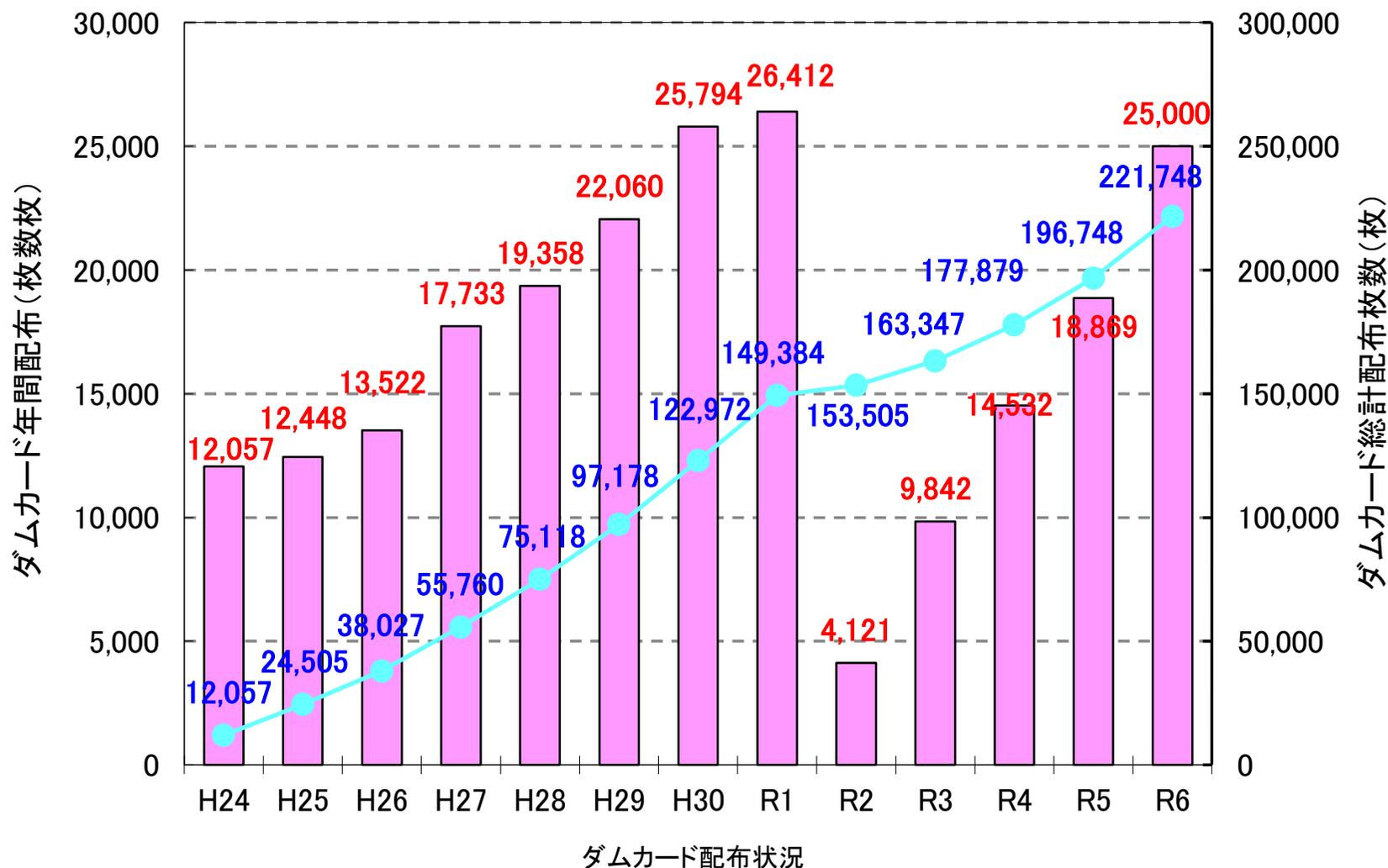


ダムの紹介動画(YouTube)



X(旧Twitter)を通じた情報配信

- 見学者、管理所来訪者に1枚/人限りで「ダムカード」を配布している。
- 平成24年度の配布開始から現在まで、特別カード(天皇陛下在位30周年、ダム管理開始20周年記念)を含めて約22万2千枚を配布した。令和2年度は新型コロナウイルスの感染拡大による影響で配布枚数が減少しているが、徐々に回復傾向にある。



水源地域動態のまとめ

- ダム水源地域の人口は減少傾向である。また、産業別就業人口割合では第三次産業の割合が増加傾向となっている。
- ダム湖周辺には浦山ダム資料館(うららびあ)をはじめ、橋立鍾乳洞、清雲寺等があり、施設利用を目的とした来訪者が多い。
- 荒川ダム水源地域ビジョンについては、荒川ビジョン推進協議会を発足し、上下流交流、各種勉強会等を実施しており、ダム管理者としても本協議会事務局と一体となった取り組みを進めている。
- 浦山ダムでは、出前講座、ダム見学会、ダム堤体のライトアップ等が行われ、地域の一員として、地域のイベントへの協力、清掃活動にも参加している。その他の大規模なイベントとして、ダム堤体上において痛車ミーティング & コスプレ撮影会「進撃の浦山ダム」が平成26年より開催されている。
- YouTubeやホームページ、ダムカードの配付等でダムの魅力や役割等の理解促進に積極的に取り組んでいる。

水源地域動態1

水源地域動態2

水源地域動態3

水源地域動態4

水源地域動態5

水源地域動態6

水源地域動態8

水源地域動態9

【今後の方針】

- 水源地域の動態やダム湖周辺の利活用状況等の把握を引き続き実施していく。
- 水源地域の活性化のため、荒川ビジョン推進協議会の活動をはじめ、「地域に開かれたダム」として積極的に地域交流に取り組み、今後も引き続き連携強化を推進していく。